

## 近代日本語における欧文の直訳による表現の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木下, 孝雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/16712">http://hdl.handle.net/10291/16712</a>

明治大学大学院 文学研究科

2013年度

博士学位請求論文

近代日本語における欧文の直訳による表現の研究

A Study of Literally Translated Expressions

from English in Modern Japanese Language

学位請求者 日本文学専攻

八木下 孝雄

# 目次

序章.....	1
1 研究の目的.....	1
2 先行研究と定義.....	1
3 本論文の構成.....	5
4 凡例.....	6
第1部 英語教育・英語学習における訳出法.....	7
第1章 <i>New National 1st Reader</i> における訳出法.....	9
1 調査資料.....	9
2 調査方法.....	10
3 調査結果.....	12
4 考察.....	28
5 まとめ.....	35
第2章 <i>New National 2nd Reader</i> における訳出法.....	37
1 調査資料.....	37
2 調査方法.....	39
3 調査結果.....	40
4 考察.....	60
5 まとめ.....	67
第3章 <i>New National 3rd Reader</i> における訳出法.....	69
1 調査資料.....	69
2 調査方法.....	71
3 調査報告.....	72
4 考察.....	91
5 まとめ.....	98
第4章 第1部のまとめ.....	99
1 訳出パターンの変化.....	99
2 訳出パターンの固定.....	102
3 英文訓読の特徴.....	102
第2部 翻訳文における訳出法.....	103
第1章 <i>The Boscomb Valley Mystery</i> の翻訳における訳出法.....	105
1 調査資料.....	105

2	調査方法	1 0 5
3	調査結果	1 0 6
4	分析	1 1 1
5	まとめ	1 1 1
第2章	<i>Self-Help</i> の明治期翻訳における訳出法	1 1 1
1	調査資料	1 1 1
2	調査方法	1 1 3
3	各資料の訳出パターン	1 1 7
4	まとめ	1 2 5
第3章	第2部のまとめ	1 2 7
1	翻訳文における欧文直訳表現	1 2 7
2	英文訓読の影響	1 2 7
3	翻訳文のジャンルによる違い	1 2 8
第3部	翻訳以外の文章における欧文直訳表現	1 2 9
第1章	夏目漱石の文章における欧文直訳表現	1 3 1
1	調査資料	1 3 1
2	調査方法	1 3 4
3	調査結果	1 3 5
4	まとめ	1 5 1
第2章	芥川龍之介の文章における欧文直訳表現	1 5 3
1	調査資料	1 5 3
2	研究方法	1 5 6
3	調査結果	1 5 6
4	まとめ	1 6 7
第3章	第3部のまとめ	1 6 9
1	漱石作品と芥川作品に見られた欧文直訳表現	1 6 9
2	欧文直訳表現と漱石, 芥川に関わり	1 6 9
3	ジャンルによる違い	1 6 9
終章		1 7 3
	【参考文献】	1 7 9

# 序章

## 1 研究の目的

近代は、さまざまな局面で、日本が西欧と対峙し、大きな影響を受けた時代であった。言語も例外ではなく、西欧の言語は、日本語の語彙・文法・文体等に大きな影響を与えた。たとえば、欧文を直訳的に翻訳した表現は、それまで日本語にはなかった発想を促し、新しい表現構造を産んで、日本語を活性化した<sup>i</sup>。そのような欧文直訳表現について、これまでの研究では、それと目される表現とその用例を列記するにとどまるものが多く、詳細に分析・考察したものは多くない。本研究は、明治期において日本語に大きな影響を与えた要因である欧文直訳表現について調査・分析を行うことで、それらがどのような仕組みを持ち、どのような特徴を持っているのか明らかにすることを目的とする。

## 2 先行研究と定義

### 2.1 先行研究

先行研究で欧文直訳表現について論じたものを発表された順に見ていくと、まず、西欧語（特に英語）からの日本語への影響の一部として言及されるものから、欧文直訳表現に特化して論じたものへと変化していることが指摘できる。

まず、西欧語（特に英語）からの日本語への影響について述べたものとしては、Ichikawa(1928)、鹽田(1932)、吉田(1950)、乾(1958)、古田(1963)や柳父章による一連の著作などが挙げられる。西欧語から日本語への影響として、訳語や外来語などの語彙に関するものから、文体、語法等の表現、表記の方法などさまざまに論じられている。欧文直訳表現にあたる部分については、多くのものが、西欧語や英語の表現が日本語ではどの表現に相当するのかといったことを列記するに留まり、日本語文章における実例についても挙げられているものは多くはない。

次に、吉村(1963)、吉岡(1973)、木坂(1979, 1982, 1987)などが「欧文脈」や「欧文体」、「欧文直訳体」などの欧文直訳表現に特化して論じたものとして挙げられる。これらについても、西欧語や英語からの表現が日本語ではどの表現に相当しているのかといったことについて列記するものが多く、日本語文章の実例についても、記述するのみに留まったものが多い。

森岡(1999)も「欧文脈」として欧文直訳表現について特化して論じられたものの一つであるが、先行研究全体から見て、特に詳述されているものである。西欧語が日本に入ってから、それらがどのように翻訳されてきたのか、また、そこで誕生した直訳的な欧文脈がどのようなところで作られ、広まりを見せているのかということについて論じられている。欧文訓読をキーワードとして、ポルトガル語、スペイン語の翻訳から、蘭学や英学に於ての翻訳法の流れについて論じ、さらに、明治期の英語教育・英語学習で用いられたリーダーの参考書としての訳本について調査している。その中での直訳的な欧文脈の表現が、明治

---

<sup>i</sup> 森岡(1999)では、「この欧文訓読から生じたいわゆる「欧文脈」は、現代語にも大きな影響を残し、現代文は今やこれなしに書けないほどになっている。」とされている。

期以降の翻訳文や日本人の文章にどのように現れているのかについて、事例をあげながら記述している。

また、関連する先行研究としては、鈴木(1998, 2000)、野原(2000, 2001a, 2001b)等も挙げられる。鈴木(1998, 2000)では、明治期の英語学習雑誌である『英語青年』などの資料から訳出法を調査し、そこにパターンがあることを報告している。また、野原(2000, 2001a, 2001b)では、翻訳学による理論を日本語学に応用する試みがなされている。これに関連して、近年、日本における翻訳学が盛んになっていることを反映するように、Munday(2008)の翻訳(鳥飼玖美子監訳(2009)『翻訳学入門』)やPym(2010)の翻訳(武田珂代子訳(2010)『翻訳理論の探求』)、そして、柳父章ほか編『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』などが出版されている。これらの翻訳学の研究も、本研究に有益なものである。

## 2. 2 先行研究における欧文直訳表現

これまでの研究では、欧文の直訳的な表現について、「欧文直訳体」、「欧文体」、「欧文脈」などの術語がさまざまに用いられてきた。また、欧文の直訳的な表現と目される対象についても、重複してはいるが全体として統一されているわけではなく、研究者によってその扱う対象が異なる。ここで、これまでの先行研究において、欧文の直訳的な表現についてどのようなものがそれにあたりと指摘されてきたのかについても見ていくことにする。

前節でも述べたが、最も詳細に欧文直訳表現について言及していると考えられるのが森岡(1999)である。欧文直訳表現に相当する表現として示されている項目や例が先行研究の中でも一番多い。次ページから示した【表0-0-1】は、森岡(1999)であげられている「欧文脈」の項目や表現を一覧にし、それ以外の先行研究及び『国語学研究事典』の「欧文直訳体」の項目で指摘されている表現と対照して、表にまとめたものである。○印がついているものについては、先行研究、または、『国語学研究事典』においても指摘されている表現ということになる。

【表0-0-1】を見ると、すべての先行研究で指摘されている表現はなかったが、「無生物名詞の用法」、「関係代名詞」はIchikawa(1928)を除いて、すべての先行研究で指摘があった。他に、半数以上の先行研究で、指摘があったものとしては、「抽象名詞」、「指示代名詞」、「比較級」、「受身」、「使役」、「進行形」、「too ~ to ~」の表現がある。

【表0-0-1 森岡(1999)と他の先行研究における欧文直訳表現の指摘に関する対照表】

森岡(1999)			Ichikawa (1928)	鹽田 (1932)	吉田 (1950)	乾 (1958)	古田 (1963)	吉村 (1963)	木坂 (1979)	『国語 学研究 事典』	
項目	小項目	具体例など									
名詞	1 抽象名詞	有情の者としての働き, 受身, 断定, 使役		○			○	○		○	
	2 無生物名詞の用法	擬人法, 受身, 使役, 断定		○	○	○	○	○	○	○	
	3 抽象名詞目的語										
代名詞	1 人称代名詞	彼・彼女	○			○					
	2 代名詞の複合	self selves own				○					
	3 非人称代名詞 it	天候・明暗・寒暖を述べるit									
		句や節を受けるit									
	4 指示代名詞	that, that of (～のそれ), those of	○	○		○			○	○	
	5 不定代名詞と それに類する表現	one of ～ …の一つ									
		a part of ～ …の一部									
		some of ～ …のあるもの			○						
		much of ～/many of ～/most of ～ …の多く									
		a kind of ～ …の種類					○				
a sort of ～ …の一種											
one ～ the other 一は～他は some ～ other 或る～他, 或る～或る the first ～ the second 第一～第二											
the former ～ the latter 前者～後者		○									
half ～ half 半ば～半ば											
partly ～ partly 一つは～一つは											
6 関係代名詞	which/that/who/where/what			○	○	○	○	○	○	○	
形容詞	1 比較級	より/～より尚/～より更に/～より一層	○			○		○	○		
	2 最上級										
	3 形容詞句	worthy of 値する 価値ある	○			○	○				
		free from から自由で									
enough to ～すべく充分											
too ～ to べく余り		○					○				
動詞・補助 動詞	受身			○	○	○		○			
	使役	let ～ do/make ～ do/have ～ do ～をして～ しむ(擬人的な表現)	○	○	○	○					
	進行形	つつある つつ ながら	○	○		○	○	○		○	
	完了形	なんだりき など									
	不定詞	～すべく/～することを/～と/～ために			○						
	動詞・動詞句	have			○						
		find									
		give									
		feel									
		seem									
		look									
		belong to									
		be obliged to									
	used to ～を常とする					○					
助動詞	must ねばならぬ										
	may かも知れぬ										
	would shoud might たであらう										
接続関係 接続詞, 前置詞, 熟語	1 並列	a, b, and c						○			
	2 after	後									
	3 before	前に									
	4 as soon as	や否や								○	
	5 as ～ as possible, as ～ as ～ can	できるだけそれだけ									
	6 as ～ as, so ～ as	だけそれだけ									
	7 at the same time	同時に									
	8 because, for	如何となれば/なぜならば…から			○						

森岡(1999)			Ichikawa (1928)	鹽田 (1932)	吉田 (1950)	乾 (1958)	古田 (1963)	吉村 (1963)	木坂 (1979)	『国語 学研究 事典』
項目	小項目	具体例など								
接続関係 接続詞, 前 置詞, 熟語	9 not only ~ but ~ (also)	のみならず…また				○				
	10 too ~ to ~	すべく余り	○	○			○	○		○
	11 the more ~ the more	すればするほど いよいよ				○	○	○		
	12 rather than	よりは寧ろ								○
	13 without	ことなしに								
	14 in spite of	にもかかわらず		○						
	15 instead of	代り				○	○	○		
	16 if	もし…ならば…であらう								
	17 in order to	為に	○							
	18 though	といえども								○
19 倒置									○	
20 挿入					○				○	

なお、森岡(1999)では指摘がなく、他の先行研究で指摘されている表現を以下に示す。

from the ~ point of view ……の見地からすれば  
hold a meeting 集会を持つ  
in a sense 或る意味に於て  
in all sense あらゆる意味に於て  
in other words 換言すれば  
in ~ sense of ~ ……の意味に於て  
nothing but ……以外の何ものでもない  
one of the ~est 最も……の中の一つ  
pay attention to 注意を払う  
put a period to 終止符を打つ  
so ~ that ことほどさように  
take a dinner 食事を取る  
take a rest 休息を取る  
take into consideration 考慮に入れる  
to speak plainly 明らさまにいへば など

以上に示したもののうち、森岡(1999)を除いた他の先行研究で重複して指摘されていたものは「nothing but ……以外の何ものでもない」, 「one of the ~est 最も……の中の一つ」, 「so ~ that ことほどさように」である。



## 2. 3 本研究における欧文直訳表現

前節で見たように、先行研究においては、欧文直訳表現に相当する表現について、さまざまなものが挙げられ、統一がなされていないことがわかった。

本研究においては、欧文の直訳的な表現を欧文直訳表現とする。また、欧文直訳表現として取り扱うものとしては、【表0-0-1】に示した、森岡(1999)で挙げられている表現のほか、他の先行研究で欧文直訳表現に相当するものとして示されているものも対象とする。

## 3 本論文の構成

本研究は、序章、第1部、第2部、第3部、終章から構成される。以下は本論文の章立てである。

序章
1 研究の目的
2 先行研究と定義
3 本論文の構成
4 凡例
第1部 英語教育・英語学習における訳出法
第1章 <i>New National 1st Reader</i> の訳本における訳出法
第2章 <i>New National 2nd Reader</i> の訳本における訳出法
第3章 <i>New National 3rd Reader</i> の訳本における訳出法
第4章 第1部のまとめ
第2部 翻訳文における訳出法
第1章 <i>The Boscomb Valley Mystery</i> の翻訳における訳出法
第2章 <i>Self-Help</i> の翻訳における訳出法
第3章 第2部のまとめ
第3部 翻訳以外の文章における欧文直訳表現
第1章 夏目漱石の文章における欧文直訳表現
第2章 芥川龍之介の文章における欧文直訳表現
第3章 第3部のまとめ
終章
1 結論
2 今後の課題
参考文献

序章は、研究の目的、先行研究と定義、本論文の構成、凡例から構成される。

第1部では、英語教育・英語学習における訳出法について調査・分析する。第1章では *New National 1st Reader* の訳本における訳出法について、第2章では *New National 2nd Reader* の訳本における訳出法について、第3章では *New National 3rd Reader* の訳本における訳出法についてそれぞれ調査し分析する。第4章において、第1部について総括し、分析・考察を行う。

第2部では、翻訳文における訳出法について調査・分析する。第1章では Arthur Conan Doyle の *The Boscomb Valley Mystery* の翻訳における訳出法について、第2章では Samuel Smiles の *Self-Help* の翻訳における訳出法についてそれぞれ調査し分析する。第3章において、第2部について総括し、分析・考察を行う。

第3部では、翻訳以外の日本語文章における欧文直訳表現について調査・分析する。第1章では夏目漱石の文章において、第2章では芥川龍之介の文章においての欧文直訳表現についてそれぞれ調査し、分析を行う。第3章では、第3部について総括し、分析・考察を行う。

終章においては、第1部、第2部、第3部の分析・考察の結果をまとめ、結論を導く。また、最後に、今後の課題として残されているものを示す。

## 4 凡例

- 1) 用例は章ごとに番号を施している。
- 2) 表や図の番号は全体を通して下記のように示す。

(例)【表1-2-3】

上の例では、第1部第2章の3番の表番号を表している。左端が部、中央が章、右端が図表番号となる。なお、序章は0-0、終章では4-0として表示する。

- 3) 注はすべて脚注の形式をとっている。

## 第1部 英語教育・英語学習における訳出法

第1部では、英語教育・英語学習においてどのような訳出法がなされていたのかについて調査する。

調査資料として全5巻の *New National Reader*<sup>i</sup> から前半の3巻について、原文と訳本を対照して訳出法を調査する。欧文訓読の形式で訳された訳本が、原文の参考書といった形で多く出版されていたが、それらを見ることで、どのように訳出法が学習されていたのかということについて見ることはできるのではないかと考えられる。

森岡(1999)に、この英語学習や英語教育における欧文訓読について「このような訓読によって育てられた青年たちが直訳的な語法・措辞や発想を自らのものとし、自らの文章に取り入れるようになっていくのは自然である。取り入れるというより、これなしは文章が書けないほど、日本語に深く根を下ろしたという方が正しいかもしれない。」と指摘がある。そのような表現のもととなった、欧文訓読の方法を調査することで、欧文直訳表現がどのような仕組みの中でできたものなのかを見るのが第1部の目的となる。

---

<sup>i</sup> 大村ほか(1980)に、「明治時代において中学校でもっとも広く用いられた英語教科書は『ナショナル＝リーダー』であった。明治時代に英語教育を受けたもので本書の恩恵に浴さなかった人はほとんどあるまいと思われる。全5巻で舶来本と翻刻版とがある。」とある。

# 第1章 *New National 1st Reader* における訳出法

## 1 調査資料

調査資料として Charles Barnes の *New National 1st Reader* の原文と、その訳本である、三上精一訳『ニューナショナル第一リードル独稽古』（明 18.8）を用いる。原文、訳本ともに国立国会図書館蔵の資料で、具体的には、近代デジタルライブラリー<sup>i</sup>から PDF ファイルをダウンロードして閲覧した。原文は明治 20 年(1887)に長谷川辰次郎によって出版されたもので、訳本は、明治 18 年(1885)に三上精一によって出版されたものである<sup>ii</sup>。

*New National 1st Reader* は Part1 と Part2 の 2 部に分かれており、さらに Part1 は 5 4 章、Part2 は 1 0 章で構成されている。

Part1 は比較的短い文章が多く、章を追うごとに少しずつ長い文章になっていく。また、途中に、読みの練習や書き方の練習などとして、それ以前に出てきた章を復習する章がある。そのため、文章が重複している章がある。この復習の章で重複している文章は用例として収集しない<sup>iii</sup>。

Part2 は各章とも比較的長い文章になっており、ある程度まとまった長さの文章を読むようになっている。また、Part2 には復習の章は設定されていない。

ここで調査する資料は、縦書きで、訳文のみが記されている。それぞれの訳の右にルビで相当する英単語の読みが付けられている。見やすさのために、用例においては、ルビは略している。また、訳文は、漢字とカタカナで表記されているが、ここであげる用例は漢字・ひらがなの表記に改めている<sup>iv</sup>。

<sup>i</sup> 原文は URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904689>, 訳本の三上精一訳『ニューナショナル第一リードル独稽古』は URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870959/1>。

<sup>ii</sup> 訳文の方が原文よりも早い出版となっているが、これ以上古い原文を見つけることができなかったため、これを用いることにした。

<sup>iii</sup> 文章の重複で用例を収集しなかった第 1 部の章は、6, 7, 12, 13, 18, 19, 24, 25, 30, 31, 36, 37, 42, 43, 46, 48, 49 章である。

<sup>iv</sup> 国会図書館所蔵の *New National 1st Reader* の訳本としては、他に 30 点程あると考えられるが、その代表的な訳出の方法としては、次のような、原文に 1 対 1 の対応で訳がつけられ、訳を読む順番が数字で表記されている。漢文訓読のように、返り読みをする「英文訓読型」の形式になる。

It	is	a	dog.
其	有	一	犬
れ	る	つ	で
は		の	
一	四	二	三

（高宮直太訳『バアーネス氏ニューナショナル第壱リードル独案内』（近代デジタルライブラリー URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871035>）出版者 榎原友吉、明治 18 年（1885）出版、第 1 部、第 1 章）

上記は、代表的な英文訓読型の訳本の表示形式であるが、訳文は数字で示した順番通り読むことになるので、「其れは一つの犬で有る」となる。（英語の単語それぞれに読みがルビで付けられているがここでは省略している。また、漢字とカタカナの表記を漢字とひらがなの表記に改めている。）

ここで取り扱う資料は、原文や読む順番が書かれていない、書き下しを施した訳文のみが記載されたものである。

## 2 調査方法

調査の方法としては、調査資料において、動詞がどのように訳されているのか調査する。具体的には、*New National 1st Reader*の原文から、動詞を抜き出し、それに相当する訳を訳本の『ニューナショナル第一リードル独稽古』より収集する。用例について、動詞とその訳について分類をし、分析する。

用例の分析にあたり、時制表現と文の種類を組み合わせた形で分類をする。動詞の時制表現については、現在形、過去形、未来形、現在完了形、過去完了形、未来完了形、現在進行形、過去進行形、未来進行形、現在完了進行形、過去完了進行形、未来完了進行形の12の時制、また、文の種類については内容上の文の種類で分類し、平叙文を肯定と否定の2種、疑問文を疑問と否定疑問の2種、命令文を命令と禁止の2種、そして感嘆文1種の、計7種の表現で分類した。全体の組み合わせは、下の【表1-1-1】のようになる。12の時制と7種の表現の組み合わせで、84通りとなるが、命令文については、現在形のみとなるため、62通りの分類となる。

【表1-1-1 分類の種類】

時制 \ 文の種類	平叙文		疑問文		命令文		感嘆文
	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止	
現在形	《1》	《13》	《25》	《37》	《49》	《50》	《51》
過去形	《2》	《14》	《26》	《38》			《52》
未来形	《3》	《15》	《27》	《39》			《53》
現在完了形	《4》	《16》	《28》	《40》			《54》
過去完了形	《5》	《17》	《29》	《41》			《55》
未来完了形	《6》	《18》	《30》	《42》			《56》
現在進行形	《7》	《19》	《31》	《43》			《57》
過去進行形	《8》	《20》	《32》	《44》			《58》
未来進行形	《9》	《21》	《33》	《45》			《59》
現在完了進行形	《10》	《22》	《34》	《46》			《60》
過去完了進行形	《11》	《23》	《35》	《47》			《61》
未来完了進行形	《12》	《24》	《36》	《48》			《62》

たとえば、分類《1》は現在形の平叙文・肯定の用例となり、分類《46》であれば、現在完了進行形の疑問文・否定疑問の用例となる。

上記の分類に基づき、それぞれの分類でどのような訳がなされているのかを分析する。

### 3 調査結果

*New National 1st Reader*において、動詞<sup>v</sup>は、延べ数で673、異なり数で66あった。下記の【表1-1-2】は *New National 1st Reader*における動詞とその出現回数について、出現回数の多い順に並べたものである。

【表1-1-2 *New National 1st Reader*における動詞とその出現回数】

出現回数	動詞
128	be
59	do
42	go, see
40	have, run
30	get
22	like
17	catch, take
16	play
15	come, give, look
14	put
11	say
10	hold
7	make
6	hide, know, spin
5	fly, hurt, jump, march, set
4	ask, find, keep, ride, sail, shut, spy, try
3	fall, learn, let, sing, stand, think, use, wish
2	beat, dash, eat, feed, leave, live, pass, send, want
1	blow, clear, cut, drive, fear, freeze, glow, hunt, roll, romp, seem, skate, stay, steer, swim, wrap

さらに、用例の動詞の訳についてそれぞれ上記【表1-1-1】の分類に従い、分類した。次ページの【表1-1-3】は分類ごとの用例数を表している。

分類に従って用例を分析した結果、訳出の方法にパターンがあることがわかった。それぞれの訳出のパターンは、分類《1》の[現在形／平叙文・肯定]の訳を基本として、時制ごとの訳と、文の種類ごとの訳の組み合わせにより、訳文が形成されている。以下に、その訳のパターンを示し、それぞれどのような用例があるか見ていくことにする。

<sup>v</sup> ここでは「動詞」としているが、be, do, haveについては助動詞の用法がある。ここでは、それについては区別をせず、助動詞の用法についても用例数として含んでいる。そのため、be, do, haveの総数は助動詞の用法も含めたものになる。それぞれ、助動詞の用法としての用例数は、beが5例、doが48例、haveが2例となる。

【表 1-1-3 分類の種類と用例数】

時制 \ 文の種類	平叙文		疑問文		命令文		感嘆文
	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止	
現在形	《1》 235	《13》 29	《25》 51	《37》 10	《49》 68	《50》 10	《51》 19
過去形	《2》 119	《14》 8	《26》 23	《38》 1			《52》 3
未来形	《3》 64	《15》 5	《27》 9	《39》 1			《53》 2
現在完了形	《4》 1	《16》 0	《28》 0	《40》 0			《54》 0
過去完了形	《5》 0	《17》 0	《29》 0	《41》 0			《55》 0
未来完了形	《6》 0	《18》 0	《30》 0	《42》 0			《56》 0
現在進行形	《7》 6	《19》 0	《31》 0	《43》 0			《57》 0
過去進行形	《8》 6	《20》 0	《32》 0	《44》 0			《58》 0
未来進行形	《9》 0	《21》 0	《33》 0	《45》 0			《59》 0
現在完了進行形	《10》 0	《22》 0	《34》 0	《46》 0			《60》 0
過去完了進行形	《11》 0	《23》 0	《35》 0	《47》 0			《61》 0
未来完了進行形	《12》 0	《24》 0	《36》 0	《48》 0			《62》 0

### 3. 1 基本の訳

《1》[現在形／平叙文・肯定]の訳が基本の訳となる。訳出のパターンは次のようになる。

... verb ... → ...動詞（終止形）

動詞は終止形で訳され、他に付加される情報は特にない。

具体的な用例を以下に挙げる<sup>vi</sup>。

# 1 1 - 2

The boy and the dog run.

男子と犬が走る

<sup>vi</sup> 用例の表示は、以下のようにする。

用例番号 部 - 章番号

原文

訳文

(例)

# 1 1 - 2

The boy and the dog run.

男子と犬が走る

上記の(例)は、用例番号# 1, 1部2章, 原文“The boy and the dog run.”, 訳文「男子と犬が走る」となる。

# 2 1 - 20

That is my hat!

夫は私の帽子である

# 3 1 - 47

Well, here we go.

よし茲に我等が行く

上に示した用例を見ると、それぞれ、# 1 は run「走ル」の終止形「走る」、# 2 は be 動詞「アル」の終止形「ある」、# 3 は go「行ク」の終止形「行く」となっている。

他の分類の訳出はこの基本の訳のパターンをもとにして、時制や文の種類のパターンの訳を組み合わせることで、訳文を作っていくことがわかった。次項からそのパターンを見ていく。

### 3. 2 時制ごとの訳

まず、時制ごとの訳のパターンを見ていく。ここでは、基本となる時制の現在形以外の、過去形、未来形、完了形、進行形の4つに分けてパターンをあげる。用例の文の種類は[平叙文・肯定]である。

#### 3. 2. 1 過去形の訳

過去形の訳は、次のように、「シ」が過去の助動詞として付加される。

... verb ... → ... 動詞 シ

動詞は「シ」に上接する形に活用する。具体的な用例としては、次のようなものがあげられる。

# 4 1 - 10

This cat was in a nest.

此の猫が巣の中にありし

# 5 1 - 41

The water froze, and that held the snow.

水が凍りし而して夫が雪を保ちし



動詞は「シ」に上接する形に活用する。上記に挙げた用例は《2》[過去形／平叙文・肯定]の用例となるが、#4であれば、be動詞の「アリ」に過去の助動詞「シ」が接続した、「ありし」となっている。#5であれば、freeze「凍ル」に「シ」が接続した、「凍リシ」、また、hold「保ツ」に「シ」が接続した「保ちし」となっている。

### 3. 2. 2 未来形の訳

未来形の訳は次のような訳のパターンになる。

... will verb ... → ... 動詞 デアロウ

#6 1 - 46

She will take cold.

彼女が寒さを取るであろう

#7 2 - 10

Yes, boys, I will play for you.

然り男子よ私が汝に向て奏するであろう

willが「デアロウ」と訳される。動詞は「デアロウ」に上接する形に活用する。上記の用例はどちらも、《3》[未来形／平叙文・肯定]の用例であるが、#6は、take「取ル」に「デアロウ」が下接した「取るであろう」、#7は play「奏スル」に「デアロウ」が下接した「奏するであろう」となっている。

### 3. 2. 3 完了形の訳

完了形の用例は、[《4》現在完了形・平叙文・肯定]に1例のみであった。下記#8がその用例である。

#8 2 - 10

“ Yes, sir, and I have learned to play a little on it.”

然り君而して私が夫に於て少かを奏すべく學んだ。

この用例から、完了形の訳のパターンは次のようになると考えられる。

... have verb(p.p.) ... → ... 動詞 タ

得られた用例が1例のみであったため、確実にパターン化されているかどうかを断言することはできない。

### 3. 2. 4 進行形の訳

進行形の訳では、現在進行形、過去進行形の用例が得られた。それぞれについて、以下で見ていく。

#### 3. 2. 4. 1 現在進行形の訳

現在進行形の訳出パターンは次のようになると考えられる。

... be verbing ... → ... 動詞 ツツアル

verbing が「動詞 ツツ」と訳され、進行形の訳となる。動詞は「ツツ」に上接するように活用する。助動詞としての be は必ず「アル」と訳される。具体的な用例は《7》[現在進行形／平叙文・肯定]に次のようなものがあった。

# 9 2 - 8

But John and Ann are coming over to see us.

然しながらジョン而してアンが我等を見るべく超えつつある

# 10 1 - 47

We are going faster now, Frank, and will pass you in the race.

吾等が今より速に行きつつあるフランクよしかして駟に於て汝を過ぎるであろう

# 9 では、come over「超エル」に「ツツアル」が下接し、「超えつつある」となっている。

# 10 では、go「行ク」に「ツツアル」が下接し、「行きつつある」となっている。

#### 3. 2. 4. 2 過去進行形の訳

過去進行形の場合は、現在進行形の訳「ツツアリ」に過去形のパターンの「シ」が付加し、次のようになる。

... be verbing ... → ... 動詞 ツツアリシ

用例は《8》[過去進行形／平叙文・肯定]に次のようなものがあった。

#11 1 - 51

I was hunting with my dog, and saw a little bear up in tree.

私が私の犬と共に獵りつつありし而して樹に於て上に小さき熊を見し

#12 2 - 10

One day, when Frank and John were going to school, they saw an old man with a flute.

一日フランク而してジョンが學校に迄行きつつありしときに彼等が笛を以たる老人を見し

#11 を見ると、hunt「獵ル」に「ツツアリシ」が下接した「獵りつつありし」となっている。#12 では、go「行ク」に「ツツアリシ」が下接した「行きつつありし」となっている。

### 3. 3 文の種類ごとの訳

以下では、文の種類ごとの訳のパターンを見ていく。ここでは、基本となる文の種類の [平叙文・肯定] 以外の、[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]、[命令文・命令]、[命令文・禁止]、[感嘆文] の6つの分類をそれぞれ見ていく。

#### 3. 3. 1 [平叙文・否定] の訳

[平叙文・否定] の訳の場合、否定のパターンが、現在形と未来形では「ヌ(ン)」となり、過去形では「ザリ」となる。ここでは、時制ごとにかけて用例を示す。

##### 3. 3. 1. 1 現在形の [平叙文・否定] の訳

現在形の [平叙文・否定] の訳では、原文において、一般動詞と be 動詞とで否定文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。それぞれ以下のようになっている。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

... do not (don't) verb ... → ... 動詞 ナサヌ／ナサン

#### ② 動詞が be 動詞の場合

... be not ... → ... アラヌ

動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて「ヌ(ン)」を下接した、

「ナサヌ（ン）」を付加して訳文を作成している。また、動詞が be 動詞の場合は、be 動詞の訳である「アリ」を活用させて「ヌ」を下接した、「アラヌ」として訳文を作成する。

具体的な用例として《13》[現在形／平叙文・否定]の用例をそれぞれ以下に示す。

① 動詞が一般動詞の場合

#13 1 - 50

I do not know.

私が知りなさん

#14 2 - 2

Redbirds are pretty, but they do not sing so well as some some other birds.

赤き鳥が奇麗にある然しながら彼等が或る他の鳥の如く左様に好く歌ひなさぬ

#13 では、know「知ル」に「ナサン」が下接した「知りなさん」#14 では、sing「歌ふ」に「ナサヌ」が下接した「歌ひなさぬ」となっている。

② 動詞が be 動詞の場合

#15 2 - 5

It is not good for us.

夫は我等に向て善くあらぬ

#16 1 - 50

It is not a dog, Fred.

夫が犬で有ぬフレッドよ

上記の用例を見ると、#15は「あらぬ」、#16は「有ぬ」となっていることがわかる。

3. 3. 1. 2 過去形の [平叙文・否定] の訳

過去形の [平叙文・否定] の訳でも、原文において、一般動詞と be 動詞とで否定文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。

① 動詞が一般動詞の場合

... *did not (didn't) verb* ...

→ ... 動詞 ナサザリシ

② 動詞が be 動詞の場合

... was/were not ... → … アラザリシ

それぞれ、用例は《14》[過去形／平叙文・否定]の分類に、以下のようなものがあった。

### ① 動詞が一般動詞の場合

#16 2 - 6

He did not like the fun so well as Frank, for the water was a little cold.  
彼がフランクの如く左様に好く樂みを好みなさざりし如何となれば水が少か冷たく  
ありし故に

#17 2 - 1

But the rat did not go in, and as it was going to run away, ...  
然しながら鼠がはいりなさざりし而して夫が走り去るべく行きつつありしとき…

上記、#16、#17で見られるように、動詞が一般動詞の場合は、doの訳である「ナス」を活用させて、否定の「ザリ」と過去の「シ」を下接した、「ナサザリシ」を付加して訳文を作成する。#16は「好みなさざりし」、#17は「はいりなさざりし」となっている。

### ② 動詞が be 動詞の場合

#18 2 - 9

The waves were very high, but Frank was not afraid.  
波が甚だ高くありし然しながらフランクが恐れて有ざりし

#18を見ると、was notが「有らざりし」と訳されていることがわかる。動詞がbe動詞の場合は、beの訳である「アリ」を活用させて、否定の「ザリ」と過去の「シ」を下接した、「アラザリシ」として訳文を作成していると考えられる。

### 3. 3. 1. 3 未来形の [平叙文・否定] の訳

未来形の [平叙文・否定] の訳では、現在形や過去形と違い、原文における否定文の作り方は1通りであるため、一般動詞、be動詞の別に関係なく、以下のようなパターンになっている。

... will not (won't) verb ... → … 動詞 ン(ヌ) デアロウ

具体的には、《15》[未来形／平叙文・否定]の用例で次に示す。

# 19 1 - 20

I will not have you with me if you are not a good dog.

私が若しも汝が善き犬で有らぬならば私と共に汝を持たんであろう

# 20 1 - 50

No, he will not hurt us.

否彼が我等を害さぬであろう

# 21 2 - 3

But, my boy, it will not live in that dish.

然しながら私の男子よ夫が其の盤に於て生活せんであろう

# 19 では「持たんであろう」、# 20 では「害さぬであろう」、# 21 では「生活せんであらう」となっている。動詞の訳に、否定の「ン(ヌ)」と未来の「デアロウ」を付加して訳文を作成していることがわかる。

### 3. 3. 2 [疑問文・疑問] の訳

[疑問文・疑問] の訳の場合、疑問が「カ」で訳される。それぞれ、現在形、過去形、未来形で用例が見られた。時制ごとにパターンが見られたので、以下で、用例とパターンを確認する。

#### 3. 3. 2. 1 現在形の [疑問文・疑問] の訳

現在形の [疑問文・疑問] では、原文において、一般動詞と be 動詞とで疑問文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが 2 つに分かれる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

Do ... verb ... ? → … 動詞 ナスカ

##### ② 動詞が be 動詞の場合

Be ... ? → … アルカ

具体的な用例は《25》[現在形／疑問文・疑問] のもので次の通りになる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

# 22 1 - 15

Do you like a doll?

汝が人形を好みなすか

# 23 1 - 9

Do you see this little bird?

汝が此の小さき鳥を見なすか

② 動詞が be 動詞の場合

# 24 1 - 15

Are you a good girl?

汝が善き女子であるか

# 25 1 - 50

Is he strong, Frank?

彼が強くあるかフランクよ

動詞が一般動詞の場合は、# 22「好みなすか」、# 23「見なすか」のように、do の訳である「ナス」を活用させて「カ」を下接した、「ナスカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。また、動詞が be 動詞の場合は、# 24 や # 25 のように、be の訳である「アリ」を活用させて「カ」を下接した、「あるか」として訳文を作成している。

3. 3. 2. 2 過去形の [疑問文・疑問] の訳

過去形でも、現在形の時と同じく、一般動詞と be 動詞とで疑問文の作り方に違いがあるため、2つに分けてパターンを見る。以下にそれぞれのパターンを示す。

① 動詞が一般動詞の場合

*Did ... verb ... ?*

→ … 動詞 ナセシカ

② 動詞が be 動詞の場合

*Was/Were ... ?*

→ … アリシカ

用例は《26》[過去形／疑問文・疑問]のもので、以下のようになる。

① 動詞が一般動詞の場合

# 26 2 - 02

Did he send the cage too?

彼が亦籠を贈りなせしか

# 27 1 - 33

Where did they come from?  
彼等が何處から来りなせしか

# 28 1 - 29

O where did you get them?  
お一何處に汝が彼等を得なせしか

## ② 動詞が be 動詞の場合

# 29 1 - 33

What old man was it, Roy?  
どんな老人で夫がありしかローイ

動詞が一般動詞の場合は、# 27「来りなせしか」、# 28「得なせしか」で見られるように、do の訳である「ナス」を活用させて「カ」を下接した、「ナセシカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。また、過去形の [疑問文・疑問] においては動詞が be 動詞の用例が # 29 しか見られなかったが、動詞が be 動詞の場合は、be の訳である「アリ」を活用させて「カ」を下接した、「ありしか」として訳文を作成していると考えられる。

### 3. 3. 2. 3 未来形の [疑問文・疑問] の訳

未来形の場合、現在形や過去形と違って、疑問文は一般動詞、be 動詞の別に関係なく vii, 1 通りになる。パターンは以下のようにになると考えられる。

Will ... verb ... ?                      → ... 動詞    デアロウカ

用例は《27》[未来形／疑問文・疑問] のもので以下のようになる。

# 30 2 - 03

Well, what will you do with it?  
よし汝が夫を以て何をなすであろうか

---

vii be 動詞を用いた用例は見られなかった。現在時制や過去時制と違い、未来時制では一般動詞と be 動詞の疑問文の形式は同じであるので、パターンは提示したようになると考えられる。



# 31 1 - 05

Will the cat get an egg?

猫が玉子を得るであろうか

# 30 では、do の訳「ナス」に、未来形のパターン「デアロウ」と疑問のパターン「カ」を組み合わせた、「デアロウカ」を付加した、「なすであろうか」となっている。# 31 も同様に、「得るであろうか」となっている。

### 3. 3. 3 [疑問文・否定疑問] の訳

[疑問文・否定疑問] については、[平叙文・否定] の訳と [疑問文・疑問] の訳とを組み合わせた訳がパターンとなる。「3. 3. 1 [平叙文・否定] の訳」で示したパターンに、それぞれ疑問の「カ」が下接したものがパターンとなる。それぞれの時制ごとに、用例を見ていく viii。

#### 3. 3. 3. 1 現在形の [疑問文・否定疑問] の訳

ここまでと同様に、現在形においては、原文での疑問文の形式が一般動詞と be 動詞とで異なるため、現在形の [疑問文・否定疑問] のパターンは以下のように 2 通りになる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

Do/Does ... not verb ... ? → ... 動詞 ナサヌカ / ナサンカ

##### ② 動詞が be 動詞の場合

Be ... not ... ? → ... アラヌカ

それぞれ用例は《37》[現在形 / 疑問文・否定疑問] のもので以下のようなになる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

# 32 1 - 41

Does he not look funny?

彼が滑稽に見えなさんか

viii なお、本節で扱う、[疑問文・否定疑問] の訳の用例については、疑問を表す、do や be 動詞の縮約形を用いたものは見られなかったため、パターンには縮約形を表示していない。

# 33 1-50

Do you not see the man feed him from hid hand?

汝が彼の手から彼を養う人を見なさぬか

② 動詞が be 動詞の場合

# 34 1 - 41

Are you not very cold, Roy?

汝が甚だ寒くあらぬかローイよ

# 35 1 - 17

Are they not very pretty birds?

彼等が美しき鳥で有らぬか

現在形の〔疑問文・否定疑問〕の訳出法では、動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて、否定のパターンの「ヌ（ン）」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「ナサヌ（ン）カ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。# 32「見えなさんか」、# 33「見なさぬか」もこの方法で訳文が作られていると考えられる。また、# 34「あらぬか」、# 35「有らぬか」のように、動詞が be 動詞の場合は、be「アリ」を活用させて否定のパターンの「ヌ」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「アラヌカ」としている。

3. 3. 3. 2 過去形の〔疑問文・否定疑問〕の訳

過去形の〔疑問文・否定疑問〕の用例は下に挙げた《38》〔過去形／疑問文・否定疑問〕のもので、# 36 の be 動詞の場合しか見ることができなかった。

# 36 1 - 51

Were you not afraid of him?

汝が彼に就て恐れて有ざりしか

これをみると、be 動詞「アリ」に、過去の否定のパターン「ザリシ」と疑問のパターンの「カ」を組み合わせた「ザリシカ」を付加した、「有ざりしか」となっていると考えられる。過去形においては、原文での疑問文の形式が一般動詞と be 動詞とで異なるため、パターンは 2 通りになると考えられる。しかし、be 動詞の用例のみしか見られなかったため、これまでの訳出法から以下のような訳出パターンになると予測した。

### ① 動詞が一般動詞の場合

*Did not (Didn't) ... verb ... ?* → … 動詞 ナサザリシカ

### ② 動詞が be 動詞の場合

*Was/Were ... not ... ?* → … アラザリシカ

動詞が一般動詞の場合は、これまでのように do の訳「ナス」と過去の否定のパターン「ザリシ」と疑問のパターンの「カ」を組み合わせた「ザリシカ」を付加した、「ナサザリシカ」となると予測した。また、動詞が be 動詞の場合には #36 でも見た様な、be 動詞「アリ」に、過去の否定のパターン「ザリシ」と疑問のパターンの「カ」を組み合わせた「ザリシカ」を付加した、「アラザリシカ」になると考えられる。

## 3. 3. 3. 3 未来形の [疑問文・否定疑問] の訳

未来形の [疑問文・否定疑問] の用例は《39》[未来形／疑問文・否定疑問] のもので 1 例のみであり、以下の #37 のようであった。

#37 1 - 41

Will he not fall down?

彼が倒れんであろうか

この用例であると、典型の未来形 [疑問文・否定疑問] の形をとった例ではないが、パターンは以下のようにになると考えられる。

*Won't ... verb ...?* → … 動詞 ン(ヌ) デアロウカ

#37 を見ると、fall down の訳「倒レル」に、否定のパターン「ン」と未来形のパターン「デアロウ」と疑問のパターン「カ」を結合した「ンデアロウカ」を下接した「倒れんであろうか」となっていることがわかる。1 例のみしか見られなかったため、断言することはできないが、否定のパターン「ン(ヌ)」と未来形のパターン「デアロウ」、疑問のパターン「カ」を組み合わせた「ン(ヌ)デアロウカ」を未来形 [疑問文・否定疑問] の訳出パターンとして動詞の訳に付加する訳出法をとると考えられる。

## 3. 3. 4 [命令文・命令] の訳

[命令文・命令] の訳は次のようなパターンとなる。

Verb ... → … 動詞 (命令形) (ヨ)

動詞の命令形, または, それに「ヨ」を付加した形になる。用例は《49》[現在形/命令文・命令]のもので, 以下のようになる。

#38 1 - 40

Come on, boys.

来れ男子よ

#39 1 - 27

Now go on.

今進めよ

#38では come on が「来れ」と動詞の命令形で訳されている。#39では, go on が「進めよ」と動詞の命令形に「ヨ」が付加された形で訳されている。

### 3. 3. 5 [命令文・禁止] の訳

[命令文・禁止] の訳については, 次のようなパターンであった。

Do not (Don't) ... → … 動詞 ナスナ

Do not (Don't) を「ナスナ」と訳し, 動詞に下接する。動詞は「ナスナ」に上接する形に活用する。《50》[現在形/命令文・禁止] の用例を以下に示す。

#40 1 - 39

Do not fear.

恐れなすな

#41 1 - 20

Do not run off with it!

夫を持って走り去りなすなよ

#40では「恐れなすな」, #41では「走り去りなすな」となっている。

### 3. 3. 6 [感嘆文] の訳

[感嘆文] の訳は動詞に「ヨ」を付加した形になる。

... verb ... → … 動詞 ヨ

用例は《5 1》[現在形／感嘆文]のもので、以下のようになる。

# 42 2 - 7

What large wings they have!

どんな大なる翼を彼等が持つよ

# 43 1 - 35

How pretty they are!

如何に奇麗に彼等があるよ

# 42 の「持つよ」、# 43 の「あるよ」からもわかるように、動詞の訳に「ヨ」を付加した形式になっている。

## 4 考察

### 4. 1 訳の固定

用例を分類し、分析した結果、訳が固定化していることがわかった。以下でそれらについて見ていくことにする。

#### 4. 1. 1 過去形の訳の固定

過去形の訳が「シ」で統一されていることがわかった。

[過去形／平叙文・肯定]

# 4 1 - 10

This cat was in a nest.

此の猫が巣の中にありし

(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 26 2 - 02

Did he send the cage too?

彼が亦籠を贈りなせしか

(再掲)

# 4 でも、# 26 でもどちらも過去形については「シ」で訳されている。

# 36 は [過去形／疑問文・否定疑問] の用例としては唯一のものであるが、ここでも、過去の訳は「シ」であった。

# 36 1 - 51

Were you not afraid of him?

汝が彼に就て恐れて有ざりしか

(再掲)

以上のように、過去形を表すパターンが「シ」であることがわかる。

#### 4. 1. 2 未来形の訳の固定

未来を表す訳も「デアロウ」に固定化しているが、これについては、will に対しての訳の固定であるとみることもできる。以下に未来形の用例を再度提示する。

[未来形／平叙文・肯定]

# 6 1 - 46

She will take cold.

彼女が寒さを取るであろう

(再掲)

[未来形／平叙文・否定]

# 19 1 - 20

I will not have you with me if you are not a good dog.

私が若しも汝が善き犬で有らぬならば私と共に汝を持たんであろう

(再掲)

# 37 は [未来形／疑問文・疑問] では 1 つだけ見られた用例であるが、ここでも「デアロウ」で訳されている。

[未来形／疑問文・疑問]

# 37 1 - 41

Will he not fall down?

彼が倒れんであろうか

(再掲)

文の種類によらず、「デアロウ」で訳が固定していると考えられる。

#### 4. 1. 3 否定の訳の固定

否定に関しての訳も固定していると考えられるが、現在形と未来形は「ヌ(ン)」で、過去形は「ザリ」と時制により違いが見られる。

下記の現在形と、未来形の用例で、# 13 は「ン」、# 20 は「ヌ」で訳されている。

[現在形／平叙文・否定]

# 13 1 - 50

I do not know.

私が知りなさん

(再掲)

[未来形／平叙文・否定]

# 20 1 - 50

No, he will not hurt us.

否彼が我等を害さぬであろう

(再掲)

下記 # 35, # 37 のように, 否定疑問であっても「又 (ン)」で訳される。

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 35 1 - 17

Are they not very pretty birds?

彼等が美しき鳥で有らぬか

(再掲)

[未来形／疑問文・否定疑問]

# 37 1 - 41

Will he not fall down?

彼が倒れんであろうか

(再掲)

過去形では, 平叙文でも, 疑問文でも否定が「ザリ」で固定されている。次に再度示した, # 16, # 18, # 36 でも「ザリ」となっている。

[過去形／平叙文・否定]

# 16 2 - 6

He did not like the fun so well as Frank, for the water was a little cold.

彼がフランクの如く左様に好く樂みを好みなさざりし如何となれば水が少か冷たくありし故に

(再掲)

# 18 2 - 9

The waves were very high, but Frank was not afraid.

波が甚だ高くありし然しながらフランクが恐れて有ざりし

(再掲)

[過去形／疑問文・否定疑問]

# 36 1 - 51

Were you not afraid of him?

汝が彼に就て恐れて有ざりしか

(再掲)



以上のように、否定であれば、文の種類に関係なく、現在形と未来形は「ヌ（ン）」、過去形では「ザリ」でパターンが固定されていることがわかる。

#### 4. 1. 4 疑問の訳の固定

疑問の訳に関しては、時制や文の種類に関係なく、すべて「力」で訳されていた。

[現在形／疑問文・疑問]

# 23 1 - 9

Do you see this little bird?

汝が此の小さき鳥を見なすか

(再掲)

[未来形／疑問文・疑問]

# 31 1 - 05

Will the cat get an egg?

猫が玉子を得るであろうか

(再掲)

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 34 1 - 41

Are you not very cold, Roy?

汝が甚だ寒くあらぬかローイよ

(再掲)

[過去形／疑問文・否定疑問]

# 36 1 - 51

Were you not afraid of him?

汝が彼に就て恐れて有ざりしか

(再掲)

# 23, # 31, # 34, # 36 を見ると、すべて「力」で訳されていることがわかる。疑問を表すパターンとして「力」が固定していることがわかる。

#### 4. 2 be, do の訳の固定

be, do, have については、本動詞としての役割の他、助動詞としての役割も持っているが、ここでの調査分析では、本動詞と同等に取り扱った。特に、訳出のパターンをより

明確にした、be, doについて、どのようであったか以下で見ていく<sup>ix</sup>。

#### 4. 2. 1 be の訳の固定

be は動詞以外の用法として、進行形の助動詞として使用された。[3. 2. 4 進行形の訳]でも見たように、「アリ」で訳出することは変化していない。基本の訳となる、[現在形／平叙文・肯定]の#2では、「ある」と訳されている。

#2 1 - 20

That is my hat!

夫は私の帽子である

(再掲)

一方で、以下の#10では、助動詞として用いられ、やはりここでも「ある」と訳されている。

#10 1 - 47

We are going faster now, Frank, and will pass you in the race.

吾等が今より速に行きつつあるフランクよしかして駈に於て汝を過ぎるであろう

(再掲)

その他の動詞としての用法の、[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]においても、同様に、常に「アリ」で訳出されていた。動詞、助動詞にかかわらず、訳が変化していないことから、beの訳は固定しているといえるだろう。

#### 4. 2. 2 do の訳の固定

do は、助動詞としての用法の方が多いが、用法にかかわらず、do 自体の訳は「ナス」となっていた。[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]、[命令文・禁止]で助動詞として用いられるが、どの用法においても訳に変化はない。助動詞としての用法であると、訳文にした場合、日本語での理解という点では do の訳が不要であり、do の訳を加えることで日本語として不自然になる。しかし、省略することはなく必ず「ナス」で訳されていた。

以下に、再度それぞれの用例を提示して、do の訳として「ナス」がパターンとして固定していることを見ていくことにする。

---

<sup>ix</sup> have については、助動詞の用法の用例が前述の [3. 2. 3 完了形の訳] で見た #8 のみであったため、ここでは特にとりあげない。

[現在形／平叙文・否定]

# 13 1 - 50

I do not know.

私が知りなさん

(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 26 2 - 02

Did he send the cage too?

彼が亦籠を贈りなせしか

(再掲)

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 32 1 - 41

Does he not look funny?

彼が滑稽に見えなさんか

(再掲)

[命令文・禁止]

# 40 1 - 39

Do not fear.

恐れなすな

(再掲)

# 13, # 26, # 32, # 40 は、どれも do を助動詞として用いた用例になるが、# 13「なさ」、# 26「なせ」、# 32「なさ」、# 40「なす」どれも、do を「ナス」で訳していることがわかる。

また、動詞としての do も「ナス」で訳されていた。

# 30 2 - 03

Well, what will you do with it?

よし汝が夫を以て何をなすであろうか

(再掲)

# 30 は [未来形／疑問文・疑問] の用例であるが、「なす」と do が訳されている。

以下に挙げる用例も、do が「ナス」で訳されている。

# 44 1 - 51

How do you do, sir?

如何に汝がなしなすか君よ

# 45 1 - 51

How do you do, boys?

如何に汝がなしなすか男子よ

[現在形／平叙文・疑問] の用例の # 44 と # 45 は、どちらも原文が **How do you do ... ?** となっているが、do の訳は「ナス」で統一されていることがわかる。これらの用例では do を 2 度ずつ使っているので、「なしなすか」と do の訳を 2 度重ねていると考えられる。以上のことから、do を「ナス」で訳すパターンが固定していることがわかる。

## 5 まとめ

動詞に関する部分の訳出法のパターン化について以上で確認することができた。特に、be や do のように、助動詞としての用法であっても、訳語が変化しないことから、よりパターン化がなされていたことがわかる。このパターン化は「英文訓読」の方式により起こったと考えられるが、その方法が非常に機械的であったことがわかる。動詞自体の訳は固定させ、それに伴う時制や表現の訳を付加していくことで、訳文を作成している。

訳出のパターンは次のようになっていると考えられる。

- ・ [現在形／平叙文・肯定] を基本の訳として、時制、文の種類に従って、それを表す訳を付加していく方法で訳文が作成される。
- ・ 訳出のパターン<sup>x</sup>は以下のようになっている。

過去「シ」

未来「デアロウ」

進行形「ツツ」

否定（現在・未来）「ヌ（ン）」

否定（過去）「ザリ」

疑問「カ」

do「ナス」

be「アリ」

命令文（命令）「動詞の命令形（＋ヨ）」

命令文（禁止）「動詞＋ナスナ」

感嘆文「動詞＋ヨ」

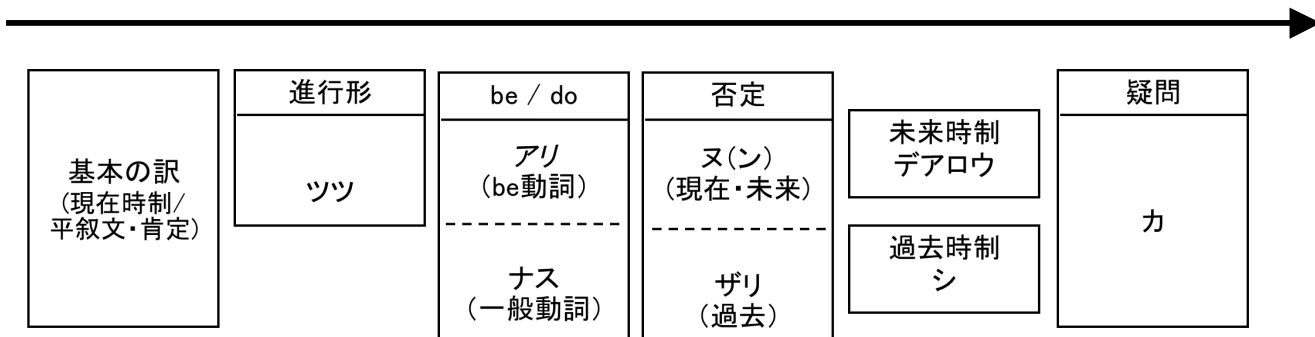
- ・ 命令文（命令、禁止）を除いては、上記のパターンを用いて、時制と文の種類に合わせて訳文が作られる。訳文が作られる際に、パターン<sup>x</sup>の並ぶ順番は決定している。[命令文]と[感嘆文]は上述のパターンのみになると考えられるが、いくつかの訳のパターンを組み合わせる場合には、[基本の訳] → [進行形] → [do / be の訳] → [否定] → [時制] → [疑問] の順に訳が作成される。次ページの【図 1-1-1】はパターン<sup>x</sup>の並ぶ順番を図式化したものである。訳出法としては、左端の基本の訳をもとに、時制や表現に合わせて、訳出パターン<sup>x</sup>を組み合わせる方法になっている。例えば、動詞が一般動詞で時制と文の種類が[過去形／疑

---

<sup>x</sup> 完了形については、用例が 1 例しか見られなかったためここでは、パターンとして取り上げない。

問文・否定疑問]であったら, 訳出パターンは, [基本の訳] → ナス → ヌ → カ  
の組み合わせとなり, 訳は「動詞 ナサヌカ」となる。

【図 1-1-1 訳出パターンの組み合わせ順】



## 第 2 章 *New National 2nd Reader* における訳出法

### 1 調査資料

調査資料として *New National 2nd Reader* の原文と、その訳本である、三上精一訳『ニューナショナル第二リード独学』(明 18.11) を用いる。資料については、原文、訳文ともに国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されている資料<sup>i</sup>を、PDF データでダウンロードし、閲覧する。原文は明治 35 年(1902)に積善館から出版されたもので、訳本は、明治 18 年(1885)に三上精一によって出版されたものである<sup>ii</sup>。

*New National 2nd Reader* は 56 章で構成されている。第 1 章で取り扱った *New National 1st Reader* よりも長い文章が多く、詩やことば遊びのようなものもその中にある。『ニューナショナル第二リード独学』は、縦書きで、訳文のみが記されている。それぞれの訳の右にルビで相当する英単語の読みが付けられている<sup>iii</sup>。また、訳文は、漢字とカタカナで表記されているが、以下であげる用例は漢字・ひらがなの表記に改めている<sup>iv</sup>。また、合字はかなに開いている。

<sup>i</sup> 原文は URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904685>, 訳本の三上精一訳『ニューナショナル第二リード独学』は URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871016>。

<sup>ii</sup> 訳文の方が原文よりも早い出版となっているが、これ以上古い原文を見つけることができなかったため、これを用いることにした。

<sup>iii</sup> 見やすさを考慮し、用例の提示においてはルビを省略している。

<sup>iv</sup> 国会図書館所蔵の *New National 2nd Reader* の訳本は、他に 20 点程あると考えられるが、その代表的な訳出の方法としては、横書きで、原文に 1 対 1 の対応で訳がつけられ、訳を読む順番が数字で表記されており、漢文訓読のように、返り読みをする「英文訓読型」の形式である。

Frank,	I	am	going	to	drive	my	new	pair	of	horses.
----よ	私は	ある	行きつゝ	べく	御する	私の	新しき	一對を	の	馬
-	二	十一	十	九	八	五	六	六	四	三

(塙房次郎訳『ニューナショナルリード独学自在. 第 2』(近代デジタルライブラリー URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871029>) 出版者 輿論社, 明治 18 年(1885)出版, 第 1 部, 第 1 章)

上記は、代表的な英文訓読型の訳本の表示形式であるが、訳文は数字で示した順番通り読むことになるので、「----よ私は馬の私の新しき一對を御するべく行きつゝある」となる。(英語の単語それぞれに読みがルビで付されているがここでは省略している。そのため、人名はすでに英語の単語のルビで示されているので訳では「----」となっている。また、漢字とカタカナの表記を漢字とひらがなの表記に改めている。)

ここで取り扱う資料は、原文や読む順番が書かれていない、書き下しを施した訳文のみが記載されたものである。

## 2 調査方法

調査については、第1章と同様の方法で、*New National 2nd Reader*の原文と『ニューナショナル第二リード独学』の訳文を対照することで、用例を収集する。

用例の分析にあたり、時制表現と文の種類を組み合わせた形で分類をする。動詞の時制表現については、現在形、過去形、未来形、現在完了形、過去完了形、未来完了形、現在進行形、過去進行形、未来進行形、現在完了進行形、過去完了進行形、未来完了進行形の12の時制、また、文の種類については内容上の文の種類で分類し、平叙文を肯定と否定の2種、疑問文を疑問と否定疑問の2種、命令文を命令と禁止の2種、そして感嘆文1種の、計7種の表現で分類した。全体の組み合わせは、下の【表1-2-1】のようになる。12の時制と7種の表現の組み合わせで、84通りとなるが、命令文については、現在形のみとなるため、62通りの分類となる。

上記の分類に基づき、それぞれの分類でどのような訳がなされているのかを分析する。また、【表1-2-1】の分類に入らない、受動態、「to動詞」、「動詞ing」の形式と助動詞についても動詞に関連する表現として分析する。

【表1-2-1 分類の種類】

時制 \ 文の種類	平叙文		疑問文		命令文		感嘆文
	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止	
現在形	《1》	《13》	《25》	《37》	《49》	《50》	《51》
過去形	《2》	《14》	《26》	《38》			《52》
未来形	《3》	《15》	《27》	《39》			《53》
現在完了形	《4》	《16》	《28》	《40》			《54》
過去完了形	《5》	《17》	《29》	《41》			《55》
未来完了形	《6》	《18》	《30》	《42》			《56》
現在進行形	《7》	《19》	《31》	《43》			《57》
過去進行形	《8》	《20》	《32》	《44》			《58》
未来進行形	《9》	《21》	《33》	《45》			《59》
現在完了進行形	《10》	《22》	《34》	《46》			《60》
過去完了進行形	《11》	《23》	《35》	《47》			《61》
未来完了進行形	《12》	《24》	《36》	《48》			《62》



### 3 調査結果

*New National 2nd Reader*において、動詞は、延べ数で 2210、異なり数で 211 あった<sup>v</sup>。次ページの【表 1-2-2】は *New National 2nd Reader*における動詞とその出現回数について、出現回数の多い順に並べたものである。

【表 1-2-2 *New National 2nd Reader*における動詞とその出現回数】

出現回数	動詞
380	be
151	say
103	go
85	see
80	come
71	have
62	make
56	do
48	look
47	like
46	run
44	take
41	get, know, tell
39	put
35	think
34	find
30	give
21	try
18	play
17	fly
16	hold
15	begin, wish
14	catch, hold, live, seem, speak
13	ask, eat, hear, stand
12	keep, learn, send
10	build, let, stay
9	call, cry, cut, fall, feel, hide, hurt, leave, love, move, sleep
8	bring, feed, grow
7	earn, jump, stop, want
6	bark, bite, climb, hang, hope, sing, watch
5	cover, help, hunt, laugh, lose, open, pick, sell, sit, swim, wake, wash, work
4	care, creep, drive, forget, lay, march, milk, mind, ring, shock, suppose, talk, wait, walk, wonder
3	blow, close, harm, hop, kill, kiss, mean, need, please, push, rode, set, start, sting, swing, thank, tie, use, write
2	answer, break, buy, crawl, drink, dry, fasten, float, follow, lie, need, pass, pat, pour, pull, read, rest, roam, romp, sail, save, shear, shout, show, shut, smile, spend, splash, spring, steep, throw, tinkle, tire
1	become, blink, bluster, borrow, brush, burn, bury, buzz, chatter, chirrup, chose, consent, content, cost, count, crack, cram, cross, die, dig, drow, enjoy, fill, fit, fix, flow, fret, frisk, gnaw, hit, lap, melt, miss, name, near, nurse, obey, peck, place, quit, reach, roll, serve, shake, slight, slip, spell, storm, string, strut, tear, touch, treat, tuck, turn, understand, wave, whistle, win, wink, witch, wound

<sup>v</sup> ここでの延べ数、異なり数は【表 1-2-1】の分類には入らない、受動態、to 不定詞、動名詞、現在分詞を含んでいる。

これらの動詞の訳についてそれぞれ【表 1-2-1】の分類に従い、分類した。下記の【表 1-2-3】は分類ごとの用例数を表している。

分類にそって用例を分析した結果、訳出にパターンがあることがわかった。それぞれの訳出のパターンは、《1》の[現在形／平叙文・肯定]の訳を基本として、時制ごとの訳と、文の種類ごとの訳の組み合わせにより、訳文が形成されている。以下に、その訳のパターンを示し、それぞれどのような用例があるか見ていくことにする。

【表 1-2-3 分類の種類と用例数】

時制	平叙文		疑問文		命令文		感嘆文
	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止	
現在形	《1》 596	《13》 116	《25》 65	《37》 5	《49》 101	《50》 3	《51》 9
過去形	《2》 741	《14》 65	《26》 11	《38》 0			《52》 7
未来形	《3》 88	《15》 11	《27》 4	《39》 0			《53》 1
現在完了形	《4》 26	《16》 3	《28》 3	《40》 0			《54》 0
過去完了形	《5》 36	《17》 1	《29》 0	《41》 0			《55》 0
未来完了形	《6》 0	《18》 0	《30》 0	《42》 0			《56》 0
現在進行形	《7》 6	《19》 0	《31》 0	《43》 0			《57》 1
過去進行形	《8》 14	《20》 0	《32》 0	《44》 0			《58》 0
未来進行形	《9》 0	《21》 0	《33》 0	《45》 0			《59》 0
現在完了進行形	《10》 0	《22》 0	《34》 0	《46》 0			《60》 0
過去完了進行形	《11》 0	《23》 0	《35》 0	《47》 0			《61》 0
未来完了進行形	《12》 0	《24》 0	《36》 0	《48》 0			《62》 0

### 3. 1 基本の訳

《1》[現在形／平叙文・肯定]の訳が基本の訳となる。パターンは次のようになる。

... verb ... → ...動詞（終止形）

動詞は終止形で訳され、他に付加される情報は特にない。具体的な用例としては、次のようになる。

# 1 1 - 6<sup>vi</sup>

The box is a hive.

箱が蜂巣である

# 2 47 - 2

When the good mother calls, the children all run.

善き母が呼ぶ時に子供が都て走る

# 1, # 2 ともに, 動詞の訳は動詞の終止形であり, # 1 は「ある」, # 2 は「呼ぶ」, 「走る」とそれぞれ訳されている。

このような基本の訳のパターンに時制と文の種類訳のパターンがどのように結びついていくのか次項から見ていく。

### 3. 2 時制ごとの訳

まず, 時制ごとの訳のパターンを見る。ここでは, 基本となる時制の現在形以外の, 過去形, 未来形, 完了形, 進行形の 4 つに分けてパターンをあげる。

#### 3. 2. 1 過去形の訳

過去形の訳のパターンは, 次のようである。

... verb ... → ... 動詞 シ

過去を表すパターンとして, 「シ」が用いられている。動詞は「シ」に上接する形に活用する。

具体的な用例としては, 《2》[過去形／平叙文・肯定] のもので, 次のようなものがあげられる。

---

vi 用例の表示は, 以下のようになる。

# 用例番号 章番号 - 文番号

原文  
訳文

(例)

# 1 1 - 6

The box is a hive.

箱が蜂巣である

上記の(例)は, 用例番号 1, 1 章 6 文目, 原文 “The box is a hive.”, 訳文「箱が蜂巣である」となる。

# 3 2 - 6

“ Run into the barn and get away from them,” said Jane.

小舎に迄走れ而して彼等から去り得よとジェーンが云ひし

# 4 13 - 12

That was the way they said yes.

夫は彼等が然りと云ひし處の仕方でありし

# 3 では、said「云フ」に過去のパターン「シ」が下接して、「云ひし」となっている。# 4 では、was, said に対して、「ありし」、「云ひし」とそれぞれ、「シ」が下接した訳になっている。

### 3. 2. 2 未来形の訳

未来形の訳は次のような訳のパターンになる。

... will verb ... → … 動詞 デアロウ

will が「デアロウ」と訳される。動詞は「デアロウ」に上接する形に活用する。

用例を以下にあげる。どちらも、《3》[未来形／平叙文・肯定] の用例である。

# 6 20 - 10

The hot water will soon make nice tea for us.

湯が速かに我々に向て美しき茶をなすであろう

# 7 8 - 4

“ Well, I will give the cow some hay, and then we will milk her.”

よし私がある枯草を牝牛に与へるであろう而して然るとき我々が彼女を絞るであろ  
う

# 6 では、make の訳「ナス」に「デアロウ」が下接し、「なすであろう」となっている。また、# 7 では、give の訳「与ヘル」に「デアロウ」が下接し、「与へるであろう」となり、milk の訳「絞ル」に「デアロウ」が下接し、「絞るであろう」となっている。

### 3. 2. 3 完了形の訳

完了形の用例は、《4》[現在完了形／平叙文・肯定] と《5》[過去完了形／平叙文・肯

定]で見られた。それぞれ，分類ごとに見ていく。

### 3. 2. 3. 1 現在完了形の訳

現在完了形の訳のパターンは次のようになる。

... have / has verb(p.p.) ... → ... 動詞 タ

現在完了形では，動詞の訳に「タ」が下接するパターンとなっている。動詞は，「タ」に接続する形に活用する。

用例は《4》[現在完了形／平叙文・肯定]のもので，以下の#8，#9のようになる。

#8 16 - 12

It has put its head into the shell again.

夫が再び殻に迄夫の頭を置ひた

#9 35 - 17

I have had a very happy evening.

私が甚だ幸なる晩を持つた

#8では，putの訳「置ク」に「タ」が下接し，「置ひた」となっている。#9ではhaveの訳「持つ」に「タ」が下接し，「持つた」となっている。

### 3. 2. 3. 2 過去完了形の訳

過去完了形の訳のパターンは，

... had verb(p.p.) ... → ... 動詞 タリキ

となる。動詞の訳に「タリキ」が下接するパターンとなっている。動詞は，「タリキ」に接続する形に活用する。

用例は《5》[過去完了形／平叙文・肯定]のもので，以下の#10，#11である。

#10 22 - 1

She had made her nest in the some hole for two years.

彼女が二年間同じき穴の中に彼女の巢をなしたりき

# 11 31 - 26

When Mary had used up all her bread, ...

メリーが都て彼女の麵麩を用ひ尽したりき時に…

上記の # 10 では、make の訳「ナス」に「タリキ」が下接し、「なしたりき」となっている。# 11 では use up の訳「用ヒ尽クス」に「タリキ」が下接し、「用ひ尽くしたりき」となっている。

### 3. 2. 4 進行形の訳

進行形においては、現在進行形、過去進行形の用例が見られた。それぞれ時制ごとに用例を見て、パターンを提示する。

#### 3. 2. 4. 1 現在進行形のパターン

現在進行形は、次のようなパターンになると考えられる。

... be verbing ... → … 動詞 ツツアル

動詞に ing が付いた形式が「動詞 ツツ」と訳される。動詞は「ツツ」に上接するように活用する。助動詞としての be は必ず「アル」と訳される。現在進行形は「ツツアル」がパターンとなる。

具体的な用例は《7》[現在進行形／平叙文・肯定]のもので、次のようなものがあった。

# 12 3 - 1

I' m always making honey.

私が常に蜜をなしつゝある

# 13 43 - 4

The hens are picking off the grass, / And singing very loudly ; ... vii

牝鶏が草を啄きつゝ而して甚だ声高く歌ひつゝある

# 12 では、「なしつゝある」と現在進行形が「ツツアル」で訳されている。# 13 では、動詞が 2 つの文であるが、それぞれ、「啄きつゝ…ある」「歌ひつゝある」と「ツツアル」で訳されている。

---

vii この原文は改行されて 2 行目が大文字で始まっていた。原文に「/」を入れて改行を示している。

### 3. 2. 4. 2 過去進行形のパターン

過去進行形の場合は、過去形のパターン「シ」が付加し、次のようになる。

... was / were verbing ... → ... 動詞 ツツアリシ

動詞に ing が付いた形式が「動詞 ツツ」と訳される。動詞は「ツツ」に上接するように活用する。助動詞としての be は必ず「アリシ」と訳される。過去進行形は「ツツアリシ」がパターンとなる。

具体的な用例は《8》[過去進行形／平叙文・肯定]のもので、次のようなものがあった。

# 14 14 - 9

They were still looking for pigs.

彼等が尚ほ豚に向て眺めつゝありし

# 15 4 - 1

One time when Frank was going to school, he found a poor little bird in the grass.

フランクが学校に迄行きつゝありしときの一の時に彼が草の中に怜なる小さき鳥を見出せし

# 14 では look の訳「眺メル」に「ツツアリシ」が下接した「眺めつゝありし」となっている。# 15 では go の訳「行く」に「ツツアリシ」が下接した「行きつゝありし」となっている。

### 3. 3 文の種類ごとの訳

文の種類ごとの訳のパターンを見ていく。ここでは、基本となる文の種類の [平叙文・肯定] 以外の, [平叙文・否定], [疑問文・疑問], [疑問文・否定疑問], [命令文・命令], [命令文・禁止], [感嘆文] の6つの分類をそれぞれ見ていく。

#### 3. 3. 1 [平叙文・否定] の訳

[平叙文・否定] の訳では場合、現在形、過去形、未来形、現在完了形、過去完了形で用例が見られた。時制ごとに、用例とパターンを提示する。

##### 3. 3. 1. 1 現在形の [平叙文・否定] の訳

《13》[現在形／平叙文・否定] の訳では、原文において、一般動詞と be 動詞とで否

定文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。

① 動詞が一般動詞の場合

... do not (don't) verb ... → ... 動詞 ナサヌ／ナサン

② 動詞が be 動詞の場合

... be not ... → ... アラヌ

動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて「ヌ（ン）」を下接した、「ナサヌ（ン）」を付加して訳文を作成する。また、動詞が be 動詞の場合は、be の訳である「アリ」を活用させて「ヌ」を下接した、「アラヌ」として訳文を作成する。

具体的な用例は、《13》[現在形／平叙文・否定]のもので、それぞれ次のようである。

① 動詞が一般動詞の場合

#12 18 - 3

The sheep do not like the winter, and, of course, try to get away from the men.

羊が水を好みなさぬ而して勿論人から去るべく試みる

② 動詞が be 動詞の場合

#13 26 - 3

I am not a cross dog.

私が意地悪き犬であらぬ

#12 では like の訳「好ム」に「ナサヌ」が下接した「好みなさぬ」となっている。#13 では、「あらぬ」と訳されている。

### 3. 3. 1. 2 過去形の [平叙文・否定] の訳

《14》[過去形／平叙文・否定]の訳では、原文において、一般動詞と be 動詞とで否定文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。

① 動詞が一般動詞の場合

... did not (didn't) verb ... → ... 動詞 ナサザリシ

② 動詞が be 動詞の場合

... was not (wasn't) / were not (weren't) ... → ... アラザリシ



動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて、否定の「ザリ」と過去の「シ」を下接した、「ナサザリシ」を付加して訳文を作成する。また、動詞が be 動詞の場合は、be の訳である「アリ」を活用させて、否定の「ザリ」と過去の「シ」を下接した、「アラザリシ」として訳文を作成する。

具体的な用例は、《14》[過去形／平叙文・否定]のもので、次のようである。

### ① 動詞が一般動詞の場合

#14 2 - 4

The bees did not like this and stung him.

蜂が是れを好みなさゞりし而して彼を刺せし

### ② 動詞が be 動詞の場合

#15 19 - 12

But Bunny was not afraid.

然しながらバンニーが恐れて有ざりし

#14 では like の訳「好ム」に「ナサザリシ」が下接した「好みなさゞりし」となっている。#15 では、「有ざりし」と訳されている。

## 3. 3. 1. 3 未来形の [平叙文・否定] の訳

《15》[未来形／平叙文・否定]の訳では、現在形や過去形と違い、原文における否定文の作り方は1通りである。

... will not (won't) verb ... → … 動詞 又 (ン) デアロウ

否定の「又 (ン)」に未来の「デアロウ」を付加した「又 (ン) デアロウ」をパターンとして訳文を作成している。

具体的な用例は、《15》[未来形／平叙文・否定]のもので、次のようである。

#16 42 - 20

“ They will not run away,” said his mother.

彼等が走り去らぬであろうと彼の母が云ひし

#17 2 - 2

“ Well, if you keep very still, they will not harm you.”

よし若しも汝が甚だ静に保つならば彼等が汝を害せぬであろう

#16 では、run away の訳「走り去ル」に「ヌデアロウ」を下接した、「走り去らぬであろう」となっている。#17 では、harm「害ス」に「ヌデアロウ」を下接した、「害せぬであろう」となっている。

### 3. 3. 1. 4 現在完了形の [平叙文・否定] の訳

《16》[現在完了形／平叙文・否定] の訳出パターンは以下のようになる。

... heve / has not verb ... → … 動詞 ナヌ(ン)ダ

否定を「ナヌ(ン)」と訳し、それに完了形のパターン「ダ」が下接した「ナヌ(ン)ダ」がパターンとなっている。

具体的な用例は以下になる。

#18 56 - 1

The dear, little, dimpled darling / Has never seen Christmas yet. <sup>viii</sup>

愛らしき小さき笑靨の愛子が決して尚ほ耶蘇降誕日を見なんだ

#19 56 - 6

He has not been with us a year.

彼が一年我々と共に有らなぬだ

#18 では「見なんだ」、#19 では「有らなぬだ」と、どちらも「ナヌ(ン)ダ」を用いて訳されている。

### 3. 3. 1. 5 過去完了形の [平叙文・否定] の訳

《17》[過去完了形／平叙文・否定] では用例が1例のみであったが、訳出パターンは以下のようになると思われる。

... had not verb ... → … 動詞 ナンダリキ

否定を「ナン」と訳し、それに完了形のパターン「タリキ」が下接した「ナンダリキ」がパターンになると予想できる。

《17》[過去完了形／平叙文・否定] の用例は以下のようになる。

---

<sup>viii</sup> この原文は改行されて2行目が大文字で始まっていた。原文に「/」を入れて改行を示している。

# 20 46 - 20

It seemed as if he had not quite made up his mind whether to stay in or go out.  
夫が彼が中に留まるべきか或は外に行くべきかの彼の精神を全く決しなんだりきか  
の如くに見えし

# 20 では、made up の訳「決ス」に「ナンドリキ」が下接していると考えられる。

### 3. 3. 2 [疑問文・疑問] の訳

[疑問文・疑問] の訳の場合、疑問が「力」で訳される。それぞれ、現在形、過去形、未来形、現在完了形で用例が見られた。時制ごとにパターンが見られたので、以下で、用例とパターンを確認する。

#### 3. 3. 2. 1 現在時制の [疑問文・疑問] の訳

現在時制の [疑問文・疑問] では、原文において、一般動詞と be 動詞とで疑問文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが 2 つに分かれる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

Do ... verb ... ?    → … 動詞 ナスカ

##### ② 動詞が be 動詞の場合

Be ... ?    → … アルカ

具体的な用例は《25》[現在形／疑問文・疑問] のもので、次の通りになる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

# 21 40 - 2

Do you know why?  
汝が何故かを知りなすか

##### ② 動詞が be 動詞の場合

# 22 1 - 7

“ Why is that hole on the hive?”  
なぜその穴が蜂巢の中にあるか

動詞が一般動詞の場合は、# 21「知りなすか」のように、do の訳である「ナス」を活用させて「力」を下接した、「ナスカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。また、動詞が be 動詞の場合は、# 22 のように、be の訳である「アリ」を活用させて「力」を下接し

た、「あるか」として訳文を作成している。

### 3. 3. 2. 2 過去時制の [疑問文・疑問] の訳

過去時制でも，現在時制の時と同じく，一般動詞と be 動詞とで疑問文の作り方に違いがあるため，2つに分けてパターンを見る。以下にそれぞれのパターンを示す。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

Did ... verb ... ?                      → … 動詞 ナセシカ

#### ② 動詞が be 動詞の場合

Was/Were ... ?                      → … アリシカ

用例は《26》[過去形／疑問文・疑問]のもので，以下のようになる。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

#23 11 - 9

“ How did it get there?”

如何に夫が其處に得なせしか

#### ② 動詞が be 動詞の場合

#24 24 - 11

And where were your eyes when you saw him? Were they on your book?

而して汝が彼を見し時に汝が眼が何處にありしか彼等が汝の本の上に有りしか

動詞が一般動詞の場合は，#23「得なせしか」do の訳である「ナス」を活用させて「カ」を下接した，「ナセシカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。また，動詞が be 動詞の場合は，be の訳である「アリ」を活用させて「カ」を下接した「アリシカ」として訳文を作成している。#24では，「ありしか」，「有りしか」となっていることがわかる。

### 3. 3. 2. 3 未来時制の [疑問文・疑問] の訳

未来時制の場合，現在時制や過去時制と違って，疑問文は一般動詞，be 動詞の別に関係なく<sup>ix</sup>，1通りになる。パターンは以下のようなになると考えられる。

Will ... verb ... ?                      → … 動詞 デアロウカ

<sup>ix</sup> be 動詞を用いた用例は見られなかった。現在時制や過去時制と違い，未来時制では一般動詞と be 動詞の疑問文の形式は同じであるので，パターンは提示したようになると考えられる。

用例は《27》[未来形／疑問文・疑問]のもので以下のようなになる。

#25 31 - 1

“ Frank, will you go to the park with me?”

フランクよ汝が私と共に遊園に迄行くであろうか

#25では、goの訳「行く」に、未来時制のパターン「デアロウ」と疑問のパターン「カ」を組み合わせた、「デアロウカ」を付加した、「行くであろうか」となっている。

### 3. 3. 3 [疑問文・否定疑問]の訳

[疑問文・否定疑問]については、《25》[現在形／疑問文・否定疑問]でしか用例を得ることができなかった。以下に、パターンと、用例を提示する。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

Do/Does ... not verb ... ? → … 動詞 ナサヌカ／ナサンカ

#### ② 動詞が be 動詞の場合

Be ... not ... ? → … アラヌカ

動詞が一般動詞の場合は、doの訳である「ナス」を活用させて、否定のパターンの「ヌ(ン)」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「ナサヌ(ン)カ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。動詞が be 動詞の場合は、be「アリ」を活用させて否定のパターンの「ヌ」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「アラヌカ」としている。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

#26 45 - 7

Do you not think so?

汝は左様に考へなさぬか

#### ② 動詞が be 動詞の場合

#27 3 - 2

Isn't it very funny, / Very, very funny?<sup>x</sup>

夫が甚だ滑稽に甚だ甚だ滑稽に有ぬか

<sup>x</sup> この用例の原文が改行されて2行にわたっていたため、原文に「/」を入れて改行を示している。

一般動詞の用例である#26では、「考へなさぬか」となっている。また、動詞が be 動詞の用例である#27では「有ぬか」となっている。

### 3. 3. 4 [命令文・命令] の訳

《49》[現在形／命令文・命令] の訳は次のようなパターンとなる。

Verb ... → … 動詞 (命令形) (ヨ)

動詞の命令形、または、それに「ヨ」を付加した形になる。

用例は《49》[現在形／命令文・命令] のもので、以下のようになる。

#28 7 - 9

“ Stop, Jocko!” said I.

止まれよジヨツコーよと私が云ひし

#28では「止まれよ」と、動詞の命令形に「ヨ」が付加した形になっている。

### 3. 3. 5 [命令文・禁止] の訳

《50》[現在形／命令文・禁止] の訳については、次のようなパターンであった。

Do not (Don't) ... → … 動詞 ナスナ (ヨ)

Do not (Don't) を「ナスナ (ヨ)」と訳し、動詞に下接する。動詞は「ナスナ (ヨ)」に上接する形に活用する。

《50》[現在形／命令文・禁止] の用例は以下のようになる。

#29 1 - 11

“ Do not be afraid, Jane,” said her papa.

恐れてありなすなよジェーンよと彼女の阿父が云ひし

#29では、「ありなすなよ」というように、be の訳「アリ」に「ナスナヨ」が下接した形になっている。

### 3. 3. 6 [感嘆文] の訳

[感嘆文] の訳は動詞に「ヨ」を付加した形になる。

... verb ... → … 動詞 ヨ

用例は《5 1》[現在形／感嘆文]のもので、以下のようになる。

# 30 1 - 5

“ 0 here are the bees!” said Jane.

お一茲に蜜蜂があるよとジェーンが云ひし

# 31 1 - 9

How many bees there are!

如何に多くの鉢が其處にあるよ

# 31, # 32 とともに、「あるよ」と動詞に「ヨ」を付加した形で訳がなされている。

### 3. 4 受動態

受動態は、“be verb(p.p.)”という形で表されるが、これにもパターンが見られた。パターンは時制ごとに異なっていた。パターンと用例は、以下のようなものである。

[現在形]

... be verb(p.p.) ... → … 動詞 (ル) ル

# 32 49 - 3

Bears are covered with long, thick hair, which keeps them very warm.

熊は夫が甚だ温かに彼等を保つ處の長き厚き毛を以て蓋はる

[過去形]

... was / were verb(p.p.) ... → … 動詞 (ラ) レシ

# 33 49 - 3

When I was a little boy, I was sent out one day to find the cow.

私が小き男子でありし時に私が一日牝牛を見出すべく送り出されし

[現在完了]

... have / has been verb(p.p.) ... → … 動詞 レタ

# 34 29 - 1

Little boys and girls, have you been told any thing about George Washington?  
小さき男子及び女子よ汝はジオージ、ウオツシングトンに就て或物を話されたか

現在完了の用例は1例しか見られず、また、この用例は疑問文であるため、「カ」が付属しているが、パターンは上記のようになると考えられる。

[過去完了]

... had been verb(p.p.) ... → … 動詞 レタリキ

# 35 44 - 6

After she had been washed, she would begin to lay her feathers.  
彼女が洗はれたりき後彼女が彼女の羽を整えるべく始めるであろう

### 3. 5 to 不定詞

動詞の原形の前に to をともなった to 不定詞としての用法がある。名詞的用法と形容詞的用法で訳のパターンの違いが見られたので以下にパターンと用例を挙げる。

[名詞的用法]

... to verb ... → … 動詞 コトノ

# 36 46 - 3

It is quite plain that it is not safe to stay here.  
茲に止まることの夫が安全であらぬこと<sup>の夫</sup>が全く明かである

[形容詞的用法]

... to verb ... → … 動詞 ベク／ベキ

# 37 5 - 3

“ No, no,” said she, “ I have no time to play.”  
彼女が云ひし否否私が遊ぶべき時を持たぬ



### 3. 6 動名詞, 現在分詞

「動詞 ing」という形には, 動名詞の用法, 現在分詞の用法がある。それぞれで訳のパターンに違いがあった。パターンと用例は以下の通り。

[動名詞]

... *verbing* ... → … 動詞スルコト

# 38 36 - 13

I could not help crying.

私が哭することを絶え能はざりし

[現在分詞]

... *Verbing* ... → … 動詞スル處ノ / シツツ

# 39 15 - 8

“ There he stood, in a pool of water, looking at us with his large, soft eyes.”

其處に彼が彼の大なる柔和なる目を以て我々に於て眺めつゝ水の池中に立ちし

### 3. 7 助動詞の訳

助動詞を使用した文が多く見られたことから, 助動詞のパターンも見ることができた。以下でそれぞれについて見ていくことにする。

#### 3. 7. 1 will / would, shall / should

will, would, shall, should はどれも訳のパターンが同じになる。

... will / would *verb* ... / ... shall / should *verb* ... → … 動詞 デアロウ

# 40 26 - 16

I should like to go all alone.

私が都て独りで行くべく好むであろう

#### 3. 7. 2 can / could

can は「能ウ」, could はそれに過去形のパターンを下接した「能ヒシ」というパターンであった。

[can]

... can verb ... → ... 動詞 能ウ

# 41 26 - 6

O yes, and I can run as fast as Rover, and he is a big dog.

お一然り而して私がローバー丈け左様に速かに走り能う而して彼が大なる犬である

[could]

... could verb ... → ... 動詞 能ヒシ

# 42 16 - 14

I did not think it could see so well.

私は夫が左様に好く見能ひしと考へなさゞりし

### 3. 7. 3 may / might

mayについてはパターンがあると考えられるが、mightは1例しか見られなかったため推測である。見られた1例は、couldのように過去のパターンは下接していなかった。

... may / might verb ... → ... 動詞 ウル

[may]

# 43 4 - 6

“ When you are large and strong, you may fly back to the tree.”

汝が大きく而して強くあるときに汝が木に迄飛び返りうる

[might]

# 44 55 - 5

Two men, who were hunting for the prince, that they might kill him, passed by the cave in the morning, and the prince heard what they said.

夫は彼等が彼を殺し得しことの為に公子に向て狩りつゝありし處の二人が朝に於て洞穴を沿うて過ぎし而して公子は彼らが云ひし處の物を聞きし

### 3. 7. 4 must

mustは以下のようなパターンと用例が見られた。

... must verb ... → ... 動詞 ネバナラヌ (ン)

# 45 35 - 7

I must go to march with the soldiers.

私が兵隊と共に進軍すべく行かねばならぬ

### 3. 7. 5 have to

have to については、must とはパターンが異なっていた。また、have を使っているが、「持つ」と訳がなされ、助動詞の have ともパターンが違っている。本動詞での訳がそのままパターンに使われていることがわかった。以下、〔現在形〕、〔過去形〕について分けてパターンと用例を挙げる。

〔現在形〕

... have / has to verb ... → ... 動詞 ベク持つ

# 46 7 - 2

When he is out of his cage, I have to watch him to see that he does not harm.

彼が彼の籠の外に在る時に私は彼が一の害をなさぬことを見るべく彼を番すべく持つ

〔過去形〕

... had to verb ... → ... 動詞 ベク持ちし

# 47 44 - 4

She did not like to get into the water and wish, so my aunt had to wash her.

彼女が水に迄得而して洗うべく好みなさゞりし左様に私の伯母が彼女を洗うべく持ちし

### 3. 7. 6 ought to

ought to は以下のようなパターンが見られた。用例と共に挙げる。

... ought to verb ... → ... 動詞 ベク属スル

# 48 46 - 21

Don' t you think Grip ought to have made up his mind more quickly?

汝はグリツプがより多く速かに彼の精神を決したべく属せしと考へなすか

## 4 考察

### 4. 1 訳の固定

用例を分類し、分析した結果、訳が固定化していることがわかった。以下でそれらについて見ていくことにする。

#### 4. 1. 1 過去時制の訳の固定

過去時制の訳が「シ」で統一されていることがわかった。

[過去形／平叙文・肯定]

# 3 2 - 6

“ Run into the barn and get away from them,” said Jane.

小舎に迄走れ而して彼等から去り得よとジェーンが云ひし

(再掲)

[過去進行形／平叙文・肯定]

# 14 14 - 9

They were still looking for pigs.

彼等が尚ほ豚に向て眺めつゝありし

(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 23 11 - 9

“ How did it get there?”

如何に夫が其處に得なせしか

(再掲)

# 3でも、# 23でもどちらも過去時制については「シ」で訳されている。以上のように、過去時制を表すパターンが「シ」であることがわかる。

#### 4. 1. 2 未来時制の訳の固定

未来を表す訳も「デアロウ」に固定化しているが、これについては、will に対しての訳の固定であるとみることもできる。以下に未来時制の用例を再度提示する。

[未来形／平叙文・肯定]

# 6 20 - 10

The hot water will soon make nice tea for us.

湯が速かに我々に向て美しき茶をなすであろう

(再掲)

[未来形／平叙文・否定]

# 16 42 - 20

“ They will not run away, ” said his mother.

彼等が走り去らぬであろうと彼の母が云ひし

(再掲)

[未来形／疑問文・疑問]

# 25 31 - 1

“ Frank, will you go to the park with me?”

フランクよ汝が私と共に遊園に迄行くであろうか

(再掲)

文の種類によらず、「デアロウ」で訳が固定していると考えられる。

#### 4. 1. 3 否定の訳の固定

否定に関しての訳も固定していると考えられるが、現在時制と未来時制は「ヌ(ン)」で、過去時制は「ザリ」、現在完了形と過去完了形では「ナヌ(ン)」と時制により違いが見られる。

下記の現在時制と、未来時制の用例で、# 13, # 16 ともに「ヌ」で訳されている。

[現在形／平叙文・否定]

# 12 18 - 3

The sheep do not like the winter, and, of course, try to get away from the men.

羊が水を好みなさぬ而して勿論人から去るべく試みる

(再掲)

[未来形／平叙文・否定]

# 16 42 - 20

“ They will not run away, ” said his mother.

彼等が走り去らぬであろうと彼の母が云ひ

(再掲)

否定疑問は現在形しか見られなかったが、以下のように訳される。

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 27 3 - 2

Isn't it very funny, / Very, very funny?<sup>xi</sup>

夫が甚だ滑稽に甚だ甚だ滑稽に有ぬか

(再掲)

過去形では、否定が「ザリ」で固定されている。次に再度示した、# 14, # 15 はどちらも「ザリ」となっている。

[過去形／平叙文・否定]

# 14 2 - 4

The bees did not like this and stung him.

蜂が是れを好みなさざりし而して彼を刺せし

(再掲)

# 15 19 - 12

But Bunny was not afraid.

然しながらバンニーが恐れて有ざりし

(再掲)

現在完了形と過去完了形では以下の用例のようであった。

[現在完了形／平叙文・否定]

# 19 56 - 6

He has not been with us a year.

彼が一年我々と共に有らなぬだ

(再掲)

[過去完了形／平叙文・否定]

# 20 46 - 20

It seemed as if he had not quite made up his mind whether to stay in or go out.

夫が彼が中に留まるべきか或は外に行くべきかの彼の精神を全く決しなんだりきか  
の如くに見えし

(再掲)

---

<sup>xi</sup> この用例の原文が改行されて2行にわたっていたため、原文に「/」を入れて改行を示している。

現在完了形，過去完了形のどちらも，「ナヌ（ン）」で訳されていることがわかる。

以上のように，否定であれば，現在時制と未来時制は「ヌ（ン）」，過去時制では「ザリ」，現在完了形と過去完了形は「ナヌ（ン）」パターンが固定されていることがわかる。

#### 4. 1. 4 疑問の訳の固定

疑問の訳に関しては，時制や文の種類に関係なく，すべて「カ」で訳されていた。

[現在形／疑問文・疑問]

# 21 40 - 2

Do you know why?

汝が何故かを知りなすか

(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 24 24 - 11

And where were your eyes when you saw him? Were they on your book?

而して汝が彼を見し時に汝が眼が何處にありしか彼等が汝の本の上に有りしか

(再掲)

[未来形／疑問文・疑問]

# 25 31 - 1

“ Frank, will you go to the park with me?”

フランクよ汝が私と共に遊園に迄行くであろうか

(再掲)

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 27 3 - 2

Isn' t it very funny, / Very, very funny?<sup>xii</sup>

夫が甚だ滑稽に甚だ甚だ滑稽に有ぬか

(再掲)

# 21, # 24, # 25, # 17 を見ると，すべて「カ」で訳されていることがわかる。疑問を表すパターンとして「カ」が固定していることがわかる。

#### 4. 2 be, do, have の訳の固定

be, do, have については，文全体の動詞としての役割の他，助動詞としての役割も持

---

<sup>xii</sup> この用例の原文が改行されて2行にわたっていたため，原文に「/」を入れて改行を示している。



っているが、今回の調査分析では、動詞と同等に取り扱った。訳がどのようになっていたのか以下で見ていくことにする。

#### 4. 2. 1 be の訳の固定

be は動詞以外の用法として、進行形の助動詞として使用された。[3. 2. 4 進行形の訳]でも見たように、「アリ」で訳出することは変化していない。基本の訳となる、[現在形／平叙文・肯定]の#1では、「ある」と訳されている。

#1 1 - 6

The box is a hive.

箱が蜂巣である

(再掲)

一方で、以下の#12では、助動詞として用いられ、やはりここでも「ある」と訳されている。

#12 3 - 1

I' m always making honey.

私が常に蜜をなしつゝある

(再掲)

その他の動詞としての用法の、[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]においても、同様に、常に「アリ」で訳出されていた。

しかし、受動態においては以下の#32のように、「アリ」は用いられていなかった。

#32 49 - 3

Bears are covered with long, thick hair, which keeps them very warm.

熊は夫が甚だ温かに彼等を保つ處の長き厚き毛を以て蓋はる

(再掲)

be の訳については「アリ」で訳の固定がほぼなされているようであるが、受動態に関しては違った形式を用いていることがわかった。

#### 4. 2. 2 do

do は、助動詞としての用法の方が多いが、用法にかかわらず、do 自体の訳は「ナス」となっていた。[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]、[命令文・禁止]で助動詞として用いられるが、どの用法においても訳に変化はない。助動詞としての用法であると、訳文にした場合、日本語での理解という点では do の訳が不要であり、do の訳を加えることで日本語として不自然になる。しかし、省略することはなく必ず「ナス」で訳されていた。以下に、再度それぞれの用例を提示して、do の訳として「ナス」がパターンとして固定していることを見ていくことにする。

[現在形／平叙文・否定]

# 12 18 - 3

The sheep do not like the winter, and, of course, try to get away from the men.

羊が水を好みなさぬ而して勿論人から去るべく試みる

(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 23 11 - 9

“ How did it get there?”

如何に夫が其處に得なせしか

(再掲)

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 26 45 - 7

Do you not think so?

汝は左様に考へなさぬか

(再掲)

[命令文・禁止]

# 29 1 - 11

“ Do not be afraid, Jane,” said her papa.

恐れてありなすなよジェーンよと彼女の阿父が云ひし

(再掲)

# 12, # 23, # 26, # 29 は、どれも do を助動詞として用いた用例になるが、どれも、do を「ナス」で訳していることがわかる。また、do には、強調の用法がある。命令文に強調の用法が見られたが、その場合、動詞を命令形にするのではなく、do の訳である「ナス」を命令形に活用させ、下接していることがわかる。以下が用例である。

# 49 35 - 3

Do come, papa!

来りなせ阿父よ

do については用法に関わりなく、すべて「ナス」で訳されていることがわかる。

#### 4. 2. 3 have

have は完了形の助動詞として用いられるほかに、have to でもちいられる部分ともなっている。以下にそれらの用例を再提示する。

[現在完了形／平叙文・肯定]

# 8 16 - 12

It has put its head into the shell again.

夫が再び殻に迄夫の頭を置ひた

(再掲)

[過去完了形／平叙文・肯定]

# 10 22 - 1

She had made her nest in the some hole for two years.

彼女が二年間同じき穴の中に彼女の巢をなしたりき

(再掲)

[have to]

# 46 7 - 2

When he is out of his cage, I have to watch him to see that he does not harm.

彼が彼の籠の外に在る時に私は彼が一の害をなさぬことを見るべく彼を番すべく持  
つ

(再掲)

現在完了形、過去完了形ともに、have を部分として訳さず、「タ」「タリキ」としている。また、have to については、動詞としての用法での訳でもある「持ツ」を用いている。

助動詞の have に関しては、訳が固定しているとは言い難いと考えられる。

## 5 まとめ

動詞に関する部分の訳出のパターン化について以上で確認することができた。特に、doのように、助動詞としての用法であっても、訳語が変化しないことから、よりパターン化がなされていたことがわかる。このパターン化は「英文訓読」の方式により起こったと考えられるが、その方法が非常に機械的であったことがわかる。動詞自体の訳は固定させ、それに伴う時制や表現の訳を付加していくことで、訳文を作成している。

訳出のパターンは次のようになっていると考えられる。

- ・ [現在形／平叙文・肯定] を基本の訳として、時制、文の種類に従って、それを表す訳を付加していく方法で訳文が作成される。
- ・ 訳出のパターンは以下のようになっている。

過去「シ」

未来「デアロウ」

現在完了形「タ」

過去完了形「タリキ」

進行形「ツツ」

否定（現在・未来）「ヌ（ン）」

否定（過去）「ザリ」

否定（現在完了・過去完了）「ナヌ（ン）」

疑問「カ」

do「ナス」

be「アリ」（受動態以外）

命令文（命令）「動詞の命令形（＋ヨ）」

命令文（禁止）「動詞＋ナスナ」

感嘆文「動詞＋ヨ」

- ・ 命令文（命令、禁止）を除いては、上記のパターンを用いて、時制と文の種類に合わせて訳文が作られる。訳文が作られる際に、パターンの並ぶ順番は決定している。[命令文]と[感嘆文]は上述のパターンのみになると考えられるが、いくつかの訳のパターンを組み合わせる場合には、[基本の訳] → [進行形] → [do/beの訳] → [否定] → [時制] → [疑問]の順に訳が作成される。次ページの【図1-2-1】はパターンの並ぶ順番を図式化したものである。訳出法としては、左端の基本の訳をもとに、時制や表現に合わせて、訳出パターンを組み合わせ、訳文を作成

する方法になっている。例えば、動詞が一般動詞で時制と文の種類が〔過去完了形／平叙文・否定〕であったら、訳出パターンは、〔基本の訳〕 → ナヌ(ン) → タリキ の組み合わせとなり、訳は「動詞 ナンダリキ」となる。

【図 1-2-1 訳出パターンの組み合わせ順】

基本の訳 (現在形/ 平叙文・肯定)	進行形	be / do	否定	未来形 デアロウ	疑問
	ツツ	アリ (be動詞)	ヌ(ン) (現在・未来)	過去形 シ	カ
		-----	ザリ (過去)	現在完了形 タ	
		ナス (一般動詞)	ナヌ(ナン) (完了形)	過去完了形 タリキ	

## 第 3 章 *New National 3rd Reader* における訳出法

### 1 調査資料

調査資料として *New National 3rd Reader* の原文と、その訳本である、島田奚疑訳『正則ニューナショナル第三読本直訳』（明 19.9）を用いる。資料については、国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されている資料<sup>i</sup>を、PDF データでダウンロードしたものを使用する。原文は明治 35 年(1902)に積善館から出版されたもので、訳本は、明治 19 年(1886)に大倉孫兵衛によって出版されたものである<sup>ii</sup>。

*New National 3rd Reader* は 59 章で構成されている。その訳本である『正則ニューナショナル第三読本直訳』は、縦書きで、訳文のみが記されている形式である。それぞれの訳の右にルビで相当する英単語の読みが付けられている<sup>iii</sup>。また、訳文は、漢字とカタカナで表記されているが、以下に示す用例は読解の便宜を考慮して、漢字・ひらがなの表記に改めている<sup>iv</sup>。また、合字はかなに開いている。

---

<sup>i</sup> 原文は URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/904686>, 訳本の島田奚疑訳『ニューナショナル第二リードル獨學』は URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/870886>。

<sup>ii</sup> 訳文の方が原文よりも早い出版となっているが、これ以上古い原文を見つけることができなかったため、これを用いることにした。

<sup>iii</sup> 見やすさを考慮し、用例の提示においてはルビを省略している。

<sup>iv</sup> 国会図書館所蔵の *New National 3rd Reader* の訳本は、他に 20 点程あると考えられるが、その代表的な訳出の方法としては、横書きで、原文に 1 対 1 の対応で訳がつけられ、訳を読む順番が数字で表記されており、漢文訓読のように、返り読みをする「英文訓読型」の形式である。

Frank,	I	am	going	to	drive	my	new	pair	of	horses.
----よ	私は	ある	行きつゝ	べく	御する	私の	新しき	一對を	の	馬
-	二	十一	十	九	八	五	六	六	四	三

（塙房次郎訳『ニューナショナルリードル独学自在. 第 2』(近代デジタルライブラリー URL: <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871029>) 出版者 輿論社, 明治 18 年(1885)出版, 第 1 部, 第 1 章)

上記は、代表的な英文訓読型の訳本の表示形式であるが、訳文は数字で示した順番通り読むことになるので、「----よ私は馬の私の新しき一對を御するべく行きつゝある」となる。(英語の単語それぞれに読みがルビで付されているがここでは省略している。そのため、人名はすでに英語の単語のルビで示されているので訳では「----」となっている。また、漢字とカタカナの表記を漢字とひらがなの表記に改めている。)

ここで取り扱う資料は、原文や読む順番が書かれていない、書き下しを施した訳文のみが記載されたものである。

## 2 調査方法

調査については、*New National 3rd Reader*の原文と『正則ニューナショナル第三読本直訳』の訳文を対照することで、用例を収集する。

用例の分析にあたり、時制表現と文の種類を組み合わせた形で分類をする。動詞の時制表現については、現在形、過去形、未来形、現在完了形、過去完了形、未来完了形、現在進行形、過去進行形、未来進行形、現在完了進行形、過去完了進行形、未来完了進行形の12の時制、また、文の種類については内容上の文の種類で分類し、平叙文を肯定と否定の2種、疑問文を疑問と否定疑問の2種、命令文を命令と禁止の2種、そして感嘆文1種の、計7種の表現で分類した。全体の組み合わせは、下の【表1-3-1】のようになる。12の時制と7種の表現の組み合わせで、84通りとなるが、命令文については、現在形のみとなるため、62通りの分類となる。

【表1-3-1 分類の種類】

文の種類 時制	平叙文		疑問文		命令文		感嘆文
	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止	
現在形	《1》	《13》	《25》	《37》	《49》	《50》	《51》
過去形	《2》	《14》	《26》	《38》			《52》
未来形	《3》	《15》	《27》	《39》			《53》
現在完了形	《4》	《16》	《28》	《40》			《54》
過去完了形	《5》	《17》	《29》	《41》			《55》
未来完了形	《6》	《18》	《30》	《42》			《56》
現在進行形	《7》	《19》	《31》	《43》			《57》
過去進行形	《8》	《20》	《32》	《44》			《58》
未来進行形	《9》	《21》	《33》	《45》			《59》
現在完了進行形	《10》	《22》	《34》	《46》			《60》
過去完了進行形	《11》	《23》	《35》	《47》			《61》
未来完了進行形	《12》	《24》	《36》	《48》			《62》

上記の分類に基づき、それぞれの分類でどのような訳がなされているのかを分析した。

### 3 調査報告

*New National 3rd Reader* においては、動詞は延べ数で 4095、異なり数では 447 あった。それぞれの動詞を、出現回数順に以下の【表 1-3-2】に示す。

これらの動詞について、それぞれ【表 1-3-1】に従い、分類をした。次ページの【表 1-3-3】に用例数を示す。

【表 1-3-2 *New National 3rd Reader* における動詞とその出現回数】

出現回数	動詞
609	be
302	say
138	have
131	see
120	do
106	go
99	make
79	come
68	look,think
66	take
63	know,tell
50	find
40	try
39	get
37	keep
35	hear
34	learn,sit
33	ask
32	give
31	grow
28	feel,like,love
27	begin,seem
25	call,leave,run,stand
24	cry,turn
21	eat,reply
20	put,wish
19	fly,stop
18	inquire,pick,throw,use
17	bring,show
16	catch,mean,watch
15	cover,round,suppose,work
14	fall,lay
13	become,laugh,pass
12	answer,jump,move,read,sleep
11	draw,help,hold,kill,lie,play,start,want
10	carry,enjoy,save,wait
9	blow,build,fill,let,set,sing,teach,walk
8	burn,dare,love,meet,need,notice,reach,rest,send,speak,visit
7	belong,dance,hunt,listen,mind,raise,rush,shine,shoot,understand
6	appear,believe,break,creep,cut,fear,feed,got,lose,place,rise,snow,wave
5	bend,buy,drive,enter,forget,frighten,happen,hide,hope,open,pull,sweep,tap,travel,wander
4	breathe,capture,catch,climb,cross,dash,dress,fasten,fling,fold,hurt,light,peep,please,remain,return,scold,scream,sell,stay,strike,thank,tie,touch,train,wake,wear,wonder,write
3	awake,bear,beat,cause,change,chatter,curl,disappear,fight,finish,fire,fit,flap,freeze,gather,glance,hang,hop,join,knock,last,loose,meddle,receive,repeat,roar,roll,seat,seize,serve,shake,shape,shock,shot,snatch,soil,spring,study,talk,tease,warm
2	afford,arrange,avoid,bark,blind,blush,bound,bow,burst,choke,choose,close,cook,count,dart,die,dive,double,drink,drop,end,escape,fail,fix,glide,gnaw,hit,hurry,invite,kneel,lead,lift,overtake,pay,peck,perch,pipe,plant,practice,push,quarrel,rag,recover,ripe,rob,saw,scratch,seek,sew,slide,slip,smile,smooth,sound,spend,spin,split,stick,stretch,string,supply,swallow,swing,tinkle,toss,treat,tuck,weep,whine,wound,yell
1	act,advance,agree,allow,appeal,arise,attach,attack,attend,behold,being,bellow,blaze,bloom,blunt,boil,brood,burrow,bury,bush,cease,chase,chop,clap,clean,collect,color,consent,consist,copy,cook,courage,course,crack,cratch,crawl,crumple,crush,curtsy,dawn,dazzle,deafen,death,decay,delight,describe,deserve,dig,dip,done,dream,drip,dry,dwell,empty,enclose,entice,exclaim,expect,explain,extend,face,fade,fatten,fish,flash,flit,float,flutter,force,form,frost,gain,gin,glow,head,heat,idle,insist,intend,interfere,jog,knit,leap,limp,linger,load,lock,long,lounge,low,miss,mix,mount,mourn,neigh,now,obey,omit,patter,pile,plan,point,pop,prefer,prick,print,produce,promise,propose,punish,rage,recite,remember,replay,resolve,ride,rob,rock,rode,row,ruffle,sail,search,shelter,shiver,sift,sink,skip,slight,smell,smoke,snail,sniff,speed,spill,spoil,sputter,spy,squeal,starve,straggle,stroke,stuff,suit,surprise,surround,swim,tame,tear,tempt,tend,trample,trickle,trip,trust,tumble,twin,unmove,unravel,upset,venture,wash,waste,weave,weed,weigh,whirl,whisper,whistle,will,wrap



【表 1-3-3 分類の種類と用例数】

時制 \ 文の種類	平叙文		疑問文		命令文		感嘆文
	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止	
現在形	《1》 1194	《13》 106	《25》 77	《37》 8	《49》 102	《50》 10	《51》 0
過去形	《2》 1448	《14》 72	《26》 13	《38》 2			《52》 0
未来形	《3》 79	《15》 14	《27》 2	《39》 1			《53》 0
現在完了形	《4》 77	《16》 5	《28》 3	《40》 1			《54》 0
過去完了形	《5》 69	《17》 9	《29》 0	《41》 0			《55》 0
未来完了形	《6》 0	《18》 0	《30》 0	《42》 0			《56》 0
現在進行形	《7》 23	《19》 2	《31》 4	《43》 0			《57》 0
過去進行形	《8》 53	《20》 0	《32》 0	《44》 0			《58》 0
未来進行形	《9》 0	《21》 0	《33》 0	《45》 0			《59》 0
現在完了進行形	《10》 1	《22》 0	《34》 0	《46》 0			《60》 0
過去完了進行形	《11》 5	《23》 0	《35》 0	《47》 0			《61》 0
未来完了進行形	《12》 0	《24》 0	《36》 0	《48》 0			《62》 0

この分類を、それぞれの動詞に対応している訳をもとに分析した結果、訳出のパターンがあることがわかった。以下、時制と表現ごとにそれぞれの訳出パターンと用例をあげる。

### 3. 1 基本の訳

《1》[現在形／平叙文・肯定]の訳が基本の訳となり、それに時制や文の種類それぞれの表現が加わることで訳が為されている。パターンは、

... verb ... → …動詞（終止形）

となる。用例は以下のようなになる<sup>v</sup>。

<sup>v</sup> 用例については以下の通りに表示している。

# 用例番号 章番号 - 文番号  
原文  
訳文

(例)

# 2 04 - 37

That is for you to guess.

其れが推量するべく汝に向てある

上記の(例)は、用例番号2, 4章37文目, 原文“*That is for you to guess.*”, 訳文「其れが推量するべく汝に向てある」となる。

# 1 01 - 01

“ Now, Uncle George,” said Milly, “ We are ready to hear the story you were to tell us.”

今アंकルチャルチ我等は汝が我等に話すべくありし話を聴く可く用意してあると  
ミルリーが云ひし

# 2 04 - 37

That is for you to guess.

其れが推量するべく汝に向てある

# 3 20 - 45

He burrows in trees.

彼れが樹木の内に穴を掘る

# 1 「ある」、# 2 「ある」、# 3 「掘る」のように、動詞の終止形になっている。

### 3. 2 時制ごとの訳

まず、時制ごとの訳のパターンを見る。ここでは、基本となる時制の現在形以外の、過去形、未来形、完了形、進行形、完了進行形の 5 つに分けてパターンをあげる。

#### 3. 2. 1 過去形の訳

基本の訳に「シ」を下接させた形が、過去形の訳となる。動詞は「シ」に上接する形に活用する。

... verb ... → ... 動詞 シ

パターンは上記のようになる。

以下に《2》[過去形／平叙文・肯定] の用例をあげる。

# 4 01 - 25

“ Yes,” said Uncle George, “ I was that very baby.”

然り私が其の眞の赤子でありしとアंकル、チャルチが云ひし

# 5 21 - 08

“ To the vegetable kingdom,” replied one of the little girls.

植物門にまでと小さき女児の一が答へし

# 4では, said が, said の訳「云フ」に「シ」を下接して,「云ひし」と訳されている。  
was も, be 動詞の訳「アリ」に「シ」を下接して,「ありし」と訳されている。# 5では,  
reply の訳「答ふ」に「シ」を下接して,「答へし」と訳されている。

### 3. 2. 2 未来形の訳

基本の訳に will の訳に相当する「デアラウ」を下接させた形が, 未来形の訳となる。動  
詞は「デアラウ」に上接する形に活用する。パターンは以下のようなになる。

... will verb ... → ... 動詞 デアラウ

用例として, 《3》[未来形／平叙文・肯定] のものをあげる。

# 6 04 - 16

“ Well, I will take you, now.”

好し今ま私が汝を取るであらう

# 7 41 - 11

“ I’ll try to, George.”

私はまで試むであらうジョルヂ

# 6では, take の訳「取ル」に「デアラウ」が下接して,「取るであらう」と訳されてい  
る。# 7では, try の訳「試ム」に「デアラウ」が下接して,「試むであらう」と訳されて  
いる。

### 3. 2. 3 完了形の訳

完了形の用例は, 《4》[現在完了形／平叙文・肯定] と《5》[過去完了形／平叙文・肯  
定] で見られた。それぞれ, 分類ごとに見ていく。

#### 3. 2. 3. 1 現在完了形の訳

現在完了形の訳のパターンは次のようになる。

... have / has verb(p.p.) ... → ... 動詞 タリ／タ

現在完了形では, 動詞の訳に「タリ／タ」が下接するパターンとなっている。動詞は, 「タ  
リ／タ」に接続する形に活用する。

用例は《4》[現在完了形／平叙文・肯定]のもので、以下の#8、#9のようになる。

#8 23 - 02

“ Yes, Frank,” replied Uncle George, “ and I’ ve taken a long drive in a sledge drawn by a reindeer.”

然りフランク、而して私が馴鹿に由て曳かれたる橇に於て長き驅逐を取つたりとア  
ンクル、ジョルヂが答へし

#9 30 - 27

I have heard that it is good to eat.

鯨脂よ伯父私は其れが食ふべく好くあることを聞きたり

#8では、takeの訳「取ル」に「タリ」が下接し、「取つたり」となっている。#9ではhearの訳「聞ク」に「タリ」が下接し、「聞きたり」となっている。

### 3. 2. 3. 2 過去完了形の訳

過去完了形の訳のパターンは、

... had verb(p.p.) ... → … 動詞 タリキ

となる。動詞の訳に「タリキ」が下接するパターンとなっている。動詞は、「タリキ」に接続する形に活用する。

用例は《5》[過去完了形／平叙文・肯定]のもので、以下の#6である。

#10 54 - 28

Tom had learned a lesson, and one that he was likely to remember.

トムが教訓を學んだりき而してもの其れを彼れが多分記憶するべくありし處のものを學んだりき

#11 12 - 04

The fairy had turned him into a dog, and Scrubby into a boy!

妖精が彼れを犬にまで而してスクラッピーを小児にまで變じたりき

上記の#10では、2度訳されているが、learnの訳「學ブ」に「タリキ」が下接し、「學んだりき」となっている。#11では、turnの訳「變ズ」に「タリキ」が下接し、「變じたり

き」となっている。

### 3. 2. 4 進行形の訳

進行形においては、現在進行形、過去進行形の用例が見られた。それぞれ時制ごとに用例を見て、パターンを提示する。

#### 3. 2. 4. 1 現在進行形のパターン

現在進行形は、次のようなパターンになると考えられる。

... be verbing ... → ... 動詞 ツツアル

動詞に **ing** が付いた形式が「動詞 ツツ」と訳される。動詞は「ツツ」に上接するように活用する。助動詞としての **be** は必ず「アル」と訳される。現在進行形は「ツツアル」がパターンとなる。

具体的な用例は《7》[現在進行形／平叙文・肯定]のもので、次のようなものがあった。

#12 41 - 01

“ George, I am going to eat my supper by myself, after this,” said little Harry.

ジョルジ私が此後私自身に由て私の晩飯を食ふべく行きつつあると小さきハーレーが云ひし

#13 36 - 08

The boys are laughing at me, but am I not right.

童子等が私に於て笑ひつつある併し私が正しくあらぬか

#12 では、「行きつつある」と現在進行形が「ツツアル」で訳されている。#13 では、**laugh** の訳「笑フ」に「ツツアル」が下接し、「笑ひつつある」となっている。

#### 3. 2. 4. 2 過去進行形のパターン

《8》[過去進行形／平叙文・肯定]の場合は、過去形のパターン「シ」が付加し、次のようになる。

... was / were verbing ... → ... 動詞 ツツアリシ

動詞に *ing* が付いた形式が「動詞 ツツ」と訳される。動詞は「ツツ」に上接するように活用する。助動詞としての *be* は必ず「アリシ」と訳される。過去進行形は「ツツアリシ」がパターンとなる。

具体的な用例は《8》[過去進行形／平叙文・肯定]のもので、次のようなものがあった。

# 14 04 - 21

He was going to sweep the floor.

彼が床を掃ふべく行きつつありし

# 15 37 - 04

John was thinking of a baboon.

ジョンは「バムブー」に就て考へつつありし

# 14 では *look* の訳「眺メル」に「ツツアリシ」が下接した「眺めつゝありし」となっている。# 15 では *go* の訳「行く」に「ツツアリシ」が下接した「行きつゝありし」となっている。

### 3. 2. 5 完了進行形の訳

現在完了進行形と過去完了進行形に用例が見られた。用例数は多いとは言えないが、用例とパターンを提示する。

#### 3. 2. 5. 1 現在完了進行形の訳

現在完了進行形は《10》[現在完了進行形／平叙文・肯定]では、以下の用例が見られた。

# 16 43 - 32

“ She has been trying to warm herself,” people said ;...

彼女が彼女自身を暖むるべく試みつつありたりきと人民が云ひし…

1例のみであるため、パターンについて断言することはできないが、下記のように予測できると考えられる。

... have / has been verbing ... → … 動詞 ツツアリタリキ

現在完了形と進行形のパターンを合わせたものは「ツツアリタリ」になると考えられるが、ここでは「ツツアリタリキ」となっている。1例のみの用例であるので、パターンとして確定することはできない。

### 3. 2. 5. 2 過去完了進行形の訳

現在完了進行形は《1 1》[過去完了進行形／平叙文・肯定]では、以下の用例が見られた。

# 17 47 - 25

As he passed by the tree under which he had been sitting in the morning, he saw the old crow perched on one of the branches, looking very grave.

彼れが樹其れ下に彼れが朝に於て坐はりつつあつたりき處の樹の側を過ぎしとき彼れが甚だ真面目に眺する處で枝の一の上に栖みたる老ひたる烏を見し

# 18 54 - 12

He had been peeping about and listening, and hearing of some wonderful machine that his father had just received.

彼が或る驚くべき機械其れを彼の父が丁度受取りたりき處の或る驚くべき機械の周りに窺ひつつ而して機械に就て耳を欵てつつ而して聴きつつありたりき

# 17 は「坐はりつつあつたりき」となっている。# 18 では、3つの動詞があるが、それぞれ、「窺ひつつ…ありたりき」「欵てつつ…ありたりき」「聴きつつありたりき」となっている。

パターンは以下のようにになると考えられる。

... had been verbing ... → ... 動詞 ツツアリタリキ／ツツアツタリキ

動詞の訳に、進行形のパターン「ツツアリ」と過去完了形のパターン「タリキ」を合わせた、「ツツアリタリキ／ツツアツタリキ」を下接して訳文を作っていると考えられる。

### 3. 3 文の種類ごとの訳

文の種類ごとの訳のパターンを見ていく。ここでは、基本となる文の種類の [平叙文・肯定] 以外の, [平叙文・否定], [疑問文・疑問], [疑問文・否定疑問], [命令文・命令], [命令文・禁止], [感嘆文] の6つの分類をそれぞれ見ていく。

### 3. 3. 1 [平叙文・否定] の訳

[平叙文・否定] の訳では場合、現在形、過去形、未来形、現在完了形、過去完了形、現在進行形で用例が見られた。それぞれ用例とパターンを以下に提示する。

#### 3. 3. 1. 1 現在形の [平叙文・否定] の訳

《13》[現在形／平叙文・否定] の訳では、原文において、一般動詞と be 動詞とで否定文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

... do not (don't) verb ... → ... 動詞 ナサヌ／ナサン

##### ② 動詞が be 動詞の場合

... be not ... → ... アラヌ

動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて「ヌ(ン)」を下接した、「ナサヌ(ン)」を付加して訳文を作成する。また、動詞が be 動詞の場合は、be の訳である「アリ」を活用させて「ヌ」を下接した、「アラヌ」として訳文を作成する。

具体的な用例は、《13》[現在形／平叙文・否定] のもので、それぞれ次のようである。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

#19 11-10

“Aunty, it doesn't hurt him!” cried out Bobby, “Dogs are not like boys.”

アーンテイー其れが彼れを害し為さぬ犬が小児等の如くあらぬとロッピーが叫びし

##### ② 動詞が be 動詞の場合

#20 11-10

“Aunty, it doesn't hurt him!” cried out Bobby, “Dogs are not like boys.”

アーンテイー其れが彼れを害し為さぬ犬が小児等の如くあらぬとロッピーが叫びし

#19, #20 は同じ文であるが、#19 では hurt の訳「害ス」に「ナサヌ」が下接した「害し為さぬ」となっている。#20 では、「あらぬ」と訳されている。

#### 3. 3. 1. 2 過去形の [平叙文・否定] の訳

《14》[過去形／平叙文・否定] の訳では、原文において、一般動詞と be 動詞とで否定文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。



① 動詞が一般動詞の場合

... did not(didn't) verb ... → … 動詞 ナサザリシ

② 動詞が be 動詞の場合

... was not(wasn't)/were not(weren't) ... → … アラザリシ

動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて、否定の「ザリ」と過去の「シ」を下接した、「ナサザリシ」を付加して訳文を作成する。また、動詞が be 動詞の場合は、be の訳である「アリ」を活用させて、否定の「ザリ」と過去の「シ」を下接した、「アラザリシ」として訳文を作成する。

具体的な用例は、《14》[過去形／平叙文・否定]のもので、次のようである。

① 動詞が一般動詞の場合

#21 17 - 16

The old fellow did not move.

老いたるものが動きなさざりし

② 動詞が be 動詞の場合

#22 11 - 22

“O!” said Bobby ; and he thought that fairies were not very pretty.

おーとロッピーが云ひし而して彼れが其の妖精が甚だ奇麗であらざりしと考へし

#21 では move の訳「動ク」に「ナサザリシ」が下接した「動きなさざりし」となっている。#22 では、「あらざりし」と訳されている。

### 3. 3. 1. 3 未来形の [平叙文・否定] の訳

《15》[未来形／平叙文・否定]の訳では、現在形や過去形と違い、原文における否定文の作り方は1通りである。

... will not (won't) verb ... → … 動詞 ヌデアロウ

否定の「ヌ(ン)」に未来の「デアロウ」を付加した「ヌデアロウ」をパターンとして訳文を作成している。

具体的な用例は、《15》[未来形／平叙文・否定]のもので、次のようである。

# 23 41 - 17

“ I won' t do it any more, Gorge.”

私は最早其れを為さぬであらうジョルヂ

# 24 47 - 12

Perhaps he will not believe that I ever had one.

恐らくは私が曾て一つを持ちしことを信ぜぬであらう

# 23 では、do の訳「為ス」に「ヌデアロウ」を下接した、「為さぬであらう」となっている。# 24 では、believe「信ズ」に「ヌデアロウ」を下接した、「信ぜぬであらう」となっている。

### 3. 3. 1. 4 現在完了形の [平叙文・否定] の訳

《16》[現在完了形／平叙文・否定] の訳出パターンは以下のようなになる。

... heve / has not verb ... → … 動詞 ナンダリ

否定を「ナン」と訳し、それに完了形のパターン「ダリ」が下接した「ナンダリ」がパターンとなっている。

具体的な用例は以下になる。

# 25 14 - 34

Since then I' ve never felt that I could shoot a squirrel, ...

爾来私が決して私が栗鼠を撃ち能ひしことを感しなんだり…

# 26 15 - 15

I while seated in the pleasant shade of some noble tree have listened to Robin Redbreast singing as though he would burst his little throat, and I have not moved until his song was ended, and he flew away a happy bird.

私が或る高き樹の蔭に坐せし間彼れが彼れの小さき咽喉を張らずであらうかの如く謡ふ處の相思鶉にまで側てたり而して私が彼の歌が終てありしまで動かなんだり而して彼れが一の幸福なる鳥で飛去りしまで

# 25 では「感しなんだり」、# 26 では「動かなんだり」と、どちらも「ナンダリ」を用いて訳されている。

### 3. 3. 1. 5 過去完了形の [平叙文・否定] の訳

《17》[過去完了形／平叙文・否定] では、訳出パターンは以下のように考えられる。

... had not verb ... → … 動詞 ナンダリキ

否定を「ナン」と訳し、それに完了形のパターン「ダリキ」が下接した「ナンダリキ」がパターンになると予想できる。

《17》[過去完了形／平叙文・否定] の用例は以下のようになる。

#27 26 - 30

Charles had never seen any thing like it before.

チャーレスが決して前に其の如き何等の者を見なんだりき

#28 17 - 15

The gentleman had not waited long before the elephant had a bite.

紳士が象が一嚙を持ちし前に永く待たなんだりき

#27 では「見なんだりき」、#28 では「待たなんだりき」とを用いて訳がなされている。

### 3. 3. 1. 6 現在進行形の [平叙文・否定] の訳

《19》[現在進行形／平叙文・否定] では2例の用例が見られた。以下に用例を示す。

#29 11 - 03

“Aunty, I am not teasing him,” said Bobby, turning around and looking up into Aunt Peggy’s face with a look of surprise.

アーンティー私は彼れを窘めつつあらぬとロッピーが云ひし顧みる處で而して驚駭の相貌を以てアーント、ベッギーの顔を眺める處で

#30 26 - 08

He says that he is not going away to school, while his father has plenty of money.”

彼れは彼れの父が金銭の沢山を持つ間學校にまで彼等に往きつつあらぬことを云ふ

#29 では tease の訳「窘ム」に「ツツアラヌ」が下接している。また、#30 では、go away

を「往ク」に「ツツアラヌ」が下接している。

用例数は少ないが、以下のようなパターンが考えられる。

... be not verbing... → … 動詞 ツツアラヌ

### 3. 3. 2 [疑問文・疑問] の訳

[疑問文・疑問] の訳の場合、疑問が「カ」で訳される。それぞれ、現在形、過去形、未来形、現在完了形、現在進行形で用例が見られた。時制ごとにパターンが見られたので、以下で、用例とパターンを確認する。

#### 3. 3. 2. 1 現在形の [疑問文・疑問] の訳

現在時制の [疑問文・疑問] では、原文において、一般動詞と be 動詞とで疑問文の作り方に違いがあるため、訳のパターンが2つに分かれる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

Do ... verb ... ? → … 動詞 ナスカ

##### ② 動詞が be 動詞の場合

Be ... ? → … アルカ

具体的な用例は《25》[現在形／疑問文・疑問]のもので、次の通りになる。

##### ① 動詞が一般動詞の場合

#31 12 - 36

“Do you think you deserve it?” asked the fairy.

汝は汝が其れに相当すると考へ為すかと妖精が尋ねし

##### ② 動詞が be 動詞の場合

#32 04 - 10

“Who are you, here in my master’s granary?” said the cat.

私の主人の穀倉の内に此處に汝は誰れであるかと猫が云ひし

動詞が一般動詞の場合は、#21「考へ為すか」のように、do の訳である「ナス」を活用させて「カ」を下接した、「ナスカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。また、動詞が be 動詞の場合は、#22のように、be の訳である「アリ」を活用させて「カ」を下接した、「あるか」として訳文を作成している。

### 3. 3. 2. 2 過去形の [疑問文・疑問] の訳

過去時制でも、現在時制の時と同じく、一般動詞と be 動詞とで疑問文の作り方に違いがあるため、2つに分けて考える必要があるが、収集した用例で、be 動詞を用いたものがなかった。以下にそれぞれのパターンを示すが、be 動詞については予想のパターンとなる。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

Did ... verb ... ? → … 動詞 ナセシカ

#### ② 動詞が be 動詞の場合

Was/Were ... ? → … アリシカ

用例は《26》[過去形／疑問文・疑問]のもので、以下のようになる。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

#33 01 - 21

When did we see him?

何時我々が彼れを見為せしか

動詞が一般動詞の場合は、#33「見為せしか」のように do の訳である「ナス」を活用させて「カ」を下接した、「ナセシカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。また、動詞が be 動詞の場合は、be の訳である「アリ」を活用させて「カ」を下接した「アリシカ」として訳文を作成すると考えられる。

### 3. 3. 2. 3 未来形の [疑問文・疑問] の訳

未来時制の場合、現在時制や過去時制と違って、疑問文は一般動詞、be 動詞の別に関係なく、1通りになる。パターンは以下のようにになると考えられる。

Will ... verb ... ? → … 動詞 デアラウカ

用例は1例のみであったが、《27》[未来形／疑問文・疑問]のもので以下のようになる。

#34 52 - 05

“ Mother, will you let me go?”

母汝は私をして行かしむるであらうか

#34では、let の訳「シム」に、未来時制のパターン「デアラウ」と疑問のパターン「カ」

を組み合わせた、「デアラウカ」を付加した、「しむるであらうか」となっている。

### 3. 3. 2. 4 現在完了形の [疑問文・疑問] の訳

《28》[現在完了形／疑問文・疑問] の訳のパターンは、以下のようになると考えられる。

Have/Has... verb(p.p.) ... ? → … 動詞 タカ

具体的な用例は以下のようなものである。

#35 27 - 07

Have you forgotten all about those days, John?

汝は此等の日に就て總て忘れたかジヨン

#35 では、forget の訳「忘ル」に、現在完了形のパターンの「タ」と疑問のパターンの「カ」を合わせた、「タカ」が下接する形になっている。

### 3. 3. 2. 4 現在進行形の [疑問文・疑問] の訳

《31》[現在進行形／疑問文・疑問] の用例は以下のようなになる。

#36 04 - 12

“ What are you doing here?”

此處に汝は何を為しつつあるか

#36 では do の訳「為ス」に、現在進行形のパターンの「ツツアル」と疑問のパターンの「カ」を合わせた、「ツツアルカ」が下接する形になっている。

訳出パターンは以下のようなになると考えられる。

Be ... verbing ... ? → … 動詞 ツツアルカ

### 3. 3. 3 [疑問文・否定疑問] の訳

[疑問文・否定疑問] については、現在形、過去形、未来形、現在完了形で用例が見られた。それぞれ用例とパターンを提示する。

### 3. 3. 3. 1 現在形の [疑問文・否定疑問] の訳

《37》[現在形／疑問文・否定疑問] では、訳出パターンは以下のようになる考えられる。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

Do/Does ... not verb ... ? → … 動詞 ナサヌカ／ナサンカ

#### ② 動詞が be 動詞の場合

Be ... not ... ? → … アラヌカ

動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて、否定のパターンの「ヌ(ン)」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「ナサヌ(ン)カ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。動詞が be 動詞の場合は、be 「アリ」を活用させて否定のパターンの「ヌ」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「アラヌカ」としている。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

# 37 05 - 09

“ What! You do not like to work?” said the crow again.

何かよ、汝は働くべく好み為さぬかと再び烏が云ひし

#### ② 動詞が be 動詞の場合

# 38 59 - 19

“ Isn't sugar made from any thing else besides the sugar cane?” inquired James.

砂糖が甘蔗の外其他或る物から作されてあらぬかとジエームズが尋ねし

一般動詞の用例である # 37 では、「好み為さぬか」となっている。また、動詞が be 動詞の用例である # 38 では「あらぬか」となっている。

### 3. 3. 3. 2 過去形の [疑問文・否定疑問] の訳

《38》[過去形／疑問文・否定疑問] では2例のみの用例であったが、訳出パターンは以下のようになると考えられる。

#### ① 動詞が一般動詞の場合

Did not ... verb ... ? → … 動詞 ナサザリシカ

## ② 動詞が be 動詞の場合

Was/Were not ... ? → … アラザリシカ

動詞が一般動詞の場合は、do の訳である「ナス」を活用させて、過去の否定のパターンの「ザリ」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「ナサザリシカ」を動詞の訳に付加して訳文を作成している。動詞が be 動詞の場合は、be「アリ」を活用させて過去の否定のパターンの「ザリ」と疑問のパターンの「カ」を下接した、「アラザリシカ」としている。

## ① 動詞が一般動詞の場合

# 39 37 - 03

Did you never see a bamboo cane?

汝は曾て竹の枝を見なさざりしか

## ② 動詞が be 動詞の場合

# 40 36 - 07

Was not the man who wore the turban a bamboo?

人其者は頭巾を被ぶりし處のひとは「バムブー」であらざりしか

一般動詞の用例である # 39 では、「見なさざりしか」となっている。また、動詞が be 動詞の用例である # 40 では「あらざりしか」となっている。

### 3. 3. 3. 2 未来形の [疑問文・否定疑問] の訳

《39》[未来形／疑問文・否定疑問] では1例のみの用例であったが、訳出パターンは以下のようにになると考えられる。

Will not... verb ... ? → … 動詞 ヌデアラウカ

用例は以下のものであった。

# 41 11 - 08

Won' t that be fan?

其れが戯言であらぬであらふか

# 41 では、be の訳「アリ」に、未来形の否定の「ヌデアラフ」と疑問のパターンの「カ」を合わせた「ヌデアラウカ」が下接している。



### 3. 3. 3. 2 現在完了形の〔疑問文・否定疑問〕の訳

《40》〔現在完了形／疑問文・否定疑問〕では1例のみの用例であったが、訳出パターンは以下のようにになると考えられる。

Have/Has... verb(p.p.) ... ? → … 動詞 ナンダカ

現在完了形のパターンの「ナンダ」と疑問のパターンの「カ」が下接した、「ナンダカ」が動詞に付加されて訳文を作っていると考えられる。

用例は以下の通りである。

#42 32 - 23

“ Hasn't your grandmother shown you her old spinning wheel and loom that are in the attic?”

汝の祖母が彼女の舊き紡糸車と而して機其れは樓中にある處の舊き紡糸車と而して機を汝に示さなんだか

#42では「示さなんだか」と、「ナンダカ」がshowの訳「示ス」に下接する形になっている。

### 3. 3. 4 〔命令文・命令〕の訳

《49》〔現在形／命令文・命令〕の訳は次のようなパターンとなる。

Verb ... → … 動詞（命令形）（ヨ）

動詞の命令形、または、それに「ヨ」を付加した形になる。

用例は《49》〔現在形／命令文・命令〕のもので、以下のようになる。

#43 12 - 14

“ Get out!” cried the dog boy, and gave the boy dog a good, hard kick.

去れと犬の小児が叫びし而して小児の犬に善き酷き蹴を与へし

#43では「去れ」と、動詞の命令形で訳がなされている。

### 3. 3. 5 〔命令文・禁止〕の訳

《50》〔現在形／命令文・禁止〕の訳については、次のようなパターンであった。

Do not (Don't) ... → … 動詞 ナスナ (ヨ)

Do not (Don't) を「ナスナ (ヨ)」と訳し、動詞に下接する。動詞は「ナスナ (ヨ)」に上接する形に活用する。

《50》[現在形／命令文・禁止] の用例は以下のようなになる。

#44 04 - 17

“ O no! Don' t take us,” said the house mouse, “ and I' ll tell you a story.”

お一否な我々を取り為すな而して私が汝に一の話を語るであらうと家の小鼠が云ひし

#44 では、「取り為すな」というように、take の訳「取ル」に「ナスナヨ」が下接した形になっている。

## 4 考察

### 4. 1 訳の固定

用例を分類し、分析した結果、訳が固定化していることがわかった。以下でそれらについて見ていくことにする。

#### 4. 1. 1 過去時制の訳の固定

過去時制の訳が「シ」で統一されていることがわかった。

[過去形／平叙文・肯定]

# 4 01 - 25

“ Yes,” said Uncle George, “ I was that very baby.”

然り私が其の眞の赤子でありしとアンクル、ヂヤルヂが云ひし

(再掲)

[過去進行形／平叙文・肯定]

# 14 04 - 21

He was going to sweep the floor.

彼が床を掃ふべく行きつつありし

(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 33 01 - 21

When did we see him?

何時我々が彼れを見為せしか

(再掲)

# 4, # 14, # 33 では過去時制については「シ」で訳されている。

# 39, # 40 は[過去形／疑問文・否定疑問]の用例であるが、ここでも、過去の訳は「シ」であった。

# 39 37 - 03

Did you never see a bamboo cane?

汝は曾て竹の枝を見なさざりしか

(再掲)

# 40 36 - 07

Was not the man who wore the turban a bamboo?

人其者は頭巾を被ぶりし處のひとは「バムブー」であらざりしか

(再掲)

以上のように、過去時制を表すパターンが「シ」であることがわかる。

#### 4. 1. 2 未来時制の訳の固定

未来を表す訳も「デアラウ」に固定化しているが、これについては、will に対しての訳の固定であるとみることもできる。以下に未来時制の用例を再度提示する。

[未来形／平叙文・肯定]

# 6 04 - 16

“ Well, I will take you, now.”

好し今ま私が汝を取るであらう

(再掲)

[未来形／平叙文・否定]

# 23 41 - 17

“ I won' t do it any more, Gorge.”

私は最早其れを為さぬであらうジョルヂ

(再掲)

# 34 は [未来形／疑問文・疑問] の用例であるが、ここでも「デアラウ」で訳されている。

[未来形／疑問文・疑問]

# 34 52 - 05

“ Mother, will you let me go?”

母汝は私をして行かしむるであらうか

(再掲)

文の種類によらず、「デアラウ」で訳が固定していると考えられる。

#### 4. 1. 3 否定の訳の固定

否定に関しての訳も固定していると考えられるが、現在形と未来形、現在進行形では「ヌ(ン)」で、過去形は「ザリ」、現在完了形と過去完了形では「ナン」となり、時制により違いが見られる。

下記の現在形と、未来形の用例で、# 19, # 24 どちらも「ヌ」で訳されている。

[現在形／平叙文・否定]

# 19 11-10

“ Aunty, it doesn’ t hurt him!” cried out Bobby, “ Dogs are not like boys.”  
アーンティー其れが彼れを害し為さぬ犬が小児等の如くあらぬとロッピーが叫びし  
(再掲)

[未来形／平叙文・否定]

# 24 47 - 12

Perhaps he will not believe that I ever had one.  
恐らくは私が曾て一つを持ちしことを信ぜぬであらう  
(再掲)

下記 # 37, # 41 のように、否定疑問であっても「又 (ン)」で訳される。

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 37 05 - 09

“ What! You do not like to work?” said the crow again.  
何かよ、汝は働くべく好み為さぬかと再び烏が云ひし  
(再掲)

[未来形／疑問文・否定疑問]

# 41 11 - 08

Won’ t that be fan?  
其れが戯言であらぬであらふか  
(再掲)

現在進行形でも「又」が否定のパターンとして用いられている。

# 29 11 - 03

“ Aunty, I am not teasing him,” said Bobby, turning around and looking up into Aunt Peggy’ s face with a look of surprise.  
アーンティー私は彼れを窘めつつあらぬとロッピーが云ひし顧みる處で而して驚駭の相貌を以てアーント、ベッギーの顔を眺める處で  
(再掲)

# 30 26 - 08

He says that he is not going away to school, while his father has plenty of money.”

彼れは彼れの父が金銭の沢山を持つ間學校にまで彼等に往きつつあらぬことを云ふ  
(再掲)

過去形では，平叙文でも，疑問文でも否定が「ザリ」で固定されている。

[過去形／平叙文・否定]

# 21 17 - 16

The old fellow did not move.

老いたるものが動きなざりし

(再掲)

# 22 11 - 22

“ O!” said Bobby ; and he thought that fairies were not very pretty.

おーとロッピーが云ひし而して彼れが其の妖精が甚だ奇麗であらざりしと考へし  
(再掲)

[過去形／疑問文・否定疑問]

# 39 37 - 03

Did you never see a bamboo cane?

汝は曾て竹の枝を見なざりしか

(再掲)

上に再度示した， # 21， # 22， # 39 でも「ザリ」となっている。

現在完了形と過去完了形の否定の用例を以下に再度示す。

[現在完了形／平叙文・否定]

# 25 14 - 34

Since then I' ve never felt that I could shoot a squirrel, ...

爾来私が決して私が栗鼠を撃ち能ひしことを感じなんだり…

(再掲)

[過去完了形／平叙文・否定]

# 27 26 - 30

Charles had never seen any thing like it before.

チャーレスが決して前に其の如き何等の者を見なんだりき

(再掲)

# 25, # 27 のように否定のパターンとして「ナン」が用いられていることがわかる。

以上のように、否定であれば、文の種類に関係なく、現在形と未来形、現在完了形は「又(ン)」、過去形では「ザリ」、現在完了形と過去完了形では「ナン」でパターンが固定されていることがわかる。

#### 4. 1. 4 疑問の訳の固定

疑問の訳に関しては、時制や文の種類に関係なく、すべて「カ」で訳されていた。

[現在形／疑問文・疑問]

# 31 12 - 36

“ Do you think you deserve it?” asked the fairy.

汝は汝が其れに相当すると考へ為すかと妖精が尋ねし

(再掲)

[未来形／疑問文・疑問]

# 34 52 - 05

“ Mother, will you let me go?”

母汝は私をして行かしむるであらうか

(再掲)

[過去形／疑問文・否定疑問]

# 40 36 - 07

Was not the man who wore the turban a bamboo?

人其者は頭巾を被ぶりし處のひとは「バムブー」であらざりしか

(再掲)

[現在完了形／疑問文・否定疑問]

# 42 32 - 23

“ Hasn't your grandmother shown you her old spinning wheel and loom that are in the attic?”

汝の祖母が彼女の舊き紡絲車と而して機其れは樓中にある處の舊き紡絲車と而して機を汝に示さなんだか

(再掲)

# 31, # 34, # 40, # 42 を見ると、すべて「カ」で訳されていることがわかる。疑問を表すパターンとして「カ」が固定していることがわかる。

#### 4. 2 be, do の訳の固定

be, do, have については、助動詞としての役割も持っている。be, do について、どのようなであったか以下で見ていく。

##### 4. 2. 1 be の訳の固定

be は動詞以外の用法として、進行形の助動詞として使用された。[3. 2. 4 進行形の訳]でも見たように、「アリ」で訳出することは変化していない。基本の訳となる、[現在形／平叙文・肯定]の#2では、「ある」と訳されている。

# 2 04 - 37

That is for you to guess.

其れが推量するべく汝に向てある

(再掲)

一方で、以下の#12では、助動詞として用いられ、やはりここでも「ある」と訳されている。

# 12 41 - 01

“ George, I am going to eat my supper by myself, after this,” said little Harry.

ジョルジ私が此後私自身に由て私の晩飯を食ふべく行きつつあると小さきハーレーが云ひし

(再掲)

その他の動詞としての用法の、[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]においても、同様に、常に「アリ」で訳出されていた。動詞、助動詞にかかわらず、訳が変化していないことから、be の訳は固定しているといえるだろう。

##### 4. 2. 2 do の訳の固定

do は、助動詞としての用法の方が多いが、用法にかかわらず、do 自体の訳は「ナス」となっていた。[平叙文・否定]、[疑問文・疑問]、[疑問文・否定疑問]、[命令文・禁止]で助動詞として用いられるが、どの用法においても訳に変化はない。助動詞としての用法であると、訳文にした場合、日本語での理解という点では do の訳が不要であり、do の訳を加えることで日本語として不自然になる。しかし、省略することはなく必ず「ナス」で訳されていた。



以下に、再度それぞれの用例を提示して、do の訳として「ナス」がパターンとして固定していることを見ていくことにする。

[現在形／平叙文・否定]

# 19 11-10

“ Aunty, it doesn’ t hurt him!” cried out Bobby, “ Dogs are not like boys.”  
アーンテイー其れが彼れを害し為さぬ犬が小児等の如くあらぬとロッピーが叫びし  
(再掲)

[過去形／疑問文・疑問]

# 33 01 - 21

When did we see him?  
何時我々が彼れを見為せしか  
(再掲)

[現在形／疑問文・否定疑問]

# 37 05 - 09

“ What! You do not like to work?” said the crow again.  
何かよ、汝は働くべく好み為さぬかと再び烏が云ひし  
(再掲)

[命令文・禁止]

# 44 04 - 17

“ O no! Don’ t take us,” said the house mouse, “ and I’ ll tell you a story.”  
お一否な我々を取り為すな而して私が汝に一の話語るであらうと家の小鼠が云ひし  
(再掲)

# 19, # 33, # 37, # 44 は、どれも do を助動詞として用いた用例になるが、どれも do を「ナス」で訳していることがわかる。

## 5 まとめ

動詞に関する部分の訳出のパターン化について以上で確認することができた。特に、be や do のように、助動詞としての用法であっても、訳語が変化しないことから、よりパターン化がなされていたことがわかる。このパターン化は「英文訓読」の方式により起こったと考えられるが、その方法が非常に機械的であったことがわかる。動詞自体の訳は固定させ、それに伴う時制や表現の訳を付加していくことで、訳文を作成している。

訳出のパターンは次のようになっていると考えられる。

- ・ [現在形／平叙文・肯定] を基本の訳として、時制、文の種類に従って、それを表す訳を付加していく方法で訳文が作成される。
- ・ 訳出のパターンは以下のようになっている。

過去「シ」

未来「デアラウ」

現在完了「タリ／タ」

過去完了「タリキ」

進行形「ツツ」

否定（現在・未来・現在進行）「ヌ」

否定（過去）「ザリ」

否定（現在完了・過去完了）「ナン」

疑問「カ」

be「アリ」

do「ナス」

命令文（命令）「動詞の命令形（＋ヨ）」

命令文（禁止）「動詞＋ナスナ」

命令文（命令、禁止）を除いては、上記のパターンを用いて、時制と文の種類に合わせて訳文が作られる。訳文が作られる際に、パターンの並ぶ順番は決定している。[命令文]と[感嘆文]は上述のパターンのみになると考えられるが、いくつかの訳のパターンを組み合わせる訳文を作成する場合には、[基本の訳] → [進行形] → [do / be の訳] → [否定] → [時制] → [疑問] の順に訳が作成される。次ページの【図 1-3-1】はパターンの並ぶ順番を図式化したものである。訳出法としては、左端の基本の訳をもとに、時制や表現に合わせて、訳出パターンを組み合わせる訳文を作成する方法になっている。例えば、動詞が一般動詞で時制と文の種類が[過去完了形／平叙文・否定]であったら、訳出パタ

ーンは, [基本の訳] → ナン → タリキ の組み合わせとなり, 訳は「動詞 ナンダ  
リキ」となる。

【図 1-3-1 『正則ニューナショナル第三読本直訳』の訳出パターンの組み合わせ順】

基本の訳 (現在形/ 平叙文・肯定)	進行形	be / do	否定	未来形 デアラウ	疑問
	ツツ	アリ (be動詞)	ヌ (現在・未来)	過去形 シ	カ
		-----	ザリ (過去)	現在完了形 タリ/タ	
		ナス (一般動詞)	ナン (完了形)	過去完了形 タリキ	

## 第4章 第1部のまとめ

### 1 訳出パターンの変化

第1部の第1章、第2章、第3章を通して、*New National Reader*の1st, 2nd, 3rdのそれぞれの訳本と対照することで、動詞に関する訳出法を調査し、訳出パターンがあることがわかった。それぞれの訳出パターンがどうであったのか、次に示して、比較してみることにする。

【表1-4-1 各章の調査で得られた訳出パターン】

	第1章	第2章	第3章
過去	シ	シ	シ
未来	デアロウ	デアロウ	デアラウ
現在完了	—	タ	タリ・タ
過去完了	—	タリキ	タリキ
進行形	ツツ	ツツ	ツツ
否定(現在・未来)	ヌ(ン)	ヌ(ン)	ヌ
否定(過去)	ザリ	ザリ	ザリ
否定(現在完了・過去完了)	—	ナヌ(ン)	ナン
否定(現在進行)	—	—	ヌ
疑問	カ	カ	カ
be	ナス	ナス	ナス
do	アリ	アリ(受動態以外)	アリ
命令文(命令)	動詞の命令形(+ヨ)	動詞の命令形(+ヨ)	動詞の命令形(+ヨ)
命令文(禁止)	動詞+ナスナ	動詞+ナスナ	動詞+ナスナ
感嘆文	動詞+ヨ	動詞+ヨ	—

【表1-4-1】はそれぞれの章の分析の結果得られた訳出パターンである。未来形のパターンや否定のパターン、完了形のパターンなどに若干の違いはあるが、ほぼ同じパターンを用いて訳文を作成していることがわかる。

第1章で調査した訳本『ニューナショナル第一リーダー独稽古』と第2章で調査した訳本『ニューナショナル第二リーダー獨學』については、どちらも三上精一訳の訳本であるので、翻訳者が一緒である。一方で、第3章使用した『正則ニューナショナル第三読本直訳』は翻訳者が島田奚疑であった。翻訳者は異なるが、調査で得られたパターンの訳語がほぼ同じであったということになる。

また、*New National Reader*は巻が進むごとに内容や文法が高度になり、文も長くなっていく傾向がある。巻が進むにつれて、使用される時制と文の種類も増えることから、用例を得ることができた分類の種類も増加していく傾向があった。次ページに第1章、第2章、第3章で、分類の種類と用例数を示した、【表1-1-3】、【表1-2-3】、【表1-3-3】を再掲した。

第1章より再掲【表1-1-3 分類の種類と用例数】

時制	文の種類		平叙文		疑問文		命令文		感嘆文					
	肯定	否定	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止						
現在形	《1》	235	《13》	29	《25》	51	《37》	10	《49》	68	《50》	10	《51》	19
過去形	《2》	119	《14》	8	《26》	23	《38》	1					《52》	3
未来形	《3》	64	《15》	5	《27》	9	《39》	1					《53》	2
現在完了形	《4》	1	《16》	0	《28》	0	《40》	0					《54》	0
過去完了形	《5》	0	《17》	0	《29》	0	《41》	0					《55》	0
未来完了形	《6》	0	《18》	0	《30》	0	《42》	0					《56》	0
現在進行形	《7》	6	《19》	0	《31》	0	《43》	0					《57》	0
過去進行形	《8》	6	《20》	0	《32》	0	《44》	0					《58》	0
未来進行形	《9》	0	《21》	0	《33》	0	《45》	0					《59》	0
現在完了進行形	《10》	0	《22》	0	《34》	0	《46》	0					《60》	0
過去完了進行形	《11》	0	《23》	0	《35》	0	《47》	0					《61》	0
未来完了進行形	《12》	0	《24》	0	《36》	0	《48》	0					《62》	0

第2章より再掲【表1-2-3 分類の種類と用例数】

時制	文の種類		平叙文		疑問文		命令文		感嘆文					
	肯定	否定	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止						
現在形	《1》	596	《13》	116	《25》	65	《37》	5	《49》	101	《50》	3	《51》	9
過去形	《2》	741	《14》	65	《26》	11	《38》	0					《52》	7
未来形	《3》	88	《15》	11	《27》	4	《39》	0					《53》	1
現在完了形	《4》	26	《16》	3	《28》	3	《40》	0					《54》	0
過去完了形	《5》	36	《17》	1	《29》	0	《41》	0					《55》	0
未来完了形	《6》	0	《18》	0	《30》	0	《42》	0					《56》	0
現在進行形	《7》	6	《19》	0	《31》	0	《43》	0					《57》	1
過去進行形	《8》	14	《20》	0	《32》	0	《44》	0					《58》	0
未来進行形	《9》	0	《21》	0	《33》	0	《45》	0					《59》	0
現在完了進行形	《10》	0	《22》	0	《34》	0	《46》	0					《60》	0
過去完了進行形	《11》	0	《23》	0	《35》	0	《47》	0					《61》	0
未来完了進行形	《12》	0	《24》	0	《36》	0	《48》	0					《62》	0

第3章より再掲【表1-3-3 分類の種類と用例数】

時制	文の種類		平叙文		疑問文		命令文		感嘆文					
	肯定	否定	肯定	否定	疑問	否定疑問	命令	禁止						
現在形	《1》	1194	《13》	106	《25》	77	《37》	8	《49》	102	《50》	10	《51》	0
過去形	《2》	1448	《14》	72	《26》	13	《38》	2					《52》	0
未来形	《3》	79	《15》	14	《27》	2	《39》	1					《53》	0
現在完了形	《4》	77	《16》	5	《28》	3	《40》	1					《54》	0
過去完了形	《5》	69	《17》	9	《29》	0	《41》	0					《55》	0
未来完了形	《6》	0	《18》	0	《30》	0	《42》	0					《56》	0
現在進行形	《7》	23	《19》	2	《31》	4	《43》	0					《57》	0
過去進行形	《8》	53	《20》	0	《32》	0	《44》	0					《58》	0
未来進行形	《9》	0	《21》	0	《33》	0	《45》	0					《59》	0
現在完了進行形	《10》	1	《22》	0	《34》	0	《46》	0					《60》	0
過去完了進行形	《11》	5	《23》	0	《35》	0	《47》	0					《61》	0
未来完了進行形	《12》	0	《24》	0	《36》	0	《48》	0					《62》	0

3つの表を比較してみると、用例数自体も大幅な増加があるが、第1章では見られなかった完了形や進行形に関する分類の用例数が、第2章、第3章と進むごとに増えていることがわかる。前に挙げた、【表1】も見られる分類の種類が増えていることから、パターンについても種類が増えている。

## 2 訳出パターンの固定

第1部の調査を通じて、固定された訳出パターンがあることがわかった。第1章から、第3章までの分析において、それらについて詳しく見た。訳出パターンが固定されているということは、この訳出パターンを用いた方法は、一語一対応の逐語的な訳出方法であったと言えるだろう。原文と訳文の強固な結びつきがあったとも言い換えることができるだろう。このパターンによる、原文と訳文の結びつきが、訳文の作成を簡便にしたと考えられる。原文から機械的に訳文が作成される方法であるため、原文の時制や文の種類を把握さえ間違わなければ、訳文は作成することができる。また、訳文にするための訳出パターンの並び方にも順番があるため、訳文作成はさらに簡便になると考えられる。

一方で、訳出パターンが固定されているために、不自然な訳文になって仕舞うという弊害もあったと考えられる。例えば、doの訳出パターンは「ナス」で固定されていたが、第1章で見た、以下の用例は特にその固定化がわかるものであろう。

#44 1 - 51

How do you do, sir?

如何に汝がなしなすか君よ

(第1章より再掲)

#45 1 - 51

How do you do, boys?

如何に汝がなしなすか男子よ

(第1章より再掲)

これらの用例は、原文は挨拶であるが、ここでは、訳文を作成する方法に注目する。この用例2つを見ると、訳文を作成する際に、訳出パターンを用いて、規則通り訳していることがわかる。「なしなすか」とdoの訳を2回繰り返すことで、訳文だけを見ても、原文にdoが2回使われていることがわかるようになっている。この訳出パターンを用いた訳出法は、訳文が不自然になってしまっても、一語も残さずに原文から訳文へと置き換えていく方法であったのだということが言えるだろう。

## 3 英文訓読の特徴

第1部で調査に使用した訳本は、すべて英文訓読の方式で訳文が作成されたものであった。訳者の違いによる影響もそれほど大きなものではなかったことから、この英文訓読の方法は、明治期の英語教育や学習においては、一般的な方法であったのだと考えられる。前項でも見たように、一語も残

さずに原文を一語一語日本語に置き換えて、並び換えて訳文を作成するという方法は、簡便に訳文を作成するための方法であったと同時に、その方法によって原文と訳文の強固な結びつきをも学んでいくことになったとも考えられる。すべての単語が一語も残らずに訳文に反映されることで、訳文のみからも原文がどのようなものであったのか、さかのぼって予測することが可能であったと考えられる。

## 第2部 翻訳文における訳出法

第2部では、翻訳文における訳出法について調査と分析を行う。

第1章では、コナン・ドイル著『シャーロック・ホームズの冒険』から「ボスコム谷の謎」の原文と翻訳2種を資料として使用する。

第2章では、Samuel Smiles. *Self-Help* とその翻訳2種を資料として使用する。

先行研究で指摘される、欧文の直訳的な表現が、英語学習・英語教育以外の翻訳文においてどのように見られるのか、また、翻訳文にどう影響しているのかについて明らかにすることが第2部の目的となる。



## 第1章 *The Boscomb Valley Mystery* の翻訳における訳出法

### 1 調査資料

第1章では、調査資料としてコナン・ドイル著『シャーロック・ホームズの冒険』から「ボスコム谷の謎」の原文と訳文を用いる。原文は、『シャーロック・ホームズの冒険』の初出である STRAND magazine のファクシミリ版, Arthur Conan, Sir Doyle. (1989). *The original illustrated 'STRAND' Sherlock Holmes : The complete facsimile edition.* 所収の, *The Boscombe Valley Mystery* を用いる。訳文は、コナン・ドイル著, 川戸道昭他編『明治期シャーロック・ホームズ翻訳集成』(2001年1月, アイアールディー企画) 所収の, 喜三訳「坊主ヶ谷の疑獄」(慶応義塾学報, 明治34年4月)(以下, 「坊」とする。), 手塚雄訳「死刑か無罪か」(東西社, 明治42年3月)(以下, 「罪」とする。)の2点を用いる。コナン・ドイル作品のシャーロック・ホームズシリーズは明治期以降, 現在に至るまで多くの翻訳が出されている作品であり, ここで調査するものはその中でも早い時期の翻訳である。

### 2 調査方法

資料を用いて, 原文と訳文を対照し, 用例を収集する。本章では, 資料を調査するにあたり, 先行研究での欧文直訳表現の具体例を参考にし, 以下のものを調査対象とした。

1. 無生物主語構文
2. 関係代名詞
3. 形容詞, 副詞に関わる表現(比較級, 最上級など)
4. 動詞の表現(時制に関わる表現など)
5. 助動詞の表現

これらの欧文直訳表現と考えられるものについて, 原文と訳文の対応が一致しているのかどうかを調査した。

### 3 調査結果

原文と訳文をそれぞれ対照して収集した用例はのべ466例であった。以下【表1】【表2】に、表現ごとの用例数を提示する。

【表2-1-1 「坊主ヶ谷の疑獄」表現ごとの用例数】

坊主ヶ谷の疑獄	一致	不一致	合計
無生物主語	0	8	8
関係代名詞	0	130	130
形容詞・副詞に関する表現	8	22	30
動詞に関する表現	0	135	135
助動詞に関する表現	6	157	163
合計	14	452	466

【表2-2-2 「死刑か無罪か」表現ごとの用例数】

死刑か無罪か	一致	不一致	合計
無生物主語	0	8	8
関係代名詞	0	130	130
形容詞・副詞に関する表現	3	27	30
動詞に関する表現	0	135	135
助動詞に関する表現	3	160	163
合計	6	460	466

#### 3.1 無生物主語

有情のものではないものが主語になり、擬人的に表現される表現を無生物主語とし、用例を収集した。用例数は全部で8例であった。その中で、訳文で無生物主語のパターンをとっている用例は見られなかった。以下にパターンに「一致」としなかった用例をあげる。

# 1 I think that the change would do you good, and you are always so interested in Mr. Sherlock Holmes' cases.

「坊」 <sup>なに</sup>何か<sup>かは</sup>変つたことでもあれば、お<sup>からだ</sup>身体<sup>よろ</sup>にお<sup>し</sup>宜しいかも知れません。貴<sup>あなた</sup>郎<sup>いつ</sup>は平<sup>ほり</sup>常<sup>べ</sup>も堀<sup>しけん</sup>部<sup>じけん</sup>様の事件だと云ふと、大<sup>い</sup>さう<sup>たい</sup>力<sup>ちから</sup>をお<sup>い</sup>入れ<sup>い</sup>なさいませぬのね。

「罪」 少しは<sup>からだ</sup>転<sup>からだ</sup>地<sup>からだ</sup>も御<sup>からだ</sup>身体<sup>からだ</sup>のために、それに本田<sup>からだ</sup>さんの事件には何時も御<sup>からだ</sup>熱<sup>からだ</sup>心<sup>からだ</sup>ぢや御<sup>からだ</sup>座<sup>からだ</sup>いませんか

# 1 については、「坊」において、動詞 do が訳されていない。また、「罪」でも原文通りの訳になってはいない。どちらの訳文においても、無生物主語の構文としては訳出されていない。

### 3. 2 関係代名詞

関係代名詞が「トコロノ」という、直訳的なパターンに一致しているかという点で用例を分析した。しかし、用例中で「トコロノ」というパターンを訳として用いているものは見られなかった。以下、「一致」しなかった用例をあげる。

# 2 One of the farms which he held, that of Hatherley, was let to Mr. Charles McCarthy, who was also an ex-Australian.

「坊」 <sup>そのしよいう</sup>其<sup>かしち</sup>所有<sup>うち</sup>の貸<sup>ひざるむら</sup>地の内<sup>い</sup>で、日<sup>これ</sup>猿<sup>もと</sup>村<sup>ごうしうじん</sup>と云<sup>まか</sup>ふ<sup>ぜ</sup>の<sup>たら</sup>が、之<sup>い</sup>も固<sup>か</sup>は濠<sup>か</sup>州<sup>か</sup>人<sup>か</sup>で、真<sup>か</sup>風<sup>か</sup>太<sup>か</sup>郎<sup>か</sup>助<sup>か</sup>と云<sup>か</sup>ふ<sup>か</sup>の<sup>か</sup>に貸<sup>か</sup>してある。

「罪」 平<sup>ひとつ</sup>澤<sup>ひとつ</sup>に所有<sup>ひとつ</sup>の畠<sup>ひとつ</sup>一<sup>ひとつ</sup>を卷<sup>ひとつ</sup>山<sup>ひとつ</sup>金<sup>ひとつ</sup>八<sup>ひとつ</sup>といふ同<sup>やはり</sup>様<sup>やはり</sup>濠<sup>やはり</sup>州<sup>やはり</sup>歸<sup>やはり</sup>りの一<sup>やはり</sup>に小<sup>やはり</sup>作<sup>やはり</sup>させて置<sup>やはり</sup>いたのさ

# 2 を見ると、どちらの訳文においても、関係代名詞の訳出パターン「トコロノ」を用いない訳出法になっている。他の用例においても同様のものが多かった。

### 3. 3 比較級、最上級

比較級、最上級などの程度の表現に関わるものを収集した。「より～」「最も」などが表現に表れているか、また、それに関わる慣用的な、the more ... , the more ... といった表現や、as+形容詞 / 副詞+as といった同格の表現も収集した。

#### 3. 3. 1 one of the most...

one of the most...には、「最も～のひとつ」といったパターンが予想される。以下、それに相当する

と考えられる表現の用例である。

# 3 He had hardly spoken before there rushed into the room one of the most lovely young women that I have ever seen in my life.

「坊」 尖戸が呼吸を継がない中に、此室内へ入つて来たのは、僕が是迄見た中で、最も愛らしいと思つた妙齡の一婦人であつた。

「罪」 と云ふを合圖にどつと室内に驅込んだのが素敵の別嬪、恁麼別嬪臍の緒切つてから始めて見た

「罪」では、不一致だが、「坊」では一致している。少し意識しているようだが、パターン通りの訳となつてることがわかる。

### 3. 3. 2 the more... , the more...

これも、「～程、～」というパターンが予想される。

# 4 The more featureless and commonplace a crime is, the more difficult is it to bring it home.

「坊」 見榮の無い、平凡なといふ程、探偵るのに骨が折れる。

「罪」 だから簡單ほど面倒といふのだ

この用例では両訳文とも、「ほど」を使用した訳になっていた。

### 3. 3. 3 as+形容詞 / 副詞+as

これは、「～丈其丈（だけそれだけ）～」といったパターンが予想される。

# 5 That is as much as I have been able to gather about the families.

「坊」 マア此が家族に就て取り調べ得た所なんだ

「罪」 兩人の家族に關して僕の知つている事は先づ是丈

「罪」においては「丈」が見られる。意識しているようにも感じられるが、一致の例としている。

### 3. 4 動詞の表現

動詞の表現の中では、時制の表現で、進行形を「ツツ」と訳すパターンや、完了形について、過去を表わす助動詞を重ねる「タリキ」といったパターンが予想されたが、用例としてパターンを用いたものは見られなかった。

# 6 He came back alone, for Lestrade was staying in lodgings in the town.

「坊」 <sup>かれ</sup> <sup>ひと</sup> 彼は <sup>もど</sup> 一人で <sup>き</sup> 戻つて <sup>ししど</sup> 来た、<sup>まち</sup> 尖戸は <sup>はたご</sup> 町の <sup>と</sup> 宿舎に <sup>い</sup> 止まつて <sup>い</sup> 居るとのこと。

「罪」 虎澤は町の下宿に居るので今度は本田獨りで歸つたのだ

進行形の用例となるが、「ツツ」などのパターンは用いられていなかった。

### 3. 5 助動詞の表現

助動詞の表現については、例えば、will (would) を「デアロウ」と訳すなどのパターンが考えられる。must は「ネバナラナイ」といったパターンが予想されるが、訳が一致していた用例は以下の通りである。

# 7 I must go home now, for dad is very ill, and he misses me so if I leave him.

「坊」 <sup>わたし</sup> 妾、<sup>いとま</sup> もうお暇 <sup>とうさま</sup> いたしませう、<sup>たい</sup> お父様は <sup>わる</sup> 大さうお病いし、<sup>わたし</sup> 妾が <sup>い</sup> 居ないと <sup>またさび</sup> 又淋しが <sup>よし</sup> がるで <sup>よし</sup> せよから。

「罪」 妾は <sup>すぐ</sup> 直歸 <sup>すく</sup> らな <sup>あんな</sup> けり <sup>あぶない</sup> あ <sup>あぶない</sup> なり <sup>あぶない</sup> ませ <sup>あぶない</sup> せん、<sup>あんな</sup> 父が <sup>あぶない</sup> 斯様に <sup>あぶない</sup> 危篤 <sup>あぶない</sup> ですから <sup>あぶない</sup> それに <sup>あぶない</sup> 妾が <sup>あぶない</sup> 居り <sup>あぶない</sup> ませ <sup>あぶない</sup> ぬと <sup>あぶない</sup> 淋し <sup>あぶない</sup> が <sup>あぶない</sup> つて <sup>あぶない</sup> 居 <sup>あぶない</sup> り <sup>あぶない</sup> ます <sup>あぶない</sup> から

「罪」においては、「ナケレバナラナイ」というパターンほぼそつた訳になっている。「坊」については、一致していなかった。

## 4 分析

この章では、翻訳文学作品の資料として、「ボスコム谷の謎」を用いたが、訳文の中での欧文直訳表現が非常に少ないということがわかった。コナン・ドイル作品で、広く一般に読まれる作品であることから、欧文直訳表現を多用すると、難解になるだけでなく、文学作品としての自然さがなくなってしまうことがあるので、自然な訳を用いたのだと考えられる。パターンを用いない意識を行う事で、誰にでも読みやすい訳文になる事を目指していたと考えられる。つまり、欧文直訳表現が見られなかったということは、資料の性質によるところが大きいと考えられる。本稿の調査は一つの作品についてだが、資料の性格が同じであることを考えると、大衆的な翻訳文学作品からは、欧文直訳表現の現れやすいものは見ることが難しいかもしれない。

しかし、少ないながらも、一致となった用例を見ると、欧文直訳表現をほぼ変化させずに使用していることがわかる。前述のように、本章の資料は大衆的なものであるため、欧文直訳の訳出パターンを用いると外国語の学習経験や知識がない場合には難解になってしまうなどの、デメリットがある。しかし、パターンを用いることで、翻訳文であることを強調し、もともと外国の文章であったことを残すことで、文章自体から外国の雰囲気を出すことも可能かもしれない。欧文直訳表現はそれ自体だけでなく、文章全体を欧文風にすることができる可能性があることも考えられる。

## 5 まとめ

前述のように、第1章で用いた資料においては、用例として収集できたものがあまり多くなかった。調査資料を、大衆文学以外のものにすることで、結果の様相が変わる可能性がある。翻訳文については、資料の性格も考慮に入れて、調査する必要があることがわかる。

## 第2章 *Self-Help* の明治期翻訳における訳出法

### 1 調査資料

調査資料として、Samuel Smiles. *Self-Help* と、その翻訳である、中村正直訳『西国立志編』（以下、『西』とする）と畔上賢造訳『自助論』（以下、『自』とする）を使用する。

原文の *Self-Help* については、立教大学図書館蔵の1881年<sup>i</sup>にシカゴで刊行されたものを用いる。『西』は明治大学教授小野正弘氏所蔵の初版本、明治4年（1871）刊行のものを用いる<sup>ii</sup>。『自』については明治39年（1906）刊行のもので、国立国会図書館の近代デジタルライブラリー<sup>iii</sup>からPDFファイルをダウンロードして用例の調査を行う<sup>iv</sup>。

*Self-Help* は Chapter1 から Chapter13 までの全13部で構成されている。その中から、冒頭の Chapter1、中程の Chapter6、Chapter7、末尾の Chapter13 を調査範囲としてそれぞれの資料について用例収集を行う。

---

<sup>i</sup> 『西国立志編』の刊行よりも後に刊行されたものしか手に入らなかったため、本稿の調査ではこれを用いることにした。

<sup>ii</sup> 閲覧した小野氏所蔵の資料にページが抜けている部分があったため、国立国会図書館の近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1080981>, <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1080990>, <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1080998>）で確認した。出版元が異なっているが、ページの抜けがある部分の前後を比較すると、版面が同じであることがわかった。そのため、ページの抜けがある部分については、近代デジタルライブラリーでダウンロードしたPDFファイルを補足として用いた。

<sup>iii</sup> <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/755634>,  
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/755635>

<sup>iv</sup> 資料として用いたPDFファイルに欠落している部分があったため、東洋大学図書館蔵の畔上賢造訳(1915)『自助論』（三陽堂書店）を補足として用いた。出版元や刊行年が異なるが、欠落部の前後を比較すると、版面が同じであった。

## 2 調査方法

調査方法としては、原文と訳文を対照し、そこから関係代名詞節の用例を収集した<sup>v</sup>。

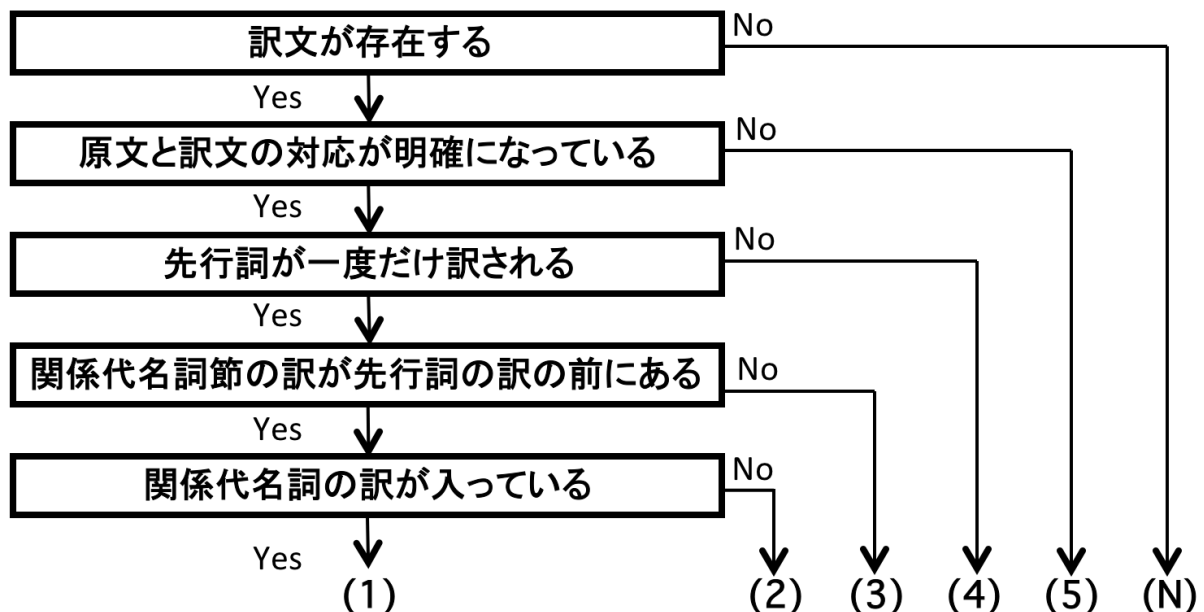
関係代名詞については、**that, which, who, whom, whose** を使用しているものを用例として収集した<sup>vi</sup>。

それぞれの用例について、訳文が存在するか、原文と訳文の対応が明確になっているか、先行詞が繰り返し訳されているのか、関係代名詞節の訳が先行詞の訳の前にあるのか、関係代名詞そのものの訳が訳文に入っているかどうかについて判定し、分類を行った。その結果、以下の6種の訳出パターンでの分類になった。

- (1) 関係代名詞節の訳＋関係代名詞の訳＋先行詞の訳
- (2) 関係代名詞節の訳＋先行詞の訳
- (3) 先行詞の訳...関係代名詞節の訳
- (4) 先行詞の訳...関係代名詞節の訳（先行詞の訳（繰り返し）を含む）
- (5) 原文と訳文との対応が明確でないもの
- (N) 訳文のないもの

以下、【図2-2-1】はこの分類方法を図式化したものである。

【図2-2-1 用例分類の方法】



<sup>v</sup> 関係代名詞については、序章で確認したように、先行研究でほとんどのものが、欧文直訳表現に相当するものとして指摘していた。また、森岡(1999)では、特に森岡(1999)では、関係代名詞の「欧文脈」である「トコロノ」という表現について「あたかも欧文直訳の代表であるかのような印象を与えた」としている。

<sup>vi</sup> **what, whatever** を関係代名詞として使用している用例もあったが、これらは先行詞を含んだ用法となるため、今回は分析の対象とはしない。



それぞれのパターンについて、以下に例を挙げる。なお、先行詞は太実線（先行詞），関係代名詞は囲み線（関係代名詞），関係代名詞節は細実線（関係代名詞節）を施し表示する。また、用例は最初に原文，その後に訳文という順番で表示する。原文については、末尾でChapter，ページ数，行数を括弧内に表示する。訳文については『西』，『自』の区別を訳文の前に表示してどちらの翻訳資料であるか示し，末尾で丁数・ページ数，行数を括弧内に表示する<sup>vii</sup>。

### （１） 関係代名詞節の訳＋関係代名詞の訳＋先行詞の訳

（１）のパターンは，関係代名詞節が先に訳され，そのあとに関係代名詞の訳の定番である「ところの」を介して，先行詞を修飾するものである。

# 1 ... and he re-entered in triumph the village which he had left so many years before, so poor and so obscure. (Ch. 1, p. 34, l. 25)

『西』 … 栄名を荷ひ。昔貧賤なりし時。離しところの故郷に帰りしとぞ。

(18才, l. 3)

ここで示した# 1では，the village which he had left が「離しところの故郷に」と，関係代名詞節→関係代名詞→先行詞の順番で訳されている。

### （２） 関係代名詞節の訳＋先行詞の訳

（２）のパターンは関係代名詞節が先に訳され，その後に先行詞が訳されるものである。関係代名詞は訳されない。以下の# 2は，（２）のパターンの用例である。この用例では，2つの関係代名詞が用いられているが，それぞれが，関係代名詞節を先に訳出し，その後で先行詞が訳されている<sup>viii</sup>。

# 2 The Government that is ahead of the people will inevitably be dragged down to their level, as the Government that is behind them will in the long run be dragged up. (Ch. 1, p. 22, l. 20)

『自』 其人民よりも進歩せる 政府は、其人民と同列に引き上げらるゝことを免れず。而して其人民よりも後にある 政府は、遂には人民と同列に引きあげらるべし。 (p. 3, l. 8)

<sup>vii</sup> 『西』の用例に関しては、見やすさなどを考え、漢字とカタカナの表記から、漢字とひらがなの表記に改めている。また漢字は新字に改めたところがある。

<sup>viii</sup> ここでは、2つの関係代名詞が使用されている例を挙げたが、後述する用例数については、それぞれの関係代名詞で1つずつのカウントをしているため、# 2では2回のカウントになる。

# 2 では、The Government that is ahead of the people は「其人民よりも進歩せる□政府」に、the Government that is behind them は「其人民よりも後にある□政府」と訳されている。訳文では関係代名詞節→先行詞の順番になっている。

### (3) 先行詞の訳...関係代名詞節の訳

(3) のパターンは先行詞が先に訳され、そのあとに関係代名詞節が訳されるものである。関係代名詞は訳されない。以下の # 3 は先に先行詞が訳され、その後に関係代名詞節が訳されている。

# 3 A country apothecary who visited the school, admired the robust boy's arms, ... (Ch. 1, p. 34, l. 2)

『西』 一の薬舗主人、この学院に至り□、この童子の身体壮強なるを嘆美し... (17ウ, l. 4)

『自』 偶々地方の一製薬家、此学校を訪づれしが□、童児なるヴァウケエリンの強壯なる腕を賞め、... (p. 21, l. 9)

上記の # 3 では、A country apothecary who visited the school が『西』では「一の薬舗主人、この学院に至り□」に、『自』では「偶々地方の一製薬家、此学校を訪づれしが□」と訳されている。どちらも、訳が先行詞→関係代名詞節の順番になっている。

### (4) 先行詞の訳...関係代名詞節の訳...先行詞の訳 (繰り返し)

(4) のパターンは、先行詞が先に訳され、そのあとに関係代名詞節が訳されるものであるが、繰り返して先行詞がもう一度訳されるものである。ここで挙げる # 4 では、先行詞の a new species は「一の新種」と訳され、さらに再び、「此新種」と訳されている。関係代名詞は訳されない。

# 4 ... his researches in connexion with the smaller crustaceae having been rewarded by the discovery of a new species, to which the name of "Praniza Edwardsii" has been given by naturalists. (Ch. 1, p. 29, l. 13)

『自』 ...彼は小なる甲殻類に就いて研究する所ありしが、遂に一の新種を発見したりき。此新種を自然科事者はプラニザ、エドワージイと名けて□彼の名を記念せり。 (p. 13, l. 13)

(5) 原文と訳文の対応が明確でないもの

原文と訳文の対応が明確でないため、訳文において先行詞、関係代名詞、関係代名詞節がどれにあたるかということを決めることができない用例があった。このようなものを(5)のパターンとした。

# 5 The Government **that** is ahead of the people will inevitably be dragged down to their level, as the Government **that** is behind them will in the long run be dragged up. (Ch. 1, p. 22, l. 20)

『西』 蓋し人民は政事の実体にして。政事は人民の虚影なり。 (3才, l. 4)

上記の# 5では先行詞、関係代名詞、関係代名詞節の原文と訳文の対応が明確ではなく、どの原文の部分がどの訳文の部分に相当するのかということを示すことができない。

(N) 訳文のないもの

原文に対応する訳文が全くないものが見られた。# 6では、訳文がないため、原文と訳文の対照ができない。用例としては数えるが、分類は(N)とした。

# 6 The singular excellence **which** he reached in this art, was mainly the result of careful observation and study. (Ch. 6, p. 187, l. 11)

『西』(訳文なし)

すべての用例について上記の6つのパターンで分類を行った。それらの分類から各資料の訳出パターンとその相互関係について分析し、考察を加える。

### 3 各資料の訳出パターン

#### 3.1 各資料の訳出パターン

収集した用例は、それぞれ、Chapter1が66例、Chapter6が164例、Chapter7が38例、Chapter13が118例、全体で386例であった。それぞれの資料ごとに[2 調査方法]で示した6つのパターンで分類した。その結果、『西』では以下の【表2-2-1】、『自』では以下の【表2-2-2】のような結果になった。

【表2-2-1 『西国立志編』の訳出パターンごとの用例数】

	Ch.1	Ch.6	Ch.7	Ch.13	計
(1)	1	0	0	0	1
(2)	34	49	7	63	153
(3)	22	104	19	43	188
(4)	4	6	4	0	14
(5)	1	5	8	12	26
(N)	4	0	0	0	4
計	66	164	38	118	386

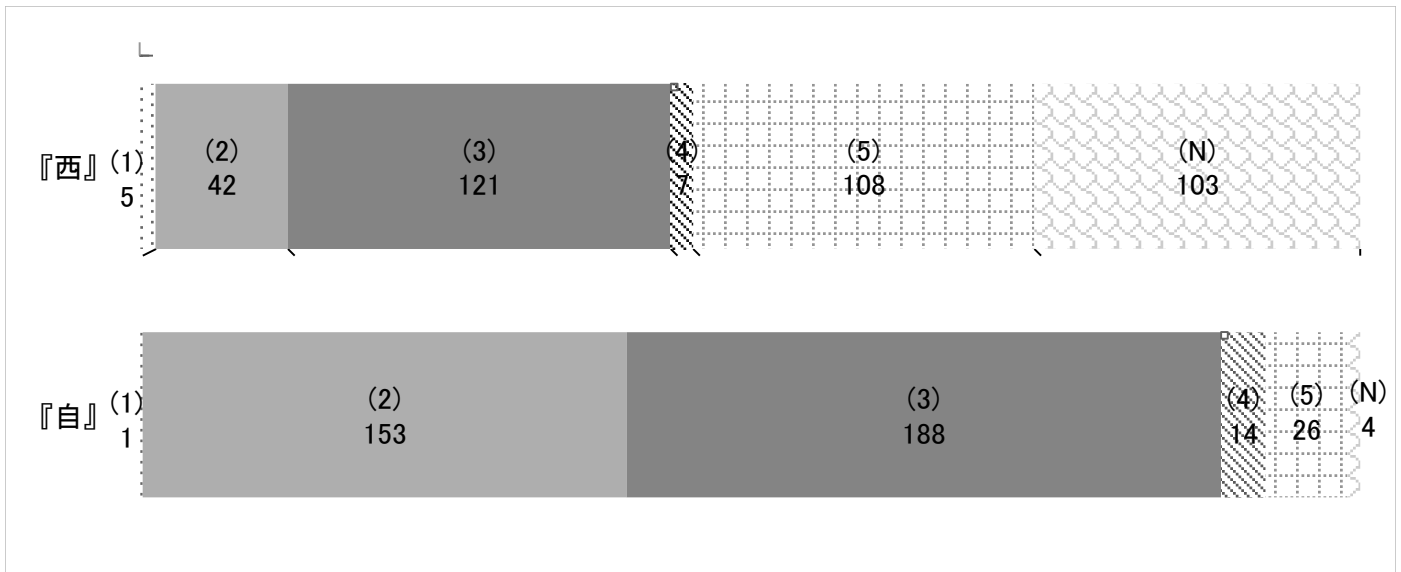
【表2-2-2 『自助論』の訳出パターンごとの用例数】

	Ch.1	Ch.6	Ch.7	Ch.13	計
(1)	2	1	0	2	5
(2)	16	7	5	14	42
(3)	26	28	8	59	121
(4)	4	0	3	0	7
(5)	18	33	14	43	108
(N)	0	95	8	0	103
計	66	164	38	118	386

それぞれの資料において、分類の合計数でグラフにしたものが次ページの【図2-2-2】である。

【表2-2-1】と【図2-2-2】を見ると、『西』では、(3)のパターンがもっとも多く、(5)、(N)、(2)、(4)、(1)と続く。訳文の存在しない(N)と原文と訳文の対応が明確ではない(5)を除くと175例となるが、(3)が用例数のほとんどを占めていることがわかる。

【図 2-2-2 資料ごとの分類別用例数】



【表 2-2-2】と【図 2-2-2】を見ると、『自』も（3）がもっとも多く、（2）がそれに次いで大きな勢力を持っている。その他のパターンは少数に留まっている。訳文の存在しない（N）と、原文と訳文の対応が明確ではない（5）を除いた 356 例のうち、その半数強を（3）が、そして、半数弱を（2）が占めていることがわかる。

以上のことから、『西』、『自』ともに、（3）がもっとも多く、関係代名詞節の訳出法としては主流であると考えられる。（3）のパターンは先行詞の訳の後に関係代名詞節の訳がなされる訳出法であるので、先行詞を基準とすると、関係代名詞節が後置されるものである。『自』ではそれに次いで（2）のパターンが大きな勢力を持っている。（2）は関係代名詞節の訳の後に先行詞の訳がなされる訳出法で、先行詞を基準とすると、関係代名詞節が前置されるものである。（5）と（N）を除いて考えると、『西』では、（3）の先行詞を基準とした関係代名詞節後置型の訳出法がほとんどであるのに対し、『自』では（3）の関係代名詞節後置型の訳出法が主流であるが、（2）の関係代名詞節前置型の訳出法がそれに次ぐ勢力を持っている。

### 3. 2 各資料の訳出パターンの相互関係

次に、各資料における用例の訳出パターンの相互関係について見ていく。

1つの原文に対して『西』の訳文と、『自』の訳文の2つの訳文があるが、それぞれがどの訳出パターンで訳されているのか、次ページの【表 2-2-3】で訳出パターンの組み合わせ<sup>ix</sup>をまとめた。『西』、『自』両資料とも、訳文が存在しない（N）の用例がある。それ

<sup>ix</sup> 以下、訳出パターンの組み合わせについては、ハイフンの左に『西』の訳出パターン、右に『自』の訳出パターンを表示する。

については訳出パターンについて対比することができないため、ここでは特に取り扱わないことにする。また、(5)の訳出パターンは原文と訳文の対応が明確ではなく、訳出パターンを対比して考えることが難しいため、(N)と同じくここでは取り扱わないことにする。全386例から、(N)を含む組み合わせの107例と、(5)を含む組み合わせの111例を除いた、168例について見ていくことにする。【表3】から(N)を含む組み合わせと(5)を含む組み合わせを除外し、用例数の多いものから順に並べたものが、次ページの【表4】である。

【表2-2-3 資料全体の訳出パターン組み合わせごとの用例数】

組み合わせ	
(1)-(2)	3
(1)-(3)	1
(1)-(5)	1
(2)-(2)	34
(2)-(3)	6
(2)-(5)	1
(2)-(N)	1
(3)-(1)	1
(3)-(2)	47
(3)-(3)	68
(3)-(4)	2
(3)-(5)	3
(4)-(2)	2
(4)-(3)	1
(4)-(4)	3
(4)-(N)	1
(5)-(2)	41
(5)-(3)	44
(5)-(4)	4
(5)-(5)	17
(5)-(N)	2
(N)-(2)	26
(N)-(3)	68
(N)-(4)	5
(N)-(5)	4
計	386

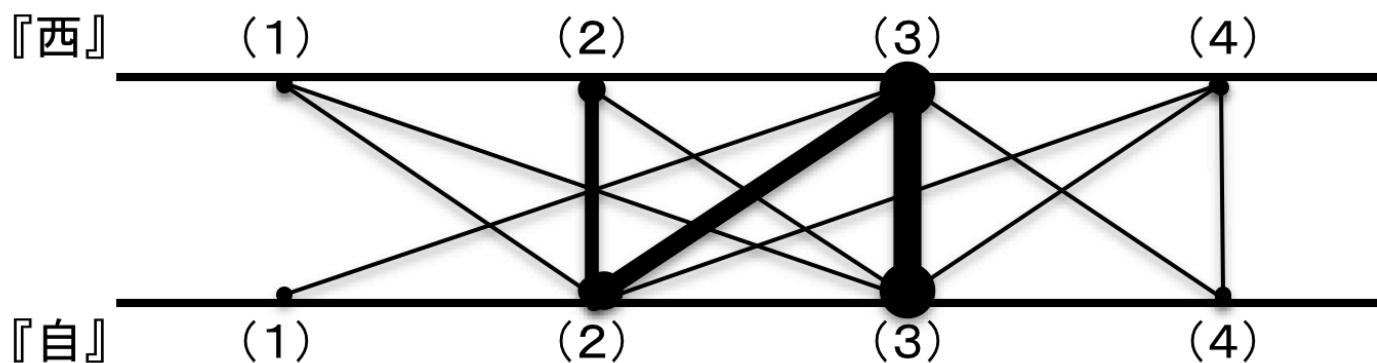
【表 2-2-4

資料全体の訳出パターン組み合わせごとの用例数 ((5), (N) 除外, 用例数順)】

組み合わせ	
(3)-(3)	68
(3)-(2)	47
(2)-(2)	34
(2)-(3)	6
(1)-(2)	3
(4)-(4)	3
(3)-(4)	2
(4)-(2)	2
(1)-(3)	1
(3)-(1)	1
(4)-(3)	1
計	168

さらに, 【表 2-2-4】 を模式図にしたものが以下の【図 2-2-3】である。【図 2-2-3】では, 上部に『西』の訳出パターンを, 下部に『自』の訳出パターンをそれぞれ配置し, 組み合わせを線で結んで表現した。それぞれの組み合わせの数量と, 線の太さは比例している。線が太いものほど組み合わせの数量が多く, 線が細いものほど組み合わせの数量は少ないということになる。

【図 2-2-3 訳出パターン組み合わせ】



【表 2-2-4】を見ると、(3)-(3)の組み合わせがもっとも多く、そのあとに(3)-(2)、(2)-(2)と続き、その他の組み合わせは少数にとどまっていることがわかる。また、【図 2-2-3】でも、(3)-(3)が最も太い線であり、(3)-(2)、(2)-(2)へと続いている。その他の組み合わせについては、細線であることがわかる。つまり、(3)-(3)が一番多いということは、主流の訳出パターンは変化しなかったということになる。しかし、その次に多いのが(3)-(2)であり、訳出パターン(3)から(2)へと変化しているものが大きな勢力を持っていることがわかる。

以下、訳出パターンの組み合わせにおいて、まとまった数量がみられた、(3)-(3)、(3)-(2)、(2)-(2)の3つの組み合わせについて、用例を挙げながら見ていく。

まず、もっとも多かった(3)-(3)の組み合わせの用例である。

# 7 His brother, who was a wood-carver, afterwards took him into his shop to learn that trade. (Ch. 6, p. 189, l. 8)

『西』 後その兄雕木工なる□が故に。その業を學びけり。 (5才, l. 6)

『自』 其兄雕木師なりし□が、後彼を其店に置いて此業を學ばしむ。

(p. 256, l. 8)

前述の「2 調査方法」で(3)の訳出パターンの例として挙げた、# 3も(3)-(3)の用例である。以下に、再度提示する。

# 3 A country apothecary who visited the school, admired the robust boy's arms, ... (Ch. 1, p. 34, l. 2)

『西』 一の薬舗主人。この学院に至り□。この童子の身体壮強なるを嘆美し。...

(17ウ, l. 4)

『自』 偶々地方の一製薬家、此学校を訪づれしが□、童児なるヴァウケェリンの強壮なる腕を賞め、...

(p. 21, l. 9)

(再掲)

# 3では、A country apothecary who visited the schoolが『西』では「一の薬舗主人。この学院に至り□」と訳されている。また、『自』では、「偶々地方の一製薬家、此学校を訪づれしが□」と訳されている。# 7では、His brother, who was a wood-carverが『西』では「その兄雕木工なる□」と、『自』では「其兄雕木師なりし□」と訳されている。

# 3と# 7をみると、訳文では関係代名詞節の訳が先行詞の訳の後に置かれ、先行詞を



説明している。(3)のパターンは、関係代名詞節が後置されるが、先行詞の訳に後から情報を付け加える形になっているといえる。

次に大きな勢力なのが、(3) - (2)の組み合わせである。以下に、(3) - (2)の組み合わせの用例を挙げる。以下の#8, #9, #10のどれも、『西』が、関係代名詞節の訳が先行詞の訳の後に置かれ、先行詞の訳に情報を付け加える形の(3)の訳出パターンになっているのに対し、『自』では、関係代名詞節の訳が先行詞の訳の前に置かれ、先行詞を連体修飾節で説明する形の(2)の訳出パターンになっている。

# 8 Admiral Hobson, who broke the boom at Vigo in 1702, belonged to the same calling.

(Ch. 1, p. 29, l. 23)

『西』水師提督河伯孫は一七〇二年、士班牙、未額港の戦いに、水閘を破りし勇将なりしが、またこの業をなししなり。

(12ウ, l. 5)

『自』一千七百〇二年ヴィゴに於て防材を破壊せし水師提督ホブソンも亦同じく織工なりき。

(p. 14, l. 6)

# 9 ... the deceased was a poor person who had died of cholera, ...

(Ch. 13, p. 436, l. 14)

『西』…この屍は、貧しき人にてコレラにて死せり。… (27ウ, l. 11)

『自』…死人は虎烈刺にて死せし貧人にして、… (p. 648, l. 5)

# 10 During the forty years that he held a seat in Parliament, his labours were prodigious.<sup>x</sup>

(Ch. 1, p. 42, l. 1)

『西』比耳、四十年の間、巴力門の議士に列し、その功労はなほだ大なり。

(26オ, l. 6)

『自』彼議院に席を有すること四十年、其間勤勞甚だ力めたり。

(p. 33, l. 4)

<sup>x</sup> 関係副詞的な用法であるが、用例として収集した。

次に、(2) - (2) の組み合わせについて用例を挙げる。

# 11 Our dear father's sword which I wore in both battles (Meanee and Hyderabad) is unstained.

(Ch. 13, p. 434, l. 6)

『西』 予れ二所の大戦に佩ひし慈父の劔。今なほ汚れざれば。

(25 才, l. 5)

『自』 余がミーニイ及びハイデラバッドの役に佩びたる懐かしき亡父の劔は、未だ汚れざるなり

(p. 644, l. 12)

# 10 では、『西』、『自』どちらも、関係代名詞節の訳が先行詞の訳の前に置かれ、先行詞を連体修飾節で説明する形である(2)の訳出パターンになっている。

### 3. 3 関係代名詞の用法による訳出パターンの違い

関係代名詞は用法として、限定用法と継続用法がある。用法の違いが訳出パターンにどのように影響しているのか見ていく。限定用法は、先行詞を関係代名詞節の内容で限定するものである。継続用法は、関係代名詞の前にコンマ(,)があるもので、関係代名詞節は先行詞の補足説明となるものである。前述の「2 調査方法」で(4)の訳出パターンの例として挙げた、# 4が継続用法の用例である。以下に、再度提示する。

# 4 ... his researches in connexion with the smaller crustaceae having been rewarded by the discovery of a new species, to which the name of "Praniza Edwardsii" has been given by naturalists. (Ch. 1, p. 29, l. 13)

『自』 ...彼は小なる甲殻類に就いて研究する所ありしが、遂に一の新種を発見したりき。此新種を自然科学者はプラニザ、エドワージイと名けて彼の名を記念せり。

(p. 13, l. 13)

(再掲)

用例を関係代名詞の用法で分けると、限定用法が231例、継続用法は155例であった。それぞれの用法が資料ごとにどの訳出パターンで訳されているのかまとめたものが、次ページの【表2-2-5】である。

【表2-2-5】を見ると、限定用法においては、(2)が『西』で36例(15.6%)であるのに対し、『自』では125例(54.1%)と大幅に増えている。(3)でも、『西』の65例(28.1%)から『自』の80例(34.6%)と増えていることがわかる。一方で、継続用法

【表 2-2-5 訳出パターンごとの関係代名詞の用法の用例数】

	限定		継続	
	『西』	『自』	『西』	『自』
(1)	4 ( 1.7% )	0 ( 0.0% )	1 ( 0.6% )	1 ( 0.6% )
(2)	36 ( 15.6% )	125 ( 54.1% )	6 ( 3.9% )	28 ( 18.1% )
(3)	65 ( 28.1% )	80 ( 34.6% )	56 ( 36.1% )	108 ( 69.7% )
(4)	2 ( 0.9% )	6 ( 2.6% )	5 ( 3.2% )	8 ( 5.2% )
(5)	74 ( 32.0% )	18 ( 7.8% )	34 ( 21.9% )	8 ( 5.2% )
(N)	50 ( 21.6% )	2 ( 0.9% )	53 ( 34.2% )	2 ( 1.3% )
計	231 ( 100.0% )	231 ( 100.0% )	155 ( 100.0% )	155 ( 100.0% )

では、(2)で『西』の6例(3.9%)から『自』の28例(18.1%)へと増えており、(3)で『西』の56例(36.1%)『自』の108例(69.7%)へと大幅に増加していることがわかる。つまり、『西』から『自』への用例数の変化を見ると、限定用法については(3)が、継続用法については(2)が大幅に増加していることがわかる。

また、【表 2-2-4】をさらに、関係代名詞の用法別に分けたものが以下の【表 2-2-6】である。

【表 2-2-6 組み合わせごとの関係代名詞の用法の用例数】

組み合わせ	限定	継続	計
(3)-(3)	29	39	68
(3)-(2)	33	14	47
(2)-(2)	31	3	34
(2)-(3)	4	2	6
(1)-(2)	2	1	3
(4)-(4)	1	2	3
(3)-(4)	2	0	2
(4)-(2)	1	1	2
(1)-(3)	1	0	1
(3)-(1)	0	1	1
(4)-(3)	0	1	1
総計	104	64	168

【表 2-2-6】を見ると、限定用法では、(3) - (2) がもっとも多く、次いで (2) - (2) が多くなっているのに対して、継続用法では、(3) - (3) が最も多い。つまり、限定用法では、(3) から (2) へと訳出パターンが変化しているものが多い一方で、継続用法では、(3) の訳出パターンを使い続けていることがわかる。

以上のことから、限定用法では関係代名詞節を前に置いて連体修飾をする形で、先行詞を説明する (2) の訳出パターンをとることが多く、継続用法では関係代名詞節を後ろに置いて、補足説明を付け加える (3) の訳出パターンが多くなっていることがわかる。

## 4 まとめ

以上、それぞれの資料の訳出パターンの関係を見ると、大きな流れとして、先行詞を基準として、関係代名詞節の訳が後置されるものから、前置されるものへと推移していることがわかった。このことは、訳文としてではあるが、日本語のなかに、論理的で長大な連体修飾構造がもたらされ、許されたということの意味する。関係代名詞節の翻訳処理は、日本語の文構造と文体に新たな姿を構築したのである。

欧文の直訳的な表現の起源であると考えられる、英語の欧文訓読的な訳出法は、明治 20 年以降に英語教育や英語学習の中で確立したとされる<sup>xi</sup>。『西』は明治 4 年(1871)刊、『自』は明治 39 年(1906)刊である。以上のことから、『西』は欧文訓読的な訳出法確立前、『自』は欧文訓読的な訳出法確立後のものであると考えられる。すなわち、『西』と『自』の訳出パターンの違いは、英語の欧文訓読的な訳出法の確立以前か以後かという違いによるもので、『自』には欧文の直訳的な表現、つまり、英語の欧文訓読的な訳出法を用いた表現が多く見られると推定される。しかし、実際に分析した結果、『西』にも『自』にも、関係代名詞の直訳的な表現の定番と考えられる「トコロノ」を関係代名詞の訳として介する訳出法をとったものはあまり見ることができなかつた。その理由はさまざまに考えられるが、その一つとして、英語学習の場と生きた訳文の違いを挙げることは可能であろう。英語学習の場では、「トコロノ」を用いた関係代名詞節の訳をして、原文との対照を確認することは重要なものであるが、それを生きた訳文にもいちいち用いるのは、文体の高さを損なうからである<sup>xii</sup>。

欧文訓読的な訳出法で定番訳とされる、「トコロノ」を介した訳出法は、英文では先行詞の後に置かれる関係代名詞節を、日本語文で前置の連体修飾構造として論理的に明確化するためのものだったと考えられる。『西』では、関係代名詞の用法にかかわらず、関係代名詞節を後置する訳出法が主流であったが、『自』では、特に限定用法の関係代名詞節について、関係代名詞節を前置する訳出法をとることが多いということからもそのことが考えられる。しばしば長大な連体修飾構造を論理的に支えた定番訳「ところの」は、構造さえ見えてとれるものであれば、実際にいちいち訳す必要はない。それは、英文で表現されていることを、一語も残さず全て訳すという、英語学習的な欧文訓読の直訳で、関係代名詞を確認して訳すために必要であったのだと考えられる。つまり、『自』で関係代名詞節を前置す

<sup>xi</sup> 森岡(1999)による。英語に訓と返り点を施した訓点本である「独案内」やその書き下した「直訳」などの、英語教科書の手引き本が明治期に出版されている。特に、明治 20 年(1887)以降にリーダーの教科書の「独案内」や「直訳」が非常に多い。

<sup>xii</sup> 第 1 部で見たように、英語学習においては、英語の一語ずつをすべて日本語に逐語的に置き換えて、さらにそれを日本語の語順に並び替え、訳文にするという訓読のような訳出法を行っていた。そのために、自然な日本語の訳文にはなりにくかつた。つまり、ここでの調査資料のような、読み手を意識した訳文とは文体が異なる。欧文訓読的な訳出法の成立が明治 20 年ごろと考えると、『西』はそれ以前の刊行のため、欧文訓読的な訳出法に則ったものはあまり見られなく、『自』はそれ以降の刊行であるので、欧文訓読的な訳出法が多く見られると推定することができる。

る訳出法は、関係代名詞節の訳を前置し、「ところの」を介して先行詞の訳につなげるという欧文直訳的な訳出法から、「ところの」を省いたものと位置づけることができる。

## 第3章 第2部のまとめ

### 1 翻訳文における欧文直訳表現

第2部の調査を通して、先行研究であげられていたような欧文直訳表現については、翻訳文においてほとんど見られないということがわかった。これは、第2章においても触れたが、訳文の高さを保つ上では、必要なことだったと考えられる。英語教育や英語学習であれば、原文を一つも残さずに訳すということは、原文の理解にもつながるために、英文訓読の方法は必要であったのだと思われる。一方で、翻訳文においては、原則として、原文と対照させて読むことは想定されていないだろう。そこでは、原文の構造を読み解く必要はなく、内容の理解が重要になってくる。その場合に、直訳的な表現が多いことで、不自然な日本語になり、内容理解の障害になることは避けられると考えられる。特に、第1章で使用した、一般大衆向けの推理小説といった、娯楽的な読み物においては、その傾向が強かっただろう。娯楽としての面を持つとなると、内容の理解はもとより、文学的な作品としての面も持つことになる。直訳的な表現を用いることで、不自然な日本語文になることは、その目的に合わないものであったろう。直訳的な表現は翻訳文においては避けられる傾向があるものであったと考えられる。

### 2 英文訓読の影響

前項でも触れたように、第1部で見たようなリーダーの訳本は英語学習者の参考書として用いられていたため、日本語しての内容理解よりも、英語そのものの理解のために用いられるという性格が強い。それに対し、第2部で使用した翻訳文については、内容理解が一番の目的となる。そのため、直訳的な表現は避けられる。

しかし、第2章で見たような、訳出法の変化をみると、英文訓読などで用いられた訳出法の影響もないとは言いきれない。第2章では、関係代名詞節の訳出法が、訳文において、先行詞を基準として、関係代名詞節の訳が後置されるもの（第2章では（3）の分類）から前置されるもの（第2章では（2）の分類）へと変化していることがわかった。第2章で用いた、2種の翻訳文の刊行年を考えると、『西国立志編』が明治4年（1871）、『自助論』については明治39年（1906）である。明治20年ごろに英文訓読のパターンを用いた訳出法が定着し始めたことを考えると、『自助論』においてはその訳出法の影響があると考えられる。関係代名詞の直訳的な表現とされる「トコロノ」という表現は、訳文中にはあまり見ることはできなかった。第2章での訳出法の変化は、関係代名詞節の訳が先行詞の訳の前に訳されるものが増えている、というものであった。関係代名詞節の訳が先行詞の訳に前置されるということは、「トコロノ」を介して訳出する直訳的な方法と関係代名詞と先行詞の訳の位置関係は変わらない。つまり、「トコロノ」を介する訳出法では、**関係代名詞節の訳→トコロノ→先行詞の訳**という順番になり、増加した関係代名詞節の訳が先行詞の訳に前置される訳出法では、**関係代名詞節の訳→先行詞の訳**という順番になる。こうしてみると、「トコロノ」を介する訳出法から、「トコロノ」を除いたものと構造が同じであると考えられる。断言はできないが、『自助論』は明治20年以降の刊行であるため、少なからず、欧文訓読式の訳出法の影響があった可能性がある。

### 3 翻訳文のジャンルによる違い

第1章では推理小説を、第2章では啓蒙書を資料として使用した。どちらにおいても、ほとんど欧文直訳表現は見られなかったことから、本研究の調査においては翻訳文のジャンルによる違いはなかったかもしれない。しかし、本研究の調査においては、調査対象とした表現を限定した調査であったため、このことを断言することはできない。調査対象とする欧文直訳表現をもっと多くすることで、もしかしたら、結果の様相が違っていたことも考えられる。



### 第3部 翻訳以外の文章における欧文直訳表現

第3部では、第1章で夏目漱石の文章について、第2章で芥川龍之介の文章について調査を行う。第1部、第2部では、原文が存在する訳文について調査したが、第3部においては、原文の存在しない日本語の文章について調査を行うことになる。つまり、日本語として用いられた欧文の直訳的な表現に関して調査するということになる。欧文直訳表現は、日本人が日本語として表現する中で、どのように現れるのか明らかにすることが本章の目的となる。

# 第1章 夏目漱石の文章における欧文直訳表現

## 1 調査資料

翻訳以外の日本語における欧文直訳表現について調査するにあたって夏目漱石の文章について調査を行うことにする。周知の通り、夏目漱石は英文学者であり、当然ながら英語には精通していたと考えられる<sup>i</sup>。そのため、欧文直訳表現も多く現れるのではないかと予想される。

調査資料としては、『夏目漱石全集 第十六巻 評論ほか』（1995年4月、岩波書店）を用いる。小説などの作品であると、その文体により表現に制限が出る可能性が考えられるため、全集の中でも、評論などが収められている第十六巻を用いることにする。第十六巻に収められている作品は93作品あり、目次から題名を引用すると、以下の通りである。なお、便宜上、作品の掲載順にそれぞれ番号を施している。

### 『夏目漱石全集 第十六巻』の所収作品の題目

- 1 愚見数則
- 2 人生
- 3 不言之言
- 4 子羊物語に題す十句〔小松武治訳『沙翁物語集』序〕
- 5 序〔浦瀬白雨訳『ウォルツフォスの詩』序〕
- 6 序〔『吾輩ハ猫デアル』（上編）自序〕
- 7 猫の広告文
- 8 序〔『漾虚集』自序〕
- 9 序〔『吾輩ハ猫デアル』中編自序〕
- 10 序〔『鶉籠』自序〕
- 11 作物の批評
- 12 写生文
- 13 漱石先生より〔鈴木三重吉『千代紙』序〕
- 14 序〔平井晩村『詩集野葡萄』〕
- 15 入社の際
- 16 文芸の哲学的基礎
- 17 序〔『吾輩ハ猫デアル』下編自序〕
- 18 〔『虞美人草』予告〕
- 19 序〔藪野椋十『東京見物』序〕

---

<sup>i</sup> 『日本近代文学大事典』第二巻による。

- 20 序〔本間久四郎訳『名著新訳』序〕
- 21 序〔森田草平・川下江村・生田長江『草雲雀』序〕
- 22 文学入門序
- 23 虚子著「鶏頭」序
- 24 作家の態度
- 25 序〔東洋城選『新春夏秋冬 春之部』序〕
- 26 〔『三四郎』予告〕
- 27 〔沼波瓊音・天生目杜南共編『古今 名流俳句談』序〕
- 28 田山花袋君に答ふ
- 29 コンラツドの描きたる自然に就て
- 30 序〔東洋城選『新春夏秋冬 夏之部』序〕
- 31 太陽雑誌募集名家投票に就て〔『東京朝日新聞』所載〕
- 32 明治座の所感を虚子君に問れて
- 33 漱石氏来翰〔虚子君へ〕
- 34 太陽雑誌募集名家投票に就て〔『太陽』所載〕
- 35 〔『それから』予告〕
- 36 序〔東洋城選『新春夏秋冬 秋之部』序〕
- 37 「額の男」を読む
- 38 俳諧新研究の序
- 39 『煤煙』の序
- 40 「夢の如し」を読む
- 41 日英博覧会の美術品
- 42 東洋美術図譜
- 43 〔川井田藤助『英語会話』序〕
- 44 客観描写と印象描写
- 45 不折俳画の序
- 46 草平氏の論文に就て
- 47 長塚節氏の小説「土」
- 48 文芸とヒロイツク
- 49 艇長の遺書と中佐の詩
- 50 鑑賞の統一と独立
- 51 イズムの功過
- 52 好悪と優劣
- 53 自然を離れんとする芸術（新日本画譜の序）
- 54 博士問題とマードック先生と余

- 55 マードック先生の日本歴史
- 56 博士問題の成行
- 57 文芸委員は何をするか
- 58 太平洋画会
- 59 田中王堂氏の「書齋より街頭へ」
- 60 坪内博士と「ハムレット」
- 61 学者と名誉
- 62 道楽と職業
- 63 現代日本の開化
- 64 中身と形式
- 65 文芸と道徳
- 66 彼岸過迄に就て
- 67 「土」に就て〔長塚節『土』序〕
- 68 池辺君の史論に就て〔池辺吉太郎『明治維新三大政治家』再版序〕
- 69 三愚集〔秋元梧楼編『三愚集』序〕
- 70 〔秋元梧楼編『明治百俳家短冊帖』天之巻序〕
- 71 〔『彼岸過迄』献辞〕
- 72 文展と芸術
- 73 序〔高原操『極北日本』序〕
- 74 序〔『社会と自分』自序〕
- 75 〔野上弥生子訳『伝説の時代』序〕
- 76 行人続稿に就て
- 77 〔米窪太刀雄『海のロマンス』序〕
- 78 題言〔想田秋暁編纂『高岳』序〕
- 79 素人と黒人
- 80 〔保坂帰一『吾輩之観たる亜米利加』下編序〕
- 81 〔『心』予告〕
- 82 〔岡本一平『探訪画趣』序〕
- 83 序〔『心』自序〕
- 84 〔『心』広告文〕
- 85 〔木村恒訳『南国へ』再版序〕
- 86 序〔木下杢太郎『唐草表紙』序〕
- 87 私の個人主義
- 88 序〔植松安訳『文芸批評論』序〕
- 89 〔津田青楓氏〕

- 90 縮刷に際して〔縮刷『社会と自分』自序〕
- 91 〔『金剛草』自序〕
- 92 點頭録
- 93 題丙辰潑墨〔中村不折『不折山人丙辰潑墨』第一集序〕

以上 93 作品が掲載されている。

『夏目漱石全集 第十六卷』では発表年代順に掲載されているが、1 番目に掲載されている「愚見数則」は明治 28 年（1895）11 月 25 日に発表のものである。最後の「題丙辰潑墨〔中村不折『不折山人丙辰潑墨』第一集序〕」は、大正 5 年（1916）9 月 25 日発表のものである。つまり、第十六卷所収の作品は明治 28 年（1895）から大正 5 年（1916）までに発表された作品ということになる。

## 2 調査方法

調査方法としては、調査資料から、序章にて示した先行研究の指摘があった欧文直訳表現が含まれている部分を用例として収集し整理する。その他、欧文直訳的な表現であると考えられるものについても、用例として収集した。

### 3 調査結果

以下に、調査の結果を示していく。用例は全部で 546 例収集できた。次ページからの【表 3-1-1】でそれぞれの表現の用例数を示す。

【表 3-1-1】を見ると、must や may などの助動詞の直訳表現と考えられるものの用例が多数を占めていることがわかる。次に多いのが関係代名詞であった。それに続いて、a kind of~ / a sort of~, 人称代名詞, 進行形, self / selves などが多いことがわかる。

以下で、それぞれの表現について、具体的に見ていくことにする。序章で示した【表 0-0-1 森岡(1999)と他の先行研究における欧文直訳表現の指摘に関する対照表】の順番に、用例が得られたものについて、提示する<sup>ii</sup>。

#### 3. 1 無生物主語

無生物主語の欧文直訳表現の用例を以下に示す。

# 1 あなたの太い線、大きな手、変な顔、すべてあなたに特有な形で描かれた簡単な画は、其時我々に過去は斯んなものだと教えて呉れるのです。

(82, p. 568, 1.13)

# 2 容易に打ち壊されない自信が、其叫び声とともにむく / \ 首を擡げて来るのではありませんか。

(87, p. 598, 1.11)

# 1 では、下線部、人間以外のものが主語となり、人間に教えてくれるという表現になっている。また、# 2 では、自信が首を擡げるというように、擬人法的な用法になっている。

#### 3. 2 人称代名詞

人称代名詞としては、彼、彼女といった 3 人称の表現が欧文直訳表現とされるが、ここでは、それ以外の用例についても、収集した。

まず、「彼」を用いた用例について見る。

---

<sup>ii</sup> 用例の末尾にそれぞれ、1. 調査資料で示した、『夏目漱石全集 第十六巻』の所収作品の「題目」に付した作品の番号と、ページ数、行数を示す。たとえば、# 1 の末尾に示したものでは、(82, p. 568, 1.13)となり、82 の作品「〔岡本一平『探訪画趣』序〕」で 568 ページ、13 行目を示している。また、表現に該当すると考えられる部分に二重下線を施している。

【表3-1-1 夏目漱石の評論における欧文直訳表現】

森岡(1999)			用例数
項目	小項目	具体例など	
名詞	1 抽象名詞	有情の者としての働き, 受身, 断定, 使役	0
	2 無生物名詞の用法	擬人法, 受身, 使役, 断定	9
	3 抽象名詞目的語		0
代名詞	1 人称代名詞	彼・彼女	40
	2 代名詞の複合	self selves own	17
	3 非人称代名詞 it	天候・明暗・寒暖を述べるit	0
		句や節を受けるit	0
	4 指示代名詞	that, that of (～のそれ), those of	0
	5 不定代名詞とそれに類する表現	one of ～ …の一つ	22
		some of ～ …のあるもの	0
		much of ～/many of ～/most of ～ …の多く	0
		a kind of ～ …の種類	38
		one ～ the other 一は～他は, some ～ other 或る～他, 或る～或る, the first ～ the second 第一～第二	6
the former ～ the latter 前者～後者		1	
6 関係代名詞	half ～ half 半ば～半ば	0	
	partly ～ partly 一つは～一つは	0	
	which/that/who/where/what	48	
形容詞	1 比較級	より/～より尚/～より更に/～より一層	10
	2 最上級		2
	3 形容詞句	worthy of 値する 価値ある	1
		free from から自由で	0
		enough to ～すべく充分	0
too ～ to べく余り		0	
動詞・補助動詞	受身		0
	使役	let ～ do/make ～ do/have ～ do ～をして～しむ(擬人的な表現)	1
	進行形	つつある つつ ながら	37
	完了形	なんだりき など	0
	不定詞	～すべく/～することを/～と/～ために	0
	動詞・動詞句	have	9
		find	0
		give	0
		feel	0
		seem	0
		look	0
		belong to	0
		be obliged to	0
	used to ～を常とする	0	
助動詞	must ねばならぬ	87	
	may かも知れぬ	100	
	would shoud might たであらう	37	
接続関係 接続詞, 前置詞, 熟語	1 並列	a, b, and c	3
	2 after	後	0
	3 before	前に	0
	4 as soon as	や否や	2
	5 as ～ as possible, as ～ as ～ can	できるだけそれだけ	2
	6 as ～ as, so ～ as	だけそれだけ	2
	7 at the same time	同時に	3
	8 because, for	如何となれば/なぜならば…から	5

森岡(1999)			用例数
項目	小項目	具体例など	
接続関係 接続 詞, 前置詞, 熟語	9 not only ~ but ~	のみならず…また	13
	10 too ~ to ~	すべく余り	0
	11 the more ~ the more	すればするほど いよいよ	5
	12 rather than	よりは寧ろ	7
	13 without	ことなしに	0
	14 in spite of	にもかかわらず	7
	15 instead of	代り	5
	16 if	もし…ならば…であらう	3
	17 in order to	為に	0
	18 though	といえども	0
	19 倒置		2
20 挿入		0	
森岡(1999)以 外の表現など	in other words		7
	it is necessary to do		3
	one of the most~		1
	from ~ to		9
	or		2
合計			546



### 「彼」を使用している例

- # 3 従つて彼は艇長としての報告を作らんがために、凡ての苦悶を忍んだので、他に  
よく思はれるがために、徒らな言句を連ねたのでないと云ふ結論に帰着する。  
(49, p. 327, 1.9)

また、次のような例もあった。

### 一人称・単数を多用している例

- # 4 二博士が余の意見を当局に伝へたる結果として、同日午後に、余はまた福原専門  
学務局長の来訪を受けた。局長は余に文部省の意志を告げ、余はまた局長に余の  
所見を繰返して、相互の見解の相互に異なるを遺憾とする旨を述べ合つて別れた。  
(56, p. 360, 1.3)
- # 5 一日余は余の書齋に坐つて、四方に並べてある書棚を見渡して、其中に詰まっ  
ている金文字の名前が悉く西洋語であるのに気が付いて驚いた事がある。  
(42, p. 307, 1.7)
- # 6 私は私の手にたゞ一本の錐さえあれば何処か一ヶ所突き破つて見せるのだがと、  
…  
(87, p. 592, 1.11)

# 4, # 5, # 6 すべてにおいて、一人称単数の人称代名詞が1文中に2つ以上使用されて  
いる。

### 一人称・複数を多用している例

- # 7 と云ふ意味は、「ハムレット」と我々が必ずびたりと一致すべきものとの迷信に近  
い信念を以て読み始めるよりは、寧ろ我々は我々として何処迄「ハムレット」  
に引つ張つて行かれ得るだらうかと云ふ批判的態度で、研究に取り掛らなければ  
なるまいと論定したのである。  
(60, p. 381, 1.11)

# 7 は一人称複数の人称代名詞を多用している例である。ここでは、「我々」が使用されて  
いる。

### 三人称・複数を多用している例

# 8 彼等にしてもし現実中に此行為を見出し得たるとき、彼等の憚りも彼等の恐れも一掃にして拭ひ去るを得べきである。

(48, p. 324, 1. 12)

# 8 では、三人称複数の人称代名詞が 1 文中に 2 つ以上使用されている例になる。これにおいては、「彼等」を 3 回使用している。

### 3. 3 代名詞の複合

self, selves, own など、「自身」と訳されるものである。

# 9 此「額の男」の批評中で、移して余自身の小説の上に持つて来て非難しても構はないものもあるかも知れない。

(37, p. 291, 1. 15)

# 9 では「余自身」というように、人称代名詞と複合して用いられている。

### 3. 4 不定代名詞とそれに類する表現

one of...や a part of..., a kind of..., a sort of..., one... the other などの欧文直訳表現にあたる例が見られた。それぞれ以下に用例を示す。

#### one of...

# 10 オセロは四大悲劇の一である。(11, p. 41, 1. 15)

# 11 我既に恥づべきものゝ一を犯す。(3, p. 16, 1. 9)

「~の一つ」などがパターンであると考えられるが、# 10, # 11 ではそれぞれ、「四大悲劇の一」「恥づべきものゝ一」となっている。

#### a part of...

# 12 此意識の一部分、時に積れば一分間位の所を絶間なく動いてゐる大きな意識から切り取つて調べてみると矢張り動いている、(63, p. 432, 1. 4)

# 12 では、「此意識の一部」となっている。「～の一部」などがパターンとなると考えられる。

#### **a kind of... / a sort of...**

# 13 其の胸中に漂へる或物に一種の体を与へたるを信ず。(10, p. 36, 2)

# 14 このうちから東洋にのみあつて、西洋の美術には見出し得べからざる特長を観得する事が出来るならば、たといその特長が全体にわたらざる一種の風致にせよ、観得し得ただけそれだけその人の過去を偉大ならしむる訳である。

(42, p. 308, 1.13)

# 13, # 14 とともに、「一種の～」となっていることがわかる。

#### **one ~ the other**

「一は～他は」などのパターンが考えられる。

# 15 段々聞いて見ると、一方は浪の非常に荒い時に行き、一方は非常に静かな時に行つた違から話がかう表裏して来たのである、

(63, p. 420, 1.6)

# 15 では「一方は…一方は」となっている。

#### **the former ~ the latter**

「前者～後者」というパターンが考えられるが、以下の# 16 は「前の…後者」となっている。

# 16 で前のを便宜のため活力節約の行動と名づけ後者をかりに活力消耗の趣向とでも名づけておきませうが、この活力節約の行動はどんな場合に起るかと云へば現代の吾々が普通用ひる義務といふ言葉を冠して形容すべき性質の刺戟に対して起るのであります、

(63, p. 422, 1.4)

### 3. 5 関係代名詞

関係代名詞の which, that, who, where, what などにあたる表現で、「トコロノ」がパターンとなっている。

# 17 現代の文士が述作の上において最も要求する所のものはそれらではない。  
(57, p.368, 1.3)

# 18 現代の文士が述作の上において要求する所のものは、国家を代表する文芸委員諸君の注意や批判や評価だと思ふのは、政府の己惚である。  
(57, p.367, 1.16)

# 19 吾人は誠実に自然を描写しつゝありと<sup>せいげん</sup>声言するにも拘はらず<sup>かゝ</sup>其<sup>その</sup>描写せる所のものは遂に<sup>つひ</sup>自家<sup>じか</sup>の見たる自然を脱する<sup>わけ</sup>訳に行かない。  
(53, p.342, 1.2)

上に示した、# 17, # 18, # 19 は関係代名詞のパターンである、「トコロノ」が使用されていると考えられる。

### 3. 6 比較級

「より」、「～より尚」、「～より更に」、「～より一層」などがパターンとして用いられる。

# 20 より多くの興味を感ずる恋愛小説と取り換えて呉れといふに違ない。  
(67, p.495, 1.11)

# 21 即ち外国へ行つた時よりも帰つて来た時の方が、偶然ながらある力を得た<sup>こと</sup>事になるのです。  
(87, p.596, 1.7)

# 20, # 21 とともにパターンを用いた用例となっている。

### 3. 7 最上級

以下の、# 22 は「尤も著しい例」となっており、最上級の訳出パターンに相当するものと考えられる。

# 22 <sup>これ</sup>是ではまだ日高君は首肯<sup>しゅこん</sup>されないかも知れないから尤も著しい例を挙げると、ゼ、ニガー、オブ、ゼ、ナーシツサスのようなものである。

(29, p.258, 1.10)

### 3. 8 形容詞句

worthy of は「価値がある」などがパターンになるとされている。

# 23 この点に於て確かに世間に紹介される価値があると思ひます。(77, p.549, 1.7)

# 23 では「価値がある」とパターン通りの表現が用いられた用例である。

### 3. 9 使役

let ... do, make ... do, have ... do に相当する欧文直訳表現は「…をして…しむ」というように、擬人的な表現となるものである。

# 24 しかるに一家の批判を以て任ずべき文芸家もしくは文学家が、国家を代表する政府の威信の下に、突如として国家を代表する文芸家と化するの結果として、天下をして彼らの批判こそ最終最上の權威あるものとの誤解を抱かしむるのは、その起因する所が文芸その物と何らの交渉なき政府の威力に本づくだけに、猶更の悪影響を一般社会——ことに文芸に志ざす青年——に与うるものである。

(57, p.365, 1.11)

### 3. 10 進行形

進行形は「つつある」「つつ」「ながら」などの欧文直訳表現が考えられる。

# 25 又過去四十何年間の道德の傾向は明かに斯<sup>こゝ</sup>う云ふ方向に流れつゝあるといふ事実を御認めにならん事を希望するのであります。

(65, p.473, 1.7)

# 26 見ると、同誌上にかねて募集しつゝあつた「名家投票」の結果が発表になつてゐる。

(31, p.262, 1.1)

# 27 吾人は誠実に自然を描写しつゝありと<sup>せいげん</sup>声言するにも<sup>かゝ</sup>拘はらず其<sup>その</sup>描写せる所のものは遂に自家の見たる自然を脱する訳に行かない。

(53, p. 342, 1. 2)

# 25, # 26, # 27 はどれも、進行形の直訳的な表現である「ツツアル」を用いたものと考えられる。

### 3. 11 動詞・動詞句

have の直訳表現「持つ」が使用されているものを以下に挙げた。

# 28 余は未だに尻を持つて居る。(9, p. 35, 1. 10)

# 29 個人の漱石を択んで序をかゝせる晩村君は個人漱石に一種の興味を有する外に何らの利害の考もない筈である。

(14, p. 59, 1. 6)

# 30 ただし余は文部省の如何と、世間の如何とにかかわらず、余自身を余の思い通に認むるの自由を有している。

(56, p. 361, 1. 15)

### 3. 12 助動詞

助動詞の欧文直訳表現は用例数がとても多かった。以下に分けて、用例を示す。

#### 3. 12. 1 must

「ねばならぬ」という直訳表現が使用されていた。

# 31 而して強いものと交際すれば、どうしても己を棄てゝ先方の習慣に従はなければならなくなる、

(63, p. 436, 1. 13)

# 32 文学上の述作を批判するに方つて(詩は詩、劇は劇、小説は小説、凡てに共有なる点は共有なる点として)批判すべき条項を明かに備へねばならぬ。

(11, p. 43, 1. 9)

# 33 之ができる為めには以上の条項と法則を知らねばならぬ。

(11, p. 46, 1. 9)

# 34 されば自動車のない昔はいざ知らず、いやしくも発明される以上人力車は自動車に負けなければならない。

(63, p. 428, 1. 8)

# 35 然し是は千人のうちの一人<sup>にん</sup>で、飽迄<sup>あくまで</sup>も物数奇の説だと心得て聞かなければならないい。

(42, p. 308, 1. 8)

# 36 …醜<sup>あくそく</sup>とこせつく必要なく鷹揚<sup>あうやうじやく</sup>自若と衆人環視<sup>くわんし</sup>の裡<sup>うち</sup>に立つて世に処する事の出来るのは全く祖先が骨を折つて置いてくれた結果と云はなければならない。

(42, p. 306, 1. 5)

# 37 自然派の作物は狭い文壇の中にさへ通用すれば差支ないと云ふ自殺的態度を取らぬ限りは、彼等と雖亦自然派のみに専領されてゐない広い世界を知らなければならない。

(48, p. 325, 1. 10)

# 31 から # 37 までのどの例も「ねばならぬ」、または、それに類する表現が用いられていた。

### 3. 12. 2 may

「かも知れぬ」が助動詞 may に対応する直訳表現である。

# 38 従つて落ち付かざる所に落ちていて、歳月を此儘<sup>このまま</sup>に流れて行くかも知れない。  
(56, p. 362, 1. 2)

# 39 否昔<sup>いな</sup>より却<sup>かえ</sup>つて苦しくなっているかも知れない、(63, p. 427, 1. 12)

# 40 余の云う事も諸君から見れば依然として物足らぬかも知れぬ。(12, p. 48, 1. 9)

# 41 これでもまだ抽象的でよくお分りにならないかも知れませんが、もう少し進めば私の意味は自ら明瞭になるだろうと信じます。

(63, p. 421, 1. 10)

### 3. 12. 3 will / would など

will や would の欧文直訳表現として「であらう」や「たであらう」などが考えられる。

# 42 見る人は無論あなたの画から、何時何んな事があつたかの記憶を心のうちに呼び起すでせう、しかも貴方の表現したやうな特別な観察点に立つて、自分がいまだかつて経験しなかつたやうな記憶を新らしくするでせう。(82, p. 568, 1. 6)

# 43 さうして或る手腕家によつて、此一事實から傑出した文学を作り上げる事が出来るだらう。

(48, p. 325, 1. 6)

### 3. 13 並列

a, b, and c に相当するやうな、並列の表現である。

# 44 今の所余は「土」の一篇がうまく成功する事を氏のために、読者のために、且新聞のために祈るのみである。

(47, p. 322, 1. 2)

# 44 では「氏のために、読者のために、且新聞のために」となっている。

### 3. 14 as soon as

「や否や」という as soon as の欧文直訳表現が見られた。

# 45 余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を読み出した。

(67, p. 492, 1. 11)

# 46 所が帰るや否や私は衣食の為に奔走する義務が早速起りました。(87, p. 596, 1. 9)

### 3. 15 as ... as possible, as ... as ... can

「できるだけそれだけ」という表現になると考えられる。

# 47 自分が画がかきたいと思えばできるだけ画ばかりかこうとする。(63, p. 425, 1. 5)

### 3. 16 as ... as, so ... as

「だけそれだけ」という欧文直訳表現になると考えられる。



# 48 是固より訳の拙なるにも困るべけれど、其拙なるが西詩の俳化し難きを示すものにて訳し難き丈其丈俳句に遠かれりとも見るべきか。 (3, p.18, 1.2)

# 48 では「丈其丈」となっている。

### 3. 17 at the same time

at the same time にあたるものとして「同時に」が欧文直訳表現だとされている。

# 49 其翻訳を敢<sup>〔あえ〕</sup>てするのは、これを敢てするのと同時に、我等日本人を見棄たも同様である。

(60, p.383, 1.4)

### 3. 18 because, for

because や for は欧文直訳表現では「如何となれば」「なぜならば…から」となるとされる。

# 50 何故と云へば、要吉の言動が、かゝる境遇の下に置かれたる普通の人になすべき言動以外には一步も出てゐないからである。

(39, p.297, 1.9)

# 51 余が某氏の言に疑を挟むのは、自分に最も密接の関係のある文壇の近状に徴して、決してそうではあるまいとの自信があるからである。

(57, p.367, 1.7)

### 3. 19 not only ... but (also)

not only ... but also は「のみならず…また」という欧文直訳表現になると考えられる。

# 52 かうすれば文芸と道德の関係が一層明瞭になるのみならず、又浪漫自然二文学の関係も亦<sup>また</sup>一段と判然するだらうと思います、

(65, p.476, 1.15)

# 53 …触れた小説と同じく存在の権利があるのみならず、同等の成功を収め得るものだと主張するのである。

(23, p.151, 1.12)

# 54 けれどもその当時は毎週五、六時間必ず先生の教場へ出て英語や歴史の授業を受けたばかりでなく、時々私宅まで押し懸けて行って話を聞いた位親しかったのである。

(54, p. 347, 1. 3)

# 55 我々は自ら相応に鑑賞力のある文士と自任して、常住他の作物に対して、自己の正当と信ずる評価を公けにして憚らないのみか、芸術上において相互発展進歩の余地はこれより外にないとまで考えている。

(57, p. 365, 1. 2)

### 3. 20 the more ~ the more

the more the more は「すればするほど」、「いよいよ」という欧文直訳表現になると考えられる。

# 56 否開化が進めば進む程競争が益ますます劇しくなって生活は愈いよいよ困難になるやうな気がする、

(63, p. 427, 1. 6)

# 57 <sup>〔これ〕</sup>之に反して人の為になる仕事を余計すればする程、それだけ己れの為になるのも亦〔また〕明かな因縁であります、

(62, p. 399, 1. 10)

# 56 「進めば進む程」、# 57 「すればする程」とそれぞれなっている。

### 3. 21 rather than

「よりは寧ろ」という欧文直訳表現が見られた。

# 58 …余はこれに反対すると云わんよりは、むしろ大賛成を表したいくらいである。

(29, p. 257, 1. 7)

# 59 と云ふ意味は、「ハムレット」と我々が必ずびたりと一致すべきものとの迷信に近い信念を以て読み始めるよりは、寧ろ我々は我々として何処迄どこまで「ハムレット」に引つ張つて行かれ得るだらうかと云ふ批判的態度で、研究に取り掛らなければなるまいと論定したのである。

(60, p. 381, 1. 11)

### 3. 22 in spite of

「にもかかわらず」という欧文直訳表現が見られた。

# 60 写生文と普通の文章の差違は認められて居るにもかかわらず明かに道破されて居ら  
んのも此理である。  
(12, p. 48, 1. 5)

# 61 いろいろあるうちで余の尤も要点だと考へるにもかかわらず誰も説き及んだ事のないのは作者の心的状態である。  
(12, p. 48, 1. 12)

# 62 已を得ずして拙な詩を作つたと云ふ痕跡はなくつて、已を得るにもかかわらず俗な句を並べたといふ疑ひがある。  
(49, p. 327, 1. 13)

# 63 吾人は誠実に自然を描写しつゝありと声言するにもかかわらず其描写せる所のものは遂に自家の見たる自然を脱する訳に行かない。  
(53, p. 342, 1. 2)

### 3. 23 instead of

「代り」という欧文直訳表現になる。

# 64 一纏めにきちりと片付いている代りには、出すのが臆劫になったり、解くのに手数がかかったりするので、いざという場合には間に合わない事が多い。  
(51, p. 333, 1. 2)

# 65 閑寂の趣を豆腐と奈良漬に得た代りに、(14, p. 58, 1. 4)

### 3. 24 if

「もし…ならば…であらう」という仮定法の欧文直訳表現が見られた。

# 66 然し「東京見物」がそれ程「猫」に似て居るならば、まあ兄弟分の間柄なんだから。  
(19, p. 141, 1. 4)

### 3. 25 倒置

倒置の用例が見られたので、以下に示す。

# 67 此冗長な手紙が、もし貴方の小説集の序文として御役に立つならば何うぞ御使ひ下さい。私は貴方に対する愉快的義務として、それを認めましたのですから。  
(86, p. 580, 6)

# 68 年の若いあなた方にも略想像ができるでせう、はたしてこれが英文学か何うだかという事が。  
(87, p. 591, 1. 6)

### 3. 26 その他の表現

森岡(1999)で指摘されなかった表現で、他の先行研究での指摘があるものや、その他に直訳的な表現であると考えられる表現で収集したものを以下に示す。

#### from ... to

「…から…まで」とう直訳的な表現が考えられる。

# 69 最後に一言するが、自分は午後的一時から、夜の十一時まで明治座の中で暮した。  
(32, p. 269, 1. 9)

#### in other words

「換言すれば」、「言い換えると」などが in other words に相当する表現とされている。

# 70 換言すれば、余裕がある人でなければ出来ない趣味である。(23, p. 155. 1. 7)

# 71 又云ひ換ればわが理想がわが頭の中に孤立して、世態とあまりに没交渉なるがためである。  
(48, p. 324, 1)

# 72 換言すれば彼の戯曲のあるものは齣幕の組織に於て明かに比例を失してある。  
(11, p. 41, 1. 12)

**it is necessary to do**

「…する必要がある」などの欧文直訳表現が考えられる。

- # 73 其他は嘘であると主張する自然派の作家は、一方に於て佐久間艇長と其部下の死と、艇長の遺書を見る必要がある。(48, p. 325, 7)
- # 74 それについては少し学究めきますが、日本とか現代とかいう特別な形容詞に束縛されない一般の開化から出立してその性質を調べる必要があると考えます。(63, p. 417, 1.12)

**or**

or に相当する欧文直訳表現としては、「もしくは」、「あるいは」などが考えられる。

- # 75 従来の徳育法及び現今とても教育上では好んで義務を果す敢為邁往<sup>〔かんいまいおう〕</sup>の氣象を奨励する様ですが是は道德上の話で道德上しかなくてはならぬ若くは<sup>〔もし〕</sup>しかする方が社会の幸福だと云ふ迄で、人間活力の示現を觀察してその組織の経緯一つを司どる大事实から云へば何<sup>ど</sup>うしても今私が申し上げた様に解釈するより外仕方がないのであります。(63, p. 422, 1.6)
- # 76 余が博士を辞退した手紙が同じく新聞紙上で発表されたときもまた余は故旧新知もしくは未知の或ものからわざわざ賛成同情の意義に富んだ書状を幾通も受取った。(54, p. 351, 1.13)

# 75, # 76 とともに、「若くは」、「もしくは」という表現が使用されていた。

#### 4 まとめ

以上で見てきたように、さまざまな表現が用いられていることがわかった。また、先行研究に指摘されていた欧文直訳表現の中でも、調査資料では見られないものもあった。それに加えて、森岡(1999)には指摘がなく、他の先行研究で指摘があったもの、そして稿者が直訳的表現と考え用例として収集したものもあった。

収集した用例の用例数をみると、助動詞の欧文直訳表現が非常に多数を占めていることがわかった。助動詞の項目だけで 224 例と、約半数を助動詞の用例が占めていた。また、人称代名詞を多用している例なども見られた。

## 第2章 芥川龍之介の文章における欧文直訳表現

### 1 調査資料

翻訳以外の日本語における欧文直訳表現について調査するにあたって芥川龍之介の文章について調査を行うことにする。芥川龍之介は、大学時代には英文学を専攻しており、その後、英語教師として教鞭をとったこともある<sup>i</sup>。当然ながら英語には精通していたと考えられる。そのため、欧文直訳表現も多く現れるのではないかと予想される。調査資料として、紅野敏郎ほか編『芥川龍之介全集』（1995-1998, 岩波書店）を使用する。

『芥川龍之介全集』は第1巻から第15巻までが小説・随筆などを発表年月日順に並べたもの、第16巻が小説・随筆など発表年月日順にならべたものと対談・座談、第17巻から第20巻までが書簡、第21巻が初期文章・草稿、第22巻が未定稿、第23巻が日録・講演メモ他、第24巻が補遺・年譜・単行本書誌他という構成になっている。研究方法上、小説以外の文章を対象とする必要がある。しかし、この『芥川龍之介全集』の構成であると、小説を除くために、稿者の判断が必要となり、不正確に小説と小説以外とを判断してしまう可能性がある。そこで、ちくま文庫から出版されている『芥川龍之介全集』（1986-1989, 筑摩書房）<sup>ii</sup>の構成を見ると、第7巻（1989）に評論をまとめた巻があることがわかった。第3部第1章では、『夏目漱石全集』の評論の巻を資料としたことから、それと合わせるため、また、資料の調査での不正確さを防ぐために、ちくま文庫版で収録されている作品を、『芥川龍之介全集』（岩波書店）から抜き出して調査することにする。なお、ちくま文庫版で収録されている作品と岩波書店版での収録巻号などの対照表は次ページ【表3-2-1】に示した。ちくま文庫版の目次をもとに、表を作成し、岩波書店版ではどの巻にあたるのか右端に示した。なお、左端の番号は便宜的に記したものである。また、「岩波書店版 該当作品名」という項目はちくま文庫版と作品名が違った場合に岩波書店版での作品名を示した。

<sup>i</sup> 『日本近代文学大事典』第一巻による。

<sup>ii</sup> 『芥川龍之介全集』（1986-1989, 筑摩書房）は全8集である。第1巻から第6巻は小説随筆などが収められ、第7巻は評論、第8巻は紀行・日記などが収められている。

【表 3-2-1 ちくま文庫版と岩波書店版の作品対照】

	ちくま文庫版 収録作品	岩波書店版 該当作品名	巻
1	短歌雑感		6
2	或悪傾向を排す		3
3	芸術その他		5
4	漢文漢詩の面白味		7
5	仏蘭西文学と僕		7
6	一批評家に答う	一批評家に答ふ	22
7	プロレタリア文芸の可否	「改造」プロレタリア文芸の可否を問ふ	9
8	思うままに	思ふままに	10
9	小説の戯曲化		11
10	僻見		11
11	文部省仮名遣改訂案について		12
12	「私」小説論小見		13
13	「わたくし」小説に就いて		12
14	近松さんの本格小説		13
15	滝井君の作品に就いて		22
16	侏儒の言葉		13
18	文芸雑談		14
19	芝居漫談		14
20	今昔物語に就いて	今昔物語鑑賞	14
21	文芸的な、余りに文芸的な		15
22	続文芸的な、余りに文芸的な		15
24	文壇小言		22
25	明治文芸に就いて		22
26	小説作法十則		16
27	十本の針		16
29	西方の人		15
30	続西方の人		15
31	発句私見		13
32	凡兆に就いて		13
33	芭蕉雑記		11
34	続芭蕉雑記		15

以上の作品について、『芥川龍之介全集』（岩波書店）の該当部を抜き出し、調査資料とした。



## 2 研究方法

調査方法としては、調査資料から、序章にて示した先行研究の指摘があった欧文直訳表現が含まれている部分を用例として収集し整理する。その他、欧文直訳的な表現であると考えられるものについても、用例として収集した。

## 3 調査結果

以下に、調査の結果を示していく。用例は全部で 386 例収集できた。次ページからの【表 3-2-2】でそれぞれの表現の用例数を示す。

【表 3-2-2】を見ると、助動詞に関する表現の用例数が飛び抜けて多いことがわかる。また、代名詞の複合や不定代名詞などに関しても、用例数が多いことがわかる。その他は少数にとどまっている。

以下で、それぞれの表現について、具体的に見ていくことにする。序章で示した【表 0-0-1 森岡(1999)と他の先行研究における欧文直訳表現の指摘に関する対照表】の順番に、用例が得られたものについて、提示する<sup>iii</sup>。

### 3.1 人称代名詞

人称代名詞としては、彼、彼女といった 3 人称の表現が欧文直訳表現とされるが、ここでは、それ以外の用例についても、収集した。

まず、「彼」を用いた用例について見る。

# 1 彼の「日本に於ける三年間」はかう言ふ一節を含んでゐる。(13, p. 81, 1. 12)

#### 一人称・複数を多用している例

# 2 僕等は時々僕等の夢を遠い昔に求めている。(14, p. 249, 1. 3)

# 2 では、「僕等」が 2 度使用されている。

#### 三人称・複数を多用している例

# 3 彼等は皆彼等の職に甚だ忠実なる批評家である。(11, p. 222, 1. 14)

---

<sup>iii</sup> 用例の末尾にそれぞれ、1. 調査資料で示した、「『夏目漱石全集 第十六巻』の所収作品の題目」に付した作品の番号と、ページ数、行数を示す。たとえば、# 1 の末尾に示したものは、(82, p. 568, 1. 13)となり、82 の作品「〔岡本一平『探訪画趣』序〕」で 568 ページ、13 行目を示している。また、表現に該当すると考えられる部分に二重下線を施している。

【表3-2-2 芥川龍之介の評論における欧文直訳表現】

森岡(1999)			用例数
項目	小項目	具体例など	
名詞	1 抽象名詞	有情の者としての働き, 受身, 断定, 使役	0
	2 無生物名詞の用法	擬人法, 受身, 使役, 断定	0
	3 抽象名詞目的語		0
代名詞	1 人称代名詞	彼・彼女	10
	2 代名詞の複合	self selves own	45
	3 非人称代名詞 it	天候・明暗・寒暖を述べるit	0
		句や節を受けるit	0
	4 指示代名詞	that, that of (～のそれ), those of	0
	5 不定代名詞とそれに類する表現	one of ～ …の一つ	18
		some of ～ …のあるもの	0
		much of ～/many of ～/most of ～ …の多く	0
		a kind of ～ …の種類	3
		one ～ the other 一は～他は, some ～ other 或る～他, 或る～或る, the first ～ the second 第一～第二	3
the former ～ the latter 前者～後者		0	
6 関係代名詞	half ～ half 半ば～半ば	0	
	partly ～ partly 一つは～一つは	0	
6 関係代名詞	which/that/who/where/what	6	
形容詞	1 比較級	より/～より尚/～より更に/～より一層	9
	2 最上級		7
	3 形容詞句	worthy of 値する 価値ある	1
		free from から自由で	0
		enough to ～すべく充分	0
too ～ to べく余り		0	
動詞・附助動詞	受身		0
	使役	let ～ do/make ～ do/have ～ do ～をして～しむ(擬人的な表現)	0
	進行形	つつある つつ ながら	0
	完了形	なんだりき など	0
	不定詞	～すべく/～することを/～と/～ために	0
	動詞・動詞句	have	2
		find	0
		give	0
		feel	0
		seem	0
		look	0
		belong to	0
		be obliged to	0
	used to ～を常とする	0	
	助動詞	must ねばならぬ	88
may かも知れぬ		81	
would shoud might たであらう		77	
接続関係 接続詞, 前置詞, 熟語	1 並列	a, b, and c	0
	2 after	後	0
	3 before	前に	0
	4 as soon as	や否や	1
	5 as ～ as possible, as ～ as ～ can	できるだけそれだけ	0
	6 as ～ as, so ～ as	だけそれだけ	0
	7 at the same time	同時に	6
	8 because, for	如何となれば/なぜならば…から	1

森岡(1999)			用例数
項目	小項目	具体例など	
接続関係 接続 詞, 前置詞, 熟語	9 not only ~ but ~	のみならず…また	11
	10 too ~ to ~	すべく余り	0
	11 the more ~ the more	すればするほど いよいよ	0
	12 rather than	よりは寧ろ	3
	13 without	ことなしに	0
	14 in spite of	にもかかわらず	0
	15 instead of	代り	3
	16 if	もし…ならば…であらう	7
	17 in order to	為に	0
	18 though	といえども	0
	19 倒置		0
20 挿入		0	
森岡(1999)以 外の表現など	one of the most		3
	it is time		1
合計			386

# 4 が、彼等自身をはじめ、彼等の父母妻子の人間たることさえ一度も真に知らずに来た彼等に、模糊たる史上の人物はどのくらい心臓を窺わせるであろうか？  
(11, p.231, 1.6)

# 3, # 4では「彼等」が1文の中で繰り返し使われている。

### 3. 2 代名詞の複合

self, selves, ownなどで、「自身」と訳されるものである。

# 5 が、彼等自身をはじめ、彼等の父母妻子の人間たることさえ一度も真に知らずに来た彼等に、模糊たる史上の人物はどのくらい心臓を窺わせるであろうか？  
(11, p.231, 1.6)

# 6 この差別それ自身に僕の賛成出来ないことは既に述べた通りであります。  
(13, p.26, 1.2)

# 7 この仕事の独創的なことはフランス人自身も認めてあるかどうか？  
(14, p.174, 1.2)

# 8 いや、技巧と内容とが一つになった、表現そのものの問題である。  
(3, p.290, 1.7)

# 5, # 6, # 7では「自身」が使用されている。# 8は「そのもの」が使用されている例である。

### 3. 3 不定代名詞とそれに類する表現

one of...や a part of..., a kind of..., a sort of...などの欧文直訳表現にあたる例が見られた。それぞれ以下に用例を示す。

**one of...**

# 9 しかしこう云ふ美しさを必要条件の一つとしているのです。(22, p.231, 1.6)

# 10 しかしこの話を作ったものは（若し「作った」と言われるとすれば）小説家でも何でもない当時の民の一人である。（14, p. 244, 1. 4）

# 11 事によると僕のこの雑感なども、その好い証拠の一つかも知れない。（6, p. 230, 1. 11）

# 12 たとへば武者小路実篤氏は真面目なる芸術家の一人である。（10, p. 85, 1. 8）

# 13 正岡子規の「竹の里歌」に発した「アララギ」の伝統を知っているものは、「アララギ」の同人の一人たる茂吉の日本人気質も疑わないであろう。（11, p. 194, 1. 8）

# 14 しかし、近代的富豪のハリケエン・ハツチに、――ハリケエン・ハツチもはり倒すほど、臆病なる彼等の一団に興味を持つかどうかは疑問である。（11, p. 203, 1. 2）

「～の一つ」などがパターンであると考えられるが、# 9「必要条件の一つ」、# 10「必要条件の一つ」、# 11「証拠の一つ」、# 12「芸術家の一人」、# 13「同人の一人」、# 14「彼等の一団」とそれぞれなっていることがわかる。

#### **a part of...**

# 15 筋らしい筋のない小説だの芝居だのを欲しいと云う心持ちもあるいはこう云ふ要求の一部の流れ出たものかも知れぬ。（14, p. 174, 1. 9）

# 16 少くとも女人の服装は女人自身の一部である。（13, p. 61, 1. 9）

# 12 では「要求の一部」、# 13 では「女人自身の一部」となっている。「～の一部」などがパターンとなると考えられる。

#### **a kind of... / a sort of...**

# 17 唯、一種の自働偶人なのだ。（5, p. 169, 1. 8）

# 18 況や前にも書いた通り、或種の著作権侵害だけは法律の庇護を受けていない。（11, p. 14, 1. 8）

# 17 「一種の～」 # 18 「或種の～」となっていることがわかる。

### the first ... the second 第一…第二

# 19 大久保湖州の作品は第一に「徳川家康篇」である。第二に「井伊直弼篇」である。  
第三に「遺老の実歴談に就きて」である。 (11, p. 223, 1.10)

# 20 第一に滝井君の文章です。…  
第二に滝井君の作品は Trivialism に落ちていると云ふことです。…  
(22, p. 330, 1.4)

# 19 では「第一に…第二に…第三に」となっている。# 20 の例では、「第一に…」として、段落が変わって、「第二に」となっていた。

### 3. 4 関係代名詞

関係代名詞の which, that, who, where, what などにあたる表現で、「トコロノ」がパターンとなっている。

# 21 これだけのことを述べた後、僕はまづ久米正雄君によつて主張され、近頃また宇野浩二君によつて多少の声援を与へられた「散文芸術の本道は『私』小説である」と言ふ議論を考へて見たいと思います。 (13, p. 21, 1.6)

# 22 この微妙な関係をのみこまない人には、永久に芸術は閉ざされた本に過ぎないだろう。 (5, p. 167, 1.4)

# 23 義眼の片目に人生を見ながら、道徳を説いてやまないものはストリントベルグの描いた男である。 (10, p. 85, 1.3)

上に示した、# 21, # 22, # 23 は関係代名詞節のパターンであると考えられる。しかし、「トコロノ」が使用されているものを見つけることはできなかった。

### 3. 5 比較級

「より」、「～より尚」、「～より更に」、「～より一層」などがパターンとして用いられる。

# 24 遠慮なく云ふと斎藤氏あるいは「アラアギ」派の歌壇に与へた影響は、武者小路氏或いは白樺派の文壇に与へた影響より一層大きくはないかと思う。

(6, p. 228, 1. 12)

# 25 寧ろ志賀さんの作品を模倣した人々よりも異色を持つてゐることこそ滝井君の作品の身上なのです。

(22, p. 332, 1. 2)

# 26 僕と同年代の作家達は、より人間らしい忠直卿や俊寛僧都を描いて居る。しかしそれらは、遅かれ早かれ「より、より人間らしい」に改められるであろう。

(14, p. 42, 1. 6)

# 27 この生なましさは、本朝の部には一層野蛮に輝いている。一層野蛮に？----僕はやっと「今昔物語」の本来の面目を発見した。

(14, p. 245, 1. 3)

# 24, # 26, # 27 からは more の欧文直訳表現が感じられる。また、# 25 は比較級のパターンを用いた用例となっている。

### 3. 6 最上級

以下の、# 28, # 29 は「もっとも～」となっており、最上級の訳出パターンに相当するものと考えられる。

# 28 最も素朴な心持は----譬へば男女相愛の情は源氏物語の中にあつても、やはり僕等を動かす筈である。

(14, p. 42, 1. 7)

# 29 この数篇の文章の中に軽佻の態度を求めるのは最も無理解の甚だしいものである。

(11, p. 187, 1. 3)

### 3. 7 形容詞句

worthy of は「価値がある」「値する」などがパターンになるとされている。

# 30 椎の葉の椎の葉たるを歎ずるのは椎の葉の筈たるを主張するよりも確かに尊敬に価してゐる。

(13, p. 49, 1. 6)

# 30 では「価してゐる」とパターン通りの表現が用いられた用例である。

### 3. 8 動詞・動詞句

have の直訳表現「持つ」が使用されているものを以下に挙げた。

# 31 凡兆は非常に鋭い頭を持ってみたらしい。(13, p. 255, 1. 3)

# 32 しかし、近代的富豪のハリケエン・ハツチに、---ハリケエン・ハツチもはり倒すほど、臆病なる彼等の一団に興味を持つかどうかは疑問である。

(11, p. 203, 1. 2)

### 3. 9 助動詞

助動詞の欧文直訳表現は用例数がとても多かった。以下に分けて、用例を示す。

#### 3. 9. 1 must

「ねばならぬ」に類した直訳表現が使用されていた。

# 33 たとへば詩と言ふものを考えて見ても、もし或形式に従つたものだけに詩と言う名前を与へようとすれば、あらゆる自由詩や散文詩は排除しなければなりません。

(13, p. 20, 1. 4)

# 34 が、もしこれが自分の寡聞の致す所だとするならば、勿論改めて教を本間君に請わなければならない。(3, p. 296, 1. 6)

(48, p. 325, 1. 10)

# 33 から # 34 とも「なければならない」といった表現が用いられていた。

#### 3. 9. 2 may

「かも知れぬ」が助動詞 may に対応する直訳表現である。

# 35 事によると僕のこの雑感なども、その好い証拠の一つかも知れない。

(6, p. 230, 1. 11)

# 36 いや、或時代の彼自身さへ他の時代の彼自身には他人のやうに見えるかも知れない。

(16, p. 28, 1. 7)



### 3. 9. 3 will / would など

will や would の欧文直訳表現として「であらう」や「たであらう」などが考えられる。

- # 37 しかし「一本道」の連作ほど沈痛なる風景を照らしたことは必ずしも度たびはなかつたであらう。(11, p.195, 1.1)

### 3. 10 as soon as

「や否や」という as soon as の欧文直訳表現が見られた。

- # 38 それから女は妻となるや否や、家畜の魂を宿す為に従順そのものになるのである。(13, p.47, 1.1)

### 3. 11 at the same time

at the same time にあたるものとして「同時に」が欧文直訳表現だとされている。

- # 39 同時にまた、一面では生活様式の変化と共に小説ほど力を失うものはない。(14, p.42, 1.3)
- # 40 同時にまた、或人々の云うように、如実に人生を描いていないから尊いものではないとも思っていない。(14, p.43, 1.15)
- # 41 同時に又わたしたちを支配する天上の神々を発見することである。(16, p.25, 1.5)

### 3. 12 because, for

because や for は欧文直訳表現では「如何となれば」「なぜならば…から」となるとされる。

- # 42 なぜまた常談と見るかと言へば、僕は僕等日本人の生んだ「本格」小説的作品の中に源氏物語はしばらく問はず、近松の戯曲、西鶴の小説、芭蕉の連句等を数へることを、----いや、それよりも宇野君自身の二三の小説を数へることを大慶に思っているからであります。(13, p.26, 1.8)

### 3. 13 not only ... but (also)

not only ... but also は「のみならず…また」という欧文直訳表現になると考えられる。

# 43 あれは晦渋を極めてゐるやうですが、決して下手な文章ではありません。のみならず非常に凝った文章です。(22, p. 330, 1. 4)

# 44 その場合僕は友誼上、あるいは慣例上一応菊池の許可を待った後、戯曲に書き直すのに違いない。のみならずその原稿料乃至上場料の何割かはちやんと菊池にも奉納するであろう。(11, p. 11, 1. 7)

# 45 尤も僕の詩的精神といふのは、必ずしも西洋詩的精神ばかりではなく、東洋詩的精神もやはりその中に入るものである。(14, p. 43, 1. 13)

# 46 従つてまたこの世界に出没する人物は、上は一天万乗の君から下は土民だの盗人だの乞食だのに及んでゐる。いや、必ずしもそればかりではない。観世音菩薩や大天狗や妖怪変化にも及んでいる。

(14, p. 248, 1. 13)

# 47 我々はパスカルに言つたように、ものを考へる蘆である。が、そればかりではない。一面にはものを考へると共に、他面にはまたしつきりなしにもの感ずる蘆である。

(11, p. 213, 1. 11)

「のみならず」とする例と、「そればかりでない」とする例があつた。

### 3. 14 rather than

rather than に相当する欧文直訳表現として「よりもむしろ」というものが考えられる。

# 48 殊に田野村竹田は、……………大いなる芸術家といふよりも寧ろ善い芸術家だつた竹田はこの老いたるディレツタントの前に美しい敬意を表した。

(11, p. 211, 1. 9)

# 49 のみならず男女の差別よりも寧ろ男女の無差別を示してゐるものと云はなければならぬ。

(13, p. 61, 1. 7)

# 50 我我を恋愛から救ふものは理性よりも寧ろ多忙である。(13, p.91, 1.8)

### 3. 15 instead of

「代り」という欧文直訳表現になる。

# 51 けれどもこの立志譚は尊徳に名誉を与へる代りに、当然尊徳の両親には不名誉を与へる物語である。(13, p.55, 1.11)

### 3. 16 if

「もし…ならば…であらう」という仮定法の欧文直訳表現が見られた。

# 52 若し僕を目するのに「本格」小説だけに礼拝する小乗管せうじようしやうふんの徒とするならば、それは僕のゑん冤ばかりではない。同時にまた日本の文壇に多い「私」小説の諸名篇に泥を塗ることにもなるでありませう。(13, p.26, 1.13)

# 53 若し真に一読するに足る自叙伝を得たいと思ふとすれば、僕はまづ近松さんの自叙伝に指を屈するであらう。(13, p.218, 1.7)

# 54 僕の記憶を信用するとすれば、塩谷商会の主人塩谷高貞は藤沢浅次郎、支配人大石良雄は高田実、ロシア人モロノツフ(!)は五味国太郎、大体こう云ふ役割だつたであらう。(14, p.175, 1.13)

# 55 もしまた紅毛人の言葉を借りるとすれば、これこそ王朝時代の Human Comedy (人間喜劇) であらう。(14, p.248, 1.15)

# 56 僕はこの耳を得なかつたとすれば、「無精さやかき起こされし春の雨」の音にも無関心に通り過ぎたであらう。(11, p.189, 1.15)

「もし」が使用されているものとされていないものがあった。

### 3. 17 その他の表現

森岡(1999)で指摘されなかった表現で、他の先行研究での指摘があるものや、その他に直訳的な表現であると考えられる表現で収集したものを以下に示す。

### one of the most

「最も…のひとつ」という直訳的な表現が考えられる。

# 57 いや、湖州は明治の生んだ、必ずしも多からざる才人中、最も特色ある一人である。  
(11, p. 221, l. 14)

# 58 僕は前にも書いたやうに近松さんの作品に感心するのに最も遅かつた一人である。  
(13, p. 219, l. 16)

# 59 僕はこの話を『今昔物語』の中でも最も叙情的な話の一つに数へてゐる。  
(14, p. 247, l. 8)

### it is time

「…してもいい時」などの欧文直訳表現が考えられる。

# 60 我我は処女を妻とする為にどの位妻の選択に滑稽なる失敗を重ねて来たか、もうそろそろ処女崇拜には背中を向けても好い時分である。  
(63, p. 417, l. 12)

#### 4 まとめ

芥川龍之介の評論を資料として欧文直訳表現がどのように見られるのか調査を行った。色々な表現がみられたが、それほど表現の種類は多くはなかったと思われる。助動詞の欧文直訳表現が多数を占めていたが、その他の表現はあまり数量としては多くないようであった。また、森岡(1999)での指摘のない表現で、他の先行研究にも指摘がある表現も見られた。

## 第3章 第3部のまとめ

### 1 漱石作品と芥川作品に見られた欧文直訳表現

第3部においては、第1章では夏目漱石の作品を、第2章では芥川龍之介の作品を資料として、欧文直訳表現の使用について調査をした。いろいろなものがみられる。

第1章と第2章での欧文直訳表現の用例数をまとめ、次ページからの【表3-3-1】に示す。なお、【表3-3-1】においては、用例が現れなかったことがわかりやすくなるように、用例数0の用例には数字を付していない。

【表3-3-1】を見ると、漱石作品でも、芥川作品でも、助動詞に関する欧文直訳表現が多いことがわかる。数量からみるとかなりの割合をどちらも占めていることがわかる。用例数自体も漱石の方が多くなっているが、用例が得られた表現の種類の豊富さでも、漱石の方が多くの表現を使用していることが見てとれる。漱石が使っていない表現で、芥川だけが用いているものがないことからそれがわかる。本研究の調査によると、芥川よりも漱石の方が欧文直訳表現を多く、しかも種類を多く使うということが言える。

### 2 欧文直訳表現と漱石、芥川の関わり

第3部の調査によって、日本人による日本語文において、欧文直訳表現が使用されていることがわかった。特に、英語に精通していると考えられる人物の文章を調査対象に選んだので、欧文直訳表現が出現しやすかった可能性もある。漱石は明治20年ごろから、また芥川はそれ以降に本格的に英語を学んでいることから、欧文訓読の訳出法を学んでいた可能性も高い。

また、先行研究の指摘以外のもの表現で欧文直訳表現と考えられるものもみられた。

### 3 ジャンルによる違い

本研究の第3部の調査では、資料のジャンルとしては小説を避けて、評論を中心とした作品の分析を行った。理由としては、文体による表現の制限の影響を受けないようにするためである。しかし、まだ予測ではあるが、今後研究を進めるにあたって、小説や随筆などについても分析を行うと又違った様相の欧文直訳表現の出現の仕方が見られる可能性もある。これについては、今後の課題としたい。

【表3-3-1 夏目漱石の評論と芥川龍之介の評論における欧文直訳表現】

項目	森岡(1999)		用例数		
	小項目	具体例など	漱石	芥川	
名詞	1 抽象名詞	有情の者としての働き, 受身, 断定, 使役			
	2 無生物名詞の用法	擬人法, 受身, 使役, 断定	9		
	3 抽象名詞目的語				
代名詞	1 人称代名詞	彼・彼女	40	10	
	2 代名詞の複合	self selves own	17	45	
	3 非人称代名詞 it	天候・明暗・寒暖を述べるit 句や節を受けるit			
	4 指示代名詞	that, that of (～のそれ), those of			
	5 不定代名詞と それに類する表現	one of ～ …の一つ		22	18
		some of ～ …のあるもの			
		much of ～/many of ～/most of ～ …の多く			
		a kind of ～ …の種類		38	3
		one ～ the other 一は～他は, some ～ other 或る～他, 或る～或る, the first ～ the second 第一～第二		6	3
		the former ～ the latter 前者～後者	1		
	half ～ half 半ば～半ば				
	partly ～ partly 一つは～一つは				
6 関係代名詞	which/that/who/where/what	48	6		
形容詞	1 比較級	より/～より尚/～より更に/～より一層	10	9	
	2 最上級		2	7	
	3 形容詞句	worthy of 値する 価値ある	1	1	
		free from から自由で			
		enough to ～すべく充分			
	too ～ to べく余り				
動詞・補助動詞	受身				
	使役	let ～ do/make ～ do/have ～ do ～をして～しむ(擬人的な表現)	1		
	進行形	つつある つつ ながら	37		
	完了形	なんだりき など			
	不定詞	～すべく/～することを/～と/～ために			
	動詞・動詞句	have		9	2
		find			
		give			
		feel			
		seem			
		look			
		belong to			
		be obliged to			
used to ～を常とする					
助動詞	must ねばならぬ		87	88	
	may かも知れぬ		100	81	
	would shoud might たであらう		37	77	
接続関係 接続詞, 前置詞, 熟語	1 並列	a, b, and c	3		
	2 after	後			
	3 before	前に			
	4 as soon as	や否や	2	1	
	5 as ～ as possible, as ～ as ～ can	できるだけそれだけ	2		
	6 as ～ as, so ～ as	だけそれだけ	2		
	7 at the same time	同時に	3	6	
	8 because, for	如何となれば/なぜならば…から	5	1	

森岡(1999)			用例数	
項目	小項目	具体例など	漱石	芥川
接続関係 接続 詞, 前置詞, 熟語	9 not only ~ but ~	のみならず…また	13	11
	10 too ~ to ~	すべく余り		
	11 the more ~ the more	すればするほど いよいよ	5	
	12 rather than	よりは寧ろ	7	3
	13 without	ことなしに		
	14 in spite of	にもかかわらず	7	
	15 instead of	代り	5	3
	16 if	もし…ならば…であらう	3	7
	17 in order to	為に		
	18 though	といえども		
	19 倒置		2	
20 挿入				
森岡(1999)以 外の表現など	in other words		7	
	it is necessary to do		3	
	one of the most~		1	3
	from ~ to		9	
	or			
	it is time		2	1
合計			546	386



## 終章

終章においては、第1部、第2部、第3部での調査の結果をまとめ、本研究全体を通した結論を導き出す。

### 1 結論

#### 1.1 第1部から第3部までの結果

第1部では、欧文直訳表現のもとになったとも考えられる欧文訓読の動詞に関する訳出法について調査・分析を行った。その結果、欧文訓読の訳出法が非常に機械的なものであったことがわかった。そこには、英語と日本語の強固な対応関係があった。原文を一語も残らず訳文へと変換する方法で、欧文訓読がなされていることがわかった。また、資料として使用した *New National Reader* の訳本の翻訳者の違いによる影響はあまり見られなかった。

第2部では、英語教育・英語学習以外の翻訳文における欧文直訳表現について調査・分析を行った。その結果、欧文直訳表現はあまり見られないことがわかった。第2部第2章では、関係代名詞に絞って、詳細な分析を行った。その結果、表面上は欧文直訳表現とは見られない訳出法であったが、そこには、欧文訓読による影響によるものである可能性を指摘することができた。読者の内容理解が最優先となるため、資料の性格が欧文直訳表現を避けたものと考えられる。

第3部では、翻訳文以外の、日本人が日本語として表現した資料を使用して、欧文直訳表現がどのように現れるのか調査・分析を行った。その結果、先行研究に指摘される欧文直訳表現が多く見られた。夏目漱石と芥川龍之介の作品についてそれぞれ調査・分析を行ったが、芥川よりも漱石の方が欧文直訳表現を多く使い、また、使われる欧文直訳表現の種類も多いことがわかった。

#### 1.2 全体を通しての考察

以下で、前節の結果を踏まえた、全体を通しての考察を行う。

##### 1.2.1 外国語からの影響

言語に大きな変化が起こる時には、外国語による影響がその原因のひとつとしてあげられるだろう。外国語からの影響による日本語の大きな変化は、現在までに2回あったと考えられる。一度目は、古代における中国語からの影響である。そして、二度目は、幕末・明治期から現在に至るまでのヨーロッパ語、特に英語による影響である。

外国語による影響については、漢語、漢文訓読、外来語、訳語、欧文直訳表現などが考えられるが、これらはいくつかに分けて考えることができる。

まず、それが日本語へ取り入れられる際にどのように取り入れられたかということで分けられる。

漢語や外来語は、外国語の単語をそのまま取り入れるものである<sup>i</sup>。訳語は原語からの翻訳をした漢字列であり、漢文訓読や欧文直訳表現などは翻訳から取り入れたものと考えられる。つまり、漢語や外来語が直接的な取り入れであるのに対し、訳語や漢文訓読、欧文直訳表現は翻訳を介した間接的な取り入れになる。以下、【図4-0-1】にそれらの違いを表した。

【図4-0-1 外国語からの影響の違い】

直接的な移入	間接的な移入
漢語 外来語	訳語 漢文訓読 欧文直訳表現

また、取り入れる単位を考えると、漢語や外来語、訳語は語彙のレベルでの影響といえるが、漢文訓読や欧文直訳表現は、語法や文体、文法的な影響といった、語彙よりも大きな単位での影響である。

【図4-0-2】にそれらの違いを表した。

【図4-0-2 外国語からの影響の単位の違い】

語彙	句・文・文法
漢語 外来語 訳語	漢文訓読 欧文直訳表現

### 1. 2. 2 日本語へと取り入れられる仕組み

これらの影響は、その原因となる外国語からの影響を受ける以前とは異質なものを含んでいるために、取り入れ始めたばかりの頃は相当な違和感があったと推察される。しかし、現在の日本語において、漢語や外来語、訳語がなくてはならないものになっていることを考えると、その異質性は薄れ、日本語と融合していると考えられる。そこには、繰り返し使用したことで、それらの影響の異質性を薄れ、日本語へと浸透したとすることができるだろう<sup>ii</sup>。

<sup>i</sup> 「そのままの取り入れ」であるとしているが、実際には、漢語、外来語ともに、日本語に適應するための音韻の変化などがある。ここでは、単純化して考えることにする。

<sup>ii</sup> 吉岡(1973)では、「現代日本語にみられるそういう外来の文脈—欧文脈（それも特に英語の文脈）の影響の諸相、いいかえるならば、いわゆる「翻訳体」の日本語化」としている。また、木坂(1979)では、「欧文脈は本来、対日本語的表現としての異質性をもつものであり、それらが日本語表現の中で同化融合をはたすという矛盾的変遷をとげる。したがって、同化融合は一時に完成するものではない。西欧文明・文化の移入から独自の近代文化の創造の経緯の中で、消長発展する文章脈として、歴史性をもっている。」とする。

これらの影響は、日本語の中に存在する際には、見かけが日本語と同じであることに注意しなければならない。特に、翻訳を通した間接的な影響については、翻訳という作業がそれを強めることになる。外国語から日本語への変換という翻訳という作業を通していけば、当然、日本語である。しかし、見かけが日本語と同じであっても、やはり、違和感が伴うことがある。翻訳という作業がそれを裏付ける。原語に近く訳されることで、日本語としての違和感が残るのである。

### 1. 2. 3 翻訳における自然さと忠実さ

翻訳学では、原文と訳文が等価かどうかということが、訳文の質を評価する手段となっている。観点によって、その評価の尺度は変化するが、ここでは、起点言語（原文の言語）に忠実か（*literal*）、目標言語（訳文の言語）として自然か（*local*）といった尺度が前節で述べた違和感について考える際の鍵になると考える。ここで、*literal*、*local* という尺度で *literal* に傾いた場合に、その訳は起点言語の特徴を引き継いだ訳となる。その際には、訳文は目標言語としては不自然なものとなる。また、*local* に傾いた場合には、訳文は目標言語として自然なものとなり、原文には厳密に忠実であるとはいえないものとなる。つまり、これを英語から日本語への翻訳に当てはめた場合には、*literal* な翻訳である時には、日本語としては不自然な訳文になり、英語の特徴を引き継いだ訳文となる。また、*local* な翻訳である場合には、原文には必ずしも忠実とは言えないが、日本語としては自然な訳文となる。

### 1. 2. 4 欧文訓読と漢文訓読

欧文訓読を考える際に、その範となった漢文訓読について考える事が必要になるだろう。漢文訓読は、原文を一つも変更せずに返り点などを施して語順を変更し、日本語に置き換えるという作業であった。特に、いろいろな訓読の流派がある中で、他の流派よりも返り点等が少ない方法をとる流派が幕末明治期に大勢をもつようになったことも、その特徴と関係があるのかもしれない<sup>iii</sup>。これは、原文を一つも変えずに訳文を作成するという、原文重視であることから、方法としては、*literal* な翻訳法であるといえるだろう。その結果、訳文では日本語として不自然であることは否めない。漢文調、漢文体などと、文章や文体の特徴として挙げられることからそのことはわかる。当然のことではあるが、特徴として名称があるということは、日本語の表現としては特徴のあるものであるということである。

したがって、漢文訓読と同じような方法をとった、欧文訓読もやはり、原文を重視した翻訳法であったということが言える。欧文訓読も原文の単語を一語も残さずに訳し、順番を日本語の語順に変更して訳文とする方法である。つまり、*literal* な翻訳法ということになる。そのため、欧文訓読の方法で訳された訳文は英語の特徴をもった、日本語としては不自然な訳文になる。

---

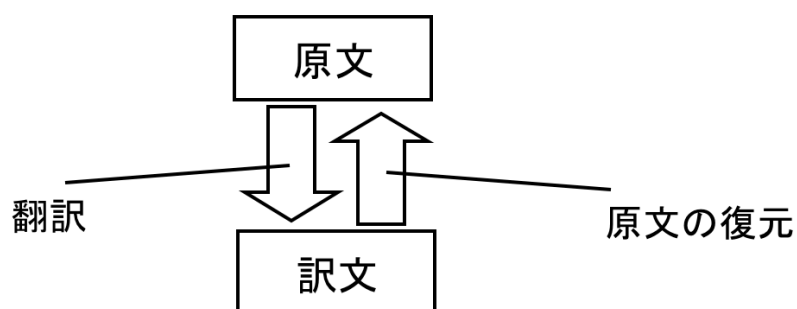
<sup>iii</sup> 齊藤(2012)による。

### 1. 2. 5 欧文訓読による英語と日本語との関係

日本語としては不自然な訳文を作り出す、欧文訓読をもとにした欧文直訳表現は、英語教育や英語学習の場で広まっていったとも考えられる。欧文訓読が、英語教育や英語学習の場で使用された方法だということは、学習者は欧文訓読を学習中何度も行うことになる。繰り返し、訓読を行うことで、英語と日本語の対応関係が密になると考えられる。

以下に【図4-0-3】で欧文訓読における原文と訳文の関係を示した。

【図4-0-3 欧文訓読における原文と訳文の関係】



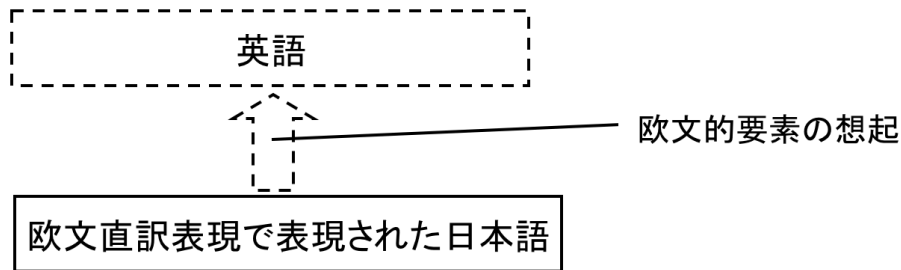
原文を翻訳すると訳文ができる。欧文訓読の方法であれば、原文と訳文の対応関係が明確で、また結びつきが強いため、逆に、訳文から原文の復元も可能となる。これは、一語も残さずに翻訳を行うという訓読の原文重視の性格からのものである。第1部では、do や be 動詞の訳が常に固定していたことが分析の結果わかったが、特に do は否定、疑問、命令（禁止）など常に「ナス」という訳語が固定しており、不必要であっても訳される仕組みであった。つまり、そのように訳文においても、原文が見えるような訳出法を行っていることから、訳文から原文への復元も可能であるといえるだろう。

### 1. 2. 6 欧文的要素の想起

前節で欧文訓読による学習によつての英語と日本語の対応関係の結びつきが強くなることで、訳文から原文への逆の復元もできるとした。

そのような、対応関係があることで、原文がないところにおいても、欧文訓読の訳出パターン、つまり、欧文直訳表現を使用することで、日本語から欧文的要素が想起されるのではないだろうか。下に示した【図4-0-4】にその仕組みを表した。

【図 4-0-4 欧文的要素の想起の仕組み】



欧文直訳表現で表現された日本語からは、対応する英語の表現が透けて見えるように想起されると考えた。つまり、【図 4-0-4】は【図 4-0-3】から原文を省いたものであって、欧文訓読による一語一対応の英語と日本語の結びつきがあるからこそ、英語が欧文直訳表現の向こうに透けて見えるときに直訳的だと感じるのだと考えられる。だからこそ、第 2 部で使用したような、英語学習が目的ではない資料においては、この欧文的要素が違和感として感じられてしまうため、欧文直訳の方法で翻訳を行うことが避けられたのだと考えられる。

#### 1. 2. 7 欧文直訳表現の特徴

欧文直訳表現は日本語でありながら、その起源が欧文（特に英語）からの翻訳であるという特徴をもつ。そのため、訳語や漢語、外来語などのように、外国語と日本語が一語ずつ対応するという関係ではない。そのために、欧文訓読で用いられていた表現が、翻訳以外の日本語での表現で使用される時には、必ずしも同じ表現をとるということは断言できないであろう。

また、欧文直訳表現をそれが欧文起源の翻訳による表現だということを学習する場合は、おもに外国語教育や学習の場においてだろう。直訳的だと感じるのは、欧文的な要素を感じるということであり、欧文について学習しないことには、それが欧文的と感じるためのものがないということになる。

#### 1. 2. 8 欧文訓読表現の個人差

外国語学習が欧文直訳表現のもとになると、欧文直訳表現から外国語が透けて見える人と見えない人の差が出てくる可能性がある。つまり、外国語学習のレベルによっては、ある表現について、日本語の表現としか感じられない人もいるだろうし、欧文直訳表現だと感じる人もいるだろう。表現に対する慣れも関係する可能性があるため、学習のレベルに関係なく、自然な日本語として受け入れられたり、また、逆に違和感が伴うと云うこともあるだろう。

個人差があるために、欧文直訳表現と感じるかどうかは人により異なる。欧文的な要素を感じなければ、欧文直訳表現とは指摘できない。研究者による指摘の範囲の違いも、ここに原因があるかもしれない。本研究で見られた先行研究の指摘以外の表現についても、そこに関係している可能性もある。また、第 3 部で見たような、漱石の方が芥川よりも多くの欧文直訳表現を使用しているということも、

その個人差によるところがあるかもしれない。

### 1. 3 全体を通しての結論

欧文訓読の訳出法において英語と日本語の対応関係が強固な仕組みを持つことは、第1部を通して確認できた。さらにそれは、学習の場で繰り返し使用されることで、欧文直訳表現は広まってきたと考えられる。その英語と日本語の結びつきにより、原文がない日本語での欧文直訳表現から欧文的な要素の想起が可能になると考えられる。英語教育や英語学習以外の翻訳文においては、読者の内容理解を妨げないため、また、翻訳文としての高さを保つためになど、その翻訳における目的によって、欧文的要素、つまり、欧文直訳表現が避けられる場合があることが第2部において確認できた。また、翻訳ではない、日本語の表現の中にも欧文直訳表現が現れていることが第3部にて確認できた。それには、使用する表現の種類や数量などについて個人差がある可能性も指摘できるだろう。

## 2 今後の課題

今後の研究の広がりとしては、近代日本語の成立との関係や、古代からの翻訳の歴史との関係などと結びつけていくことが出来ると考えられる。そのためには、さらなる調査資料や調査対象の範囲の拡大、また詳細な研究が必要になるだろう。今後、研究を深めていく上で、より広い視野で欧文直訳表現をとらえていくということを今後の課題としたい。

## 【参考文献】

- 乾 亮一 (1958) 『国語の表現に及ぼした英語の影響』国語シリーズ No. 40 (文部省)
- 梅林 博人 (2000) 「近代小説に見る接続詞「そして」  
—翻訳調といわれる「AそしてB」をめぐる—」  
(『国文学 解釈と鑑賞』65巻7号, 至文堂)
- 小川 明 (2005) 「英語と日本語の名詞句の長さの比較 :  
なぜ英語の関係代名詞節は日本語に直訳すると不自然になるのか」  
(英語英文学研究 vol. 11, 東京家政大学)
- 木坂 基 (1976) 『近代文章の成立に関する基礎的研究』(風間書房)
- 木坂 基 (1979) 「欧文脈の消長」(『言語生活』335, 筑摩書房)
- 木坂 基 (1982) 「近代文章の成立に欧文脈はどんな役割を果たしたか」  
(『国文学』27-16, 学燈社)
- 木坂 基 (1988) 『近代文章成立の諸相』(和泉書院)
- 小林 実 (2006) 「エキゾチズムの体感—西洋文化の内面化と翻訳文体—」  
(『立教大学日本文学』96, 立教大学日本文学会)
- 齋藤 文俊 (2011) 『漢文訓読と近代日本語の形成』(勉誠出版)
- 齊藤 美野 (2012) 『近代日本の翻訳文化と日本語—翻訳王・森田思軒の功績—」  
(ミネルヴァ書房)
- 佐藤 喜代治編 (1977) 『国語学研究事典』(明治書院)
- 鹽田 良平 (1932) 「日本文體に及ぼしたる西洋文體の影響」(『岩波講座 世界文学 7  
現代の文学及諸美術 (2) 日本文学と西洋文学』)
- 柴内幸子・高井敦子 (1967) 「欧文直訳体とその影響」(『東京女子大学日本文学』29)
- 鈴木 直枝 (2000) 「明治期の英文和訳にみる訳出法」  
(『文芸研究』150集, 日本文芸研究会)
- 鈴木 直枝 (2004) 「翻訳文の言文一致」  
(飛田良文編『国語論究 第11集 言文一致運動』明治書院)
- 末廣 美代子 (1980) 「欧文直訳体の時制について」  
(『国文目白』19, 日本女子大学国語国文学会)
- 高梨 健吉 (1970) 「ナショナルリーダーと国語読本」(『英学史研究』2, 日本英学史学会)
- 直原 利夫 (1973) 「開化期のリーダーの話」(『言語生活』256, 筑摩書房)
- 日本近代文学館編 (1977) 『日本近代文学大事典』(講談社)
- 野原 佳代子 (2001a) 「翻訳における異質さの転移について  
—ポピュラー小説の翻訳を一つのモデルとして—」  
(『学習院大學國語國文學會誌』44)
- 野原 佳代子 (2001b) 「翻訳理論と日本語研究」(『学習院大学文学部研究年報』第47輯)

- 飛田 良文 (1992) 『東京語成立史の研究』(東京堂出版)
- 飛田 良文ほか編(2007) 『日本語学研究事典』(明治書院)
- 飛田 良文 (2008) 「「英文典直訳」と欧文直訳体」  
(『日本語の研究』Vol. 4, No. 1, 日本語学会)
- 古田 東朔 (1963) 「訳語と翻訳文体」(『國文學 解釈と教材の研究』8巻2号, 學燈社)  
(再録: 鈴木泰ほか編(2012)『古田東朔 近現代 日本語生成史コレクション第1巻 江戸から東京へ-国語史1』(くろしお出版))
- 森岡 健二 (1968) 「翻訳における意識と直訳」  
(「言語生活」2月号, No. 197, 筑摩書房)
- 森岡 健二 (1999) 『欧文訓読の研究—欧文脈の形成—』(明治書院)
- 八木下 孝雄 (2010) 「明治期英語教科書の訳本における動詞の訳出パターン  
—三上精一訳『ニューナショナル第一リードル独稽古』を資料として—」  
(『明治大学大学院文学研究論集』32号)
- 八木下 孝雄 (2011a) 「明治期英語教科書の訳本における動詞・助動詞の訳出パターン  
—三上精一訳『ニューナショナル第二リードル獨學』を資料として—」  
(『明治大学大学院文学研究論集』34号)
- 八木下 孝雄 (2011b) 「明治期英語教科書の訳本における動詞・助動詞の訳出パターン  
—島田奚疑訳『ニューナショナル第三読本直訳』を資料として—」  
(『言語文化研究』10号, 静岡県立大学短期大学部静岡言語文化学会)
- 八木下 孝雄 (2012) 「明治期翻訳文学作品における欧文直訳表現  
—コナン・ドイル著『ボスコム谷の謎』を資料として—」  
(『明治大学大学院文学研究論集』37号)
- 八木下 孝雄 (2013) 「*Self-Help*の明治期翻訳二種に見る訳出の様相  
—関係代名詞節を対象に—」  
(『文学語学』207, 全国大学国語国文学会)(掲載予定)
- 柳父 章ほか編(2010) 『日本の翻訳論 アンソロジーと解題』(法政大学出版)
- 柳父 章 (1980) 「西歐的発想と表現—翻訳で造られた日本「文」」  
(『國文學 解釈と教材の研究』25巻10号, 學燈社)
- 山田 孝雄(1939) 『漢文の訓読によりて伝えられたる語法』(寶文館)
- 山本 正秀(1965) 『近代文体発生の史的研究』(岩波書店)
- 吉岡 正徹 (1973) 「現代日本語における欧文脈の影響—「翻訳体」の日本語化—」  
(『言語生活』256, 筑摩書房)
- 吉田 精一 (1950) 「欧文脈の影響」(『国文学 解釈と鑑賞』15巻4号, 至文堂)
- 吉田 信 (1985) 「英文直訳体について—無生物・抽象観念を主語に取る場合」  
(『愛知大学文学論叢』80)



吉武 好孝(1959) 『明治・大正の翻訳史』(研究社)

吉村 明子 (1963) 「明治の文体—特に欧文体を中心として—」

(『東京女子大学日本文学』21)

Ichikawa, Sanki, 1928, “ English Influence on Japanese ”

(『英文學研究』第八卷二号, 帝大英文學會)

Munday, Jeremy, 2008, *Introduction Translation Studies*, New York: Routledge.

(=鳥飼玖美子監訳(2009)『翻訳学入門』(みすず書房))

Pym, Anthony, 2010, *Exploring Translation Theories*, London and New York: Routledge.

(=竹田珂代子訳(2010)『翻訳理論の探求』(みすず書房))